
DEAD

鼻セレブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEAD

【Zコード】

Z5972C

【作者名】

鼻セレブ

【あらすじ】

主人公岡村一樹が非日常的惨劇を舞台にどう生き抜いていくかを描いたストーリーです。

1・序章（前書き）

初めての執筆なので至らない点ばかりで掲載も遅くなるかもしれません
せんが何卒了承ください。

1・序章

とある裏路地で . . .

真面目そうな青年と容姿からして不良とゆう言葉が合づ一人組みが何やら会話をしていた。

不良1

「てめえなにガンつけてんだよ！喧嘩売つてんのか！？」

*

「見てないですよ、もし気分を悪くしたのなら謝りますよ。」

不良2

「んなもんどうだつていいんだよ！早く財布出せつて喧嘩つてんだよ！」

*

「それは困るんでどうか許してもらえないですかねえ。」

*

不良2の右フックが*の頬にヒットする

不良2

「謝らうがなからうがてめえはボコボコにさつえ . . . 」

不良2が話してる途中にヤンキー2の腹を殴りつけ間髪入れず横顔に蹴りをぶち込んだ！！不良2は倒れこんだまま起き上がりつてこなかつた。

*

「そあゆう事なら先に言つてよお、おー痛え。」

そお言いながら頬をさすりながら不良1を見る。不良1がどこから出したのか手にナイフをもつて叫んだ。

不良1

「てめえなめてんじゃねえぞ！…ぶつ殺してやりあー。」

*

「まで！話せば分かる、話そおじやないか。」

不良1

「るせえ！」

不良1が飛び掛ってきたがそれを*はナイフの腕をとりそのまま腕を肘で殴りつけた！ベキッ！とゆう鈍い音が響く。

不良1

「うぐがあ～」

不良1は腕を押されて転げまわつてゐる。

「だから話しあつて言つたのに。まあいいやもう用がないなら帰るよお。あつあと喧嘩売るなら相手を良く見ないとね。」

「おかむらかずき

そこを何事もなかつたかのように帰路に着く男の名前は岡村 一樹 年齢23歳は喧嘩ばかりした結構な不良とゆうか悪いとゆう言葉が當時ではまるいことは人一倍やつたと言えばわかりやすいだろう。

自宅に着きドアの鍵をあけようとした。

一樹

「んつ！？開いてる？」

用心しながら家に入りLDKの部屋の中に入ろうとドアに手をかけ開けた瞬間！

* 1

「HAPPY BIRTH DAY 一樹～！」

待つてましたと言わんばかりにケーキを強引に顔面に押し付けられた。

* 2、* 3

「HAPPY BIRTH DAY～！」

それをタイミング良くクラッカーの音が響いた。

一樹

「 . . . 」

ケーキを手で拭い三人を見つめると。

一樹

「いくつか聞きたいことがあるんだが、これを提案したのは誰だ？直美だろ！？あとどおりやつて部屋に入った！」クラッカーを鳴らした一人で一樹と通っていた高校は違うが片思いをしている田木 直美^{たきなあみ}年齢23現役看護師だ。

直美

「は～い私が計画したんだよ、もおバツチリ決まっちゃって言う事なしじゃない？一樹だつておいしそうにして思つてるくせにい。あつ一人だけおじさんがいる。（笑）」

満面の笑みで答えた。

* 2

「鍵は兄貴さんから借りたんだ、理由言つたら俺も参加したいが用事があるとかいってマジ残念そうにしてたぞ。」

こいつ高校時代の後輩でやんちゃ仲間、後輩だがタメで連るんでる、名前は岩田 信年齢22

一樹

「兄貴は来なくていい！」

* 1

「まあまあ来なかつたからまあいいじゃないの、でも俺兄貴さん好きだぜ。」

ケーキを投げつけてくれたこいつは板垣 隆^{いたがきたかし}年齢23こいつは中

学からずっと何やるにも一緒に腐れ縁。

直美

「じゃあ話がついたとこでパーティ始めようよお。ちゃんとしたケーキもあるしね。」

一樹

「そおだな一樹突つ立つてないで顔洗つて早く来いよ。」

隆

信

「どうしたの？ボーッとして…もしかして嬉し過ぎて感極まつちつ
た系？」

足元の顔にぶつけられたケーキの残骸を見て

一樹

「これ誰が掃除すんだよ！」

直美、隆、信

「一樹！（笑）」

一樹

「…最後に一つだけ言わせてもらひが…俺の誕生日は明日

だ！！！」

直美

「あつ。」

隆、信

「えつ！？」

そお言い放つた後一樹は洗面所に向かった。

直美

「私掃除しよお～つと」

責任を逃れるかのように掃除を始める直美

隆、信

「…」

隆と信は沈黙の後洗面所から出てきた一樹にあれやこれやと弁解す
るが一樹は聞く耳をもたなかつた。隆と信は落ち込んだが

一樹

「バ～力嘘だよ怒つてないよ、誕生日前だらつがしてくれて嬉しく
ない訳ないだろ。」

一樹はしてやつたりで高らかに声を上げて笑つた。

隆

「てえめ～！だましやがつて、今日は朝まで飲むからなあ～寝れる
と思つなよ～」

信

「そおだ！日付け変われば誕生日だからひょうひょういいしな。」
三人は取つ組み合いながら腹のそこから笑った。掃除を終えた直美
が、部屋にやってきた。

直美

「あれ？ 一樹口から血が出てない？」

一樹

「ああここ帰つてくる前にカツアゲにあつてさあ、そん時にちよ
つとね。」

信

「えつ！ まさかやられたの？」

一樹

「ないない、先に一発食らつてやつて一蹴してやつた。（笑）」

隆

「こいつがそいらへんの奴5、6人でもやられやしねえよ。」

直美

「そおゆう問題じゃないでしょ！ もお学生じゃないんだからそおゆ
うのやめてね、一樹に何かあつてからじや遅いんだからね！
そう言いながら口端に絆創膏を貼つた。

一樹

「はい、以後気をつけます。」

直美

「分かつたならよろしい。今度なんかゴチね。」

一樹

「何でだよ！」

信

「夏でもねえのにあつち～なあ！（笑）」

隆

「まあそお言つなよ、あつ信クーラーつけて。（笑）」

一樹

「お前らもお許さねえ！飲め！」

隆と信にペールを口に無理やり流しこんだ。

直美

「アハハハ、やれやれ！」

一樹

「お前にはこれだ！」

ケーキを軽く一掴み取ると直美の口に押し込んだ。

直美

「ちよっやめ、ん～～～～～～！」

四人は時間を忘れ今とゆう楽しい日を満喫し明日からもまた二つゆう日が来る事を疑わなかつた。

だが忘れたくても忘れられない出来事が待ち受けていた。

1・序章（後書き）

何か小説について気になる所やいつなつたら面白い等興味ついたりましたらメッセージを頂けたら幸いです。

2. 始まり（前書き）

どうぞん掲載していくので寄付して下さるだれ。

2・始まり

喉の渴きで目が覚め田の前にあつたミネラルウォーターを飲み干しタバコに火をつける。

一樹

「そつか昨日あのまま寝ちまつたか。」

テーブルには昨日飲み明かしたままのビールの缶等が散らかつたままで、その横では隆が寝ていた。

一樹

「隆、起きりよ。休みだからこいつまでも寝てんな。もお夕方前だぞ。」

隆 「んも・少し・・・寝かせ・・・」

まだ昨日の酒が抜けてなく夢心地の隆に一樹は尻に軽く蹴りを入れる。

一樹

「起きないと段々強くなつてくるぞ。」

隆

「わかったよお起きるつて。」

強引に起こされた隆は電源の入っていないTVをボーッと見ている。

一樹

「直美と信は?」

頭が回らないのか少し考えてから口を開いた。

隆

「あああいつ等?お前が寝て少しして直美が帰るつてんで信が送つてつたよ。あいつ等今日仕事だしな。」

一樹

「そつか・・・」

一樹は隆にタバコを差し出し火をつける。

隆 「一樹」「コーヒー飲みたいなあ～。」

一樹

「自分で入れるー。」

隆

「ほら人の家だから勝手にやるの悪いじやん。」

一樹

「じゃあ人の家に勝手に入るのはいいんかい！」

そお言いながらもキッチンに立ち「コーヒーを入れようとする一樹。

隆

「あつ俺砂糖抜きミルク多めで。」

一樹

「わがまま言うなーだつたら自分でやれ！・・・あつコーヒー切れ

てた。」

隆

「え～マジー！」

一樹

「いいよ丁度タバコも買いたかったしそのコンビニまで行ってくれるよ。」

隆

「よろしく～、ついでに肉まんも買つてきてねえ、俺は再び夢の中にい～。」

隆は話しながら横になり携帯をいじっていた。

一樹

「わかったよ、つてか少し戻しどけよ」

隆

「へえ～い。」

聞いているのかわからないような返事をした隆を見て軽くため息をつく。

部屋を出て100mぐらい行った所にコンビニはあって毎日通

る道だつたがいつもと何か少し感じがおかしかった。

一樹

「休みだつてのになんか騒がしいな、どつかで祭りでもやつてんのか？」

さほど距離も長くなかったのですぐにコンビニに着きか！」を手に取り雑誌やインスタントコーヒーを入れレジに向かつた。

一樹

「すいませえ～ん。」

レジに店員がいなかつたので大きくもなく小さくもない声で店員を呼んだが少し待つてもこないのでせきよりも大きな声で呼んだ。

一樹

「すいませえ～ん！」

そうすると奥の従業員以外立ち入り禁止の扉が勢いよく開き何かが一樹めがけて飛び出してきた。

一樹

「！？」

一樹はそれにカウンターで殴りつけるといつもの見慣れた高校生のバイト店員が倒れていた。

一樹

「あつ悪い咄嗟だつたし急に掴みかかつてくるのも悪いんだぜ。」

一樹がおっしゃると店員はすぐに飛び起き一樹の肩を掴んだ。

店員

「大変なんです！外が！倉庫が！人が！つづて！」

店員は殴られた事なんか意に介しないまま一樹になにかを言つてはいるが焦つてているのか一樹は意味が良く分からぬが落ち着かせた。

一樹

「分かつたから落ち着け！まず俺はかごの中とタバコと肉まんを買に来て店員がいなかつたからお前を呼んだんだ。そこまではわかるな？」

店員は落ち着きを取り戻したのかさつきよりは表情も落ち着いてい

た。

店員 「はい、わかります。」

一樹

「よし、じゃあ何があつたんだ？外とか倉庫つてなんだ？落ち着いて話せよ。」

店員

「外にはなんか異常者みたいのがどこもかしこもいて襲つてくるんです。それで店長が朝出勤して来る時にその異常者に腕を噛まれたみたいだつたんですが傷が深くなかったんでそのままにしておいたんです。そしたら昼頃になんかおかしくなつて僕に襲い掛かつてきたんです！咄嗟に倉庫に逃げて鍵を閉めて閉じ込めたあと怖くなつてトイレに隠れました。」

一樹

「まさか言いたくないんだが・・・ゾンビじゃないよな？」

店員

「多分そうかも・・・」

一樹は深く深呼吸をして外を隠れながら見て話した。

一樹

「ふうー。それでそいつらは走つたりするの？あと、この辺にはゾンビいないみたいだけど嘘じゃないよな？」

店員

「こんな嘘つかないですよー！」

一樹

「だな、嘘のが嬉しいか。じゃあまず倉庫のやつをやつけてみるしかないか！」

店員

「嫌ですよ、閉じ込めたんだしもう害はないじゃないですかー！」

一樹

「相手を色々知つてた方が生き残る確立は上がるんじゃないか？実

際だと映画とかとは勝手が違つて頭を攻撃しても無駄かも知れないしな。」

店員

「僕はやつませんんからね、とゆづか多分無理です。」

一樹

「期待しないよ、鍵開けてくれるだけで十分。あとなんか武器ある？」

店員がレジの裏からゴルフのアイアンを取り出し一樹に渡した。

店員

「店長のこなぐらーしか。」

一樹

「まあのいよりはマシか」

二人は辺りを見回しながら店の奥にある倉庫の前に着いた。倉庫はモーター音だけが響いていて中には人がいるようには思えなかつた。

一樹

「マジ中にいんのか？ まいいや鍵開けて。」

店員は黙つて鍵を開けると一樹がアイアンを握り締めながら静かに扉に近寄り一気に扉を開けた。なんと扉の目の前にそれは立つて扉が開いた途端に一樹に掴みかかってきた。

一樹

「マジか！ ． ． ．ウラア！ ！」

一樹は掴みかかる手をアイアンで受け腹に強烈な蹴りを放ち、それは後ろに激しい音を立てて吹っ飛んだ！

一樹

「ビビツたあ！ 話しはマジみたいだな！」

それはゆっくりと起き上がり呻き声をあげて一樹に近寄つてきたが一樹の持つているアイアンが頭部に炸裂したがアイアンはぐの字に曲がつてしまつた。

一樹

「やつぱぱ曲がるよなあ～。」

「

それはアイアンの一撃が効いてなく止まらずに襲い掛かってきたが、横面に蹴りが入り倒れこむとそれの頭部を何度も踏みつけた……。次第に痙攣と共に動かなくなつた。

一樹

「なんとかやれるらしいな、走らないからなんとかなつたけどほかの奴はどおかな。」

店員がそれを輝いた目で一樹を見ていた。

店員

「すうい……」

一樹

「あつ近寄るなよ、大抵殺したと思つて近づくと噛まれたりするからな！ はあー……こうゆう事なら外はゾンビ共で溢れてるのは間違いないな、まず隆の所に戻るか。」

店員

「あの……僕も連れてつてもうえないでしょうか？」
一樹は少し考えて言った。

一樹

「携帯使えるか？」うつ時は大体使えなくなつてるんだが……」
店員はポケットを探り携帯を出す。

店員

「大丈夫です圈外じゃないです。」

一樹

「だけど隆を電話で訳を話しても信用しないで無用心にここに來たら危険だ！ だから俺が迎えに行く。あんたは正面のシャッターを下ろして裏口に待機してくれ。」

店員

「もお一人にしないでください、それなら僕も行きます。」

一樹

「バーブ力危険になるのは一人でいいし俺携帯持つてきてないから誰の番号もわからんねえんだよ。まあシャッター下ろしとけば安全だろ。」

あと誰でもいいから連絡しとけよ家族とかな、心配だろ?」

店員

「分かりました、気をつけてくださいね。」

一樹

「OK行って来る。」

そつと警戒しながら自宅に戻つていった。

2・始まり（後書き）

何か小説について気になる点や「いつなつたら面白い等想つ」とがありましたらメッセージを頂けたら幸いです。

3・作戦

「ゾンビ」を後にした一樹は来た道を戻るだけの約100mの道のりがとてつもなく長く感じた。

一樹「警戒しながらだと随分時間がかかっちゃうな、ゾンビ共に会わなけりやいいが。」

その時壁か何かを激しく叩く音が聞こえ、その場所を見ると民家の二階の窓を部屋からゾンビが叩いているのが見えた。

一樹「驚かすなよ、ってかセッキは気づかなかつたけど騒がしかつたのはああゆうやつか?」

恨めしそうにこちらを見ているゾンビを無視して行くと一樹のアパートが見えた。だが一体のゾンビがアパートの前をうろついている。一樹「やべー玄関のすぐ前に居るよ! どおすつかなあ . . .」

と、その時ドアが開きかけゾンビがそれに気づく! 一瞬早く気づいた一樹は猛スピードで走り出しそのままの勢いでゾンビに飛び蹴りを放ちゾンビは衝撃で倒れた。一樹はサッカーの要領で頭を蹴飛ばし絶命させた。

隆「お前何やつて . . .」

一樹「早く入れ! 話しは後だ!」

隆を無理やり家中に押し込むと、回りに何も居ないことを確認するとドアを閉めた。

隆「お前いきなり何やつてんだよ! あの人死んじまつたらどうすんだよ!」

一樹「とりあえず簡潔に言う! 黙つて聞いて絶対に信じろ!」

窓の鍵を閉めカーテンを閉めながら言つた。そして隆の返事も聞かずには話しかけ始めた。

一樹「今、外にばどのがべりいか分からぬがかなりの数のゾンビがいるはずだ、これからこの先のコンビニに逃げる! 動きやすいぐらに荷物をまとめてすぐここを出るだ! ここは一階だしドアも窓

も薄い、襲われたらアウトだ。分かったか？」

何を言つてゐのか良くなつてはいなが一樹が必死になつて話してゐるぐらいだから余程の事なんだろ?と思ひ、荷物をまとめながら聞いた。

隆「まだ良く分からんが大変な事が起つてゐる事なんだな、じやあさつきのは……なんだっけゾンビだっけ?」

一樹「そおだ、さつきのがゾンビだ! 今のところ走つたりする奴は見てないが油断するなよ、あと倒すなら頭をやれ! 首の骨は折つても効くかはまだわからない。あと噛まれたらそいつもゾンビになるから殴るなら手に何か巻いとけ。」

一樹はタオルを千切り両拳に巻いていく。それを見た隆も巻き始めた。

隆「一体何が起つてゐるんだ? どうしてこんな事に?..」

一樹は首を横に振つた。

一樹「分からぬ、俺だつて聞きたいが誰に聞けばいい? こんな時はまず安全な場所に行く事だ。幸い携帯は繋がるみたいだから直美や信にも連絡したいな。」

隆「そのことなんだけど、お前が遅いからお前に何度もかけても繋がらなくて変だなつて思つてたらお前の携帯がそこに置いてあつて、じやあコンビニまで行つて思つたんだよ。回線がパンク状態でどこも繋がらないんかな。」

一樹は置いてあつた自分の携帯を手に取り直美に電話してみても信にしてもつながらなかつた。

一樹「……直美……」

隆「でもメールは送れたぜ。」

一樹は携帯を手に取つて見ると、受信メールがあつた。

『一樹誕生日おめでとう。もお24才だね。初めて知り合つてから八年があ早いねえ。今度の私の誕生日楽しみにしてるぞお~。白衣の天使より。』

一樹はすぐに直美と信や家族にメール一斉送信した。

『「Jのメールに気づいたら仕事をしていようがすぐ」にメールくれー...
. . . 送信完了』。

一樹「隆も家族にメールしとけ、念のため携帯マナーモードにしつけよ。」

隆「分かつた、ところで武器つてかそおゆつのなしで行くの？ 映画だと外国だから拳銃とかあるけどさあ。」

押入れから木刀、金属バット、スタンガン、等凶器が入った箱を出した。

一樹「銃まではないが囮まれたりしない限りこのぐらいで十分だろ。」

隆「まだ木刀、金属バット、スタンガンは分かるけどボウガンがなんであるんだよ。」

一樹「ああ昔兄貴に貰った。でも矢がそんなにないから持つていいくだけ無駄だな。 . . . さてこんなもんかな。そつちは？」

隆「俺はOKだ。」

金属バットを肩に叩きながら答えた。

一樹「じゃあ準備いいなら行くぞ！十分気をつけていけよ。」

ドアの覗き穴から安全を確認するとゆうくじと外に出てゾンビに向かつた。

隆「うえつ . . . てかこいつ普通の人じゃねえの？」

先ほど玄関前にいた人であつたろう物を見て隆は言った。

一樹「信用しないなら生きる可能性下がるぞ。」

隆「分かつてるけど死んでるの見ると普通の人だぜ、ゾンビって腐つてたりしてないのか？」

一樹「ゾンビになりたては細胞が死んで間もないから普通となんら変わらないさ、動いてるのを見れば嫌でも信用するだろ。」

隆「出来るなら見たくも会いたくもないんだがな。」

二人は半分を過ぎたところで遠目にゾンビのシャッターを叩く奴らが見えた。

一樹「やばいなシャッター閉めるときに気づかれたか？ゾンビは三体か、なんとかなるか。隆、入るのは裏口からだが正面にいる奴ら倒していくぞ！じゃないと音で他のゾンビまで寄つてきちゃう…」

隆「マジ！？かなり緊張してきた、勝てるかなあ？」

一樹「高三の時に一人で駅の所の駐車場で20人ぐらいと喧嘩したろ？あの時よりマシだよ。」

笑いながら話す一樹に対しても隆は引きつった顔で答えた。

隆「あの時よりマシじゃないのがあつたら教えてくれ！でも7人ぐらいぶつ飛ばしたあたりから記憶がないから、起きたときゴミ箱に尻がハマッテ抜けねえし前歯は三本ねえで最悪だつたぞ！」

一樹「まあよくもまあの時あの程度の怪我ですんだよな…じゃあそろそろ近くなつたし気づかれないうちに奇襲と行きますか！」

隆「いっせーのっせ！」

掛け声と同時に走り出した二人は一番手前にいる奴を隆が頭めがけてフルスイングした！金属バットとシャッターに挟まれた頭部は半分以上潰れて脳髄等が飛び出しヒクヒクと痙攣した。一樹は一番奥にいる奴を木刀で叩きつけたが死には至らなく何度も木刀を頭に叩きつけた！嫌な音と共に動かなくなり、前に目を向けた瞬間もう一體のゾンビが掴みかかってきた！

隆「一樹！」

一樹「くそ～～～！」

思いのほかゾンビの力が強く首筋にゾンビの口が届くとゆう所で、高い音が鳴る！

『バチチチチチ！』

その瞬間ゾンビが小刻みに震えた！その隙にゾンビの首をありえない角度まで回し鈍い音が響き、力なく崩れ落ちた。

隆「ありがとうは？」

一樹「手なんか借さなければかつこいい逆転劇が見れたのに残念だつたな。」

隆「そりや残念。」

そう言つと一樹に手を差し出した。一人は目が合い微笑すると隆が手を引つ張り上げ一樹を起こした。

一樹「さあ急いでーーここにいたらほかのゾンビが寄つてくる！」

二人は裏口に回るとドアの前に立ち軽くノックして声をかけた。

一樹「俺だ、開けてくれ。」

少しの間がありドアが開いた。

店員「良かつた無事でしたか。そんなに血が、怪我は？」

一樹「ああ怪我はないよ返り血だけだから、心配しなくていいよ。」

二人が中に入るとドアを閉め鍵をかけた。二人はトイレの洗面所で汚れを取ると隆が売り物のタオルを見た。

隆「ねえこれいくら？」

店員「こうゆう時ですからお金は要らないですよ。良かつたら何か飲みますか？お店のですけどね。」

隆「そつか、サンキュー。」

タオルで顔を拭きながらビールを取り出していた。

一樹「酒飲むなら少しにしとけよ、感覚鈍るからな。」

一樹もタオルを手に取り色々物色していた。

隆「俺、板垣 隆_{いたがきたかし}23才宜しく。君は？」

一樹「そいや俺も自己紹介してなかつた、岡村 一樹_{おかむらかずき}今日で24才だ。」

店員「僕、江田 正志_{えだまさし}18才高三です。岡村さん最悪な誕生日でしたね。」

一樹「一樹でいいよ、そあだよ最悪な誕生日だよ。」

隆「俺も、隆でいいよお。まあ人生一度くらいこうゆうのあつてもおかしくないんじやない？」

一樹「あつてたまるかこんな日！－まあいいとりあえず今後の事を話そう。」

隆「今後？ここにいればいいじやん、わざわざ危険を冒す事ないんじやねえか？」

正志「そおですよここなら飲み物もあるし食料だつてあるから助け

がくるまでもちますよ。」

それを聞いた一樹は黙つていたが少し考えて言つた。

一樹「誰が助けに来るんだ？ 警察か？ 自衛隊か？ S A T か？ 軽く考
えるな、最悪なシナリオで動かないと死ぬぞ！」

二人は何かを考えて黙つていた。

一樹「そのままでいいから聞いてくれ、俺は助けたい奴、生きてる
か確認したい奴がいる。お前らはいないのか？ 正志、誰かと連絡取
れたのか？」

正志「ずっと電話がつながらなくて誰とも・・・」

隆「メールなら送信できるぜ。」

正志「本当ですか？ ちょっと送つてみます。」

その時一樹が携帯を見るとメールが三件あつた。

信『何かあつたかあ？ 昨日は楽しかったけど一日酔いで頭痛いっつ
一の。早く仕事切り上げて帰るかなあ。』

兄貴『一樹こつちはみんないるぞ。たまたま実家に来る途中にゾン
ビ？ みたいな奴等に襲われたけど全員ぶっ殺してやつた。とりあえ
ず親父とかは話しを信用していなが家の中にバリケードを作つた
から簡単にはあいつ等も入つてこれないだろう。お前は無事か？ 安
全な場所にいるのか？ ここにこれるのか？ 反事待つてる。』

直美『やつほーいなんだいおじさあーん。こつちは大勢の急患だら
けで忙しいよ。こんだけの人数が急患で来るぐらいだからＴＶで
なにかやつてるかと思つたらテレビ映らないしさあ。あつそろそろ
仕事戻るね、終わつたら連絡するよお。』

一樹「良かつたみんな生きてた。隆、ＴＶ映るか？」

隆「だめだ映らねえ、携帯、電気、ガス、水道は生きてんのになん
でＴＶは映らねえんだ？」

正志「ラジオもなんか少し聞こえるんですがダメでした。」

一樹「そうか・・・とりあえず連絡したい奴にはメールしどけ、俺
は直美が働いてる病院に行こうと思う。なんか急患が結構いるらし
いからそいつらがゾンビになりかねないしあれだけ人が多く集まる

場所だ危険じゃないはずがないからな。」

隆「お前正気か!? 外はゾンビがいるんだぞ! ここの人通りが少ない所でさえいるんだぞ、まして街の病院って言つたらかなり人がいるんだ! わかるか? って事はゾンビも比例して多いって事だ!」

一樹「ついてきてくれなんて言わないさ、俺が好きで勝手にやるんだからな。お前等はここで待つてくれ何かあつたらメールする。」隆は唇をかみ締め何か色々考えていた。 . . . そこで最近流行りの歌が流れ、正志が携帯を見て少し黙つていたが一樹に聞いた。

正志「. . . 一樹さん病院つてどこですか?」

震えた声で一樹に聞く。

一樹「三駅先の第一総合病院だけだ、何で?」

正志「第一総合病院なら、僕も一緒に行きます! いや連れてつけてください! 僕も自分の家に行きたいんです。お願いします!」

隆「おい、急にどうしたんだよ?」

正志「たしか噛まれた人はゾンビになっちゃうんですね?」

一樹「ゾンビになるまでの時間までは分からないが多分噛まれたらゾンビになる。」

正志「今母さんからメールがあつて家には家族全員無事に立て籠もつているとの内容でした。」

隆「良かつたじゃん! 家は近いのか? でもそれと病院に行くのと何の関係があるんだ! ?」

正志「メールはそれだけじゃなかつたんですよ、隣の家のおじさんがあさつき噛まれた所を助けて一緒にいるらしいんです。」

一樹「噛まれたのは何時だ? あとにこの店長が出勤してきたのは何時だ?」

正志「えっと隣のおじさんは何時に噛まれたかは詳しく分かりませんがメール着たのが15:00だからその少し前です。店長は8:00に出勤してきました。」

一樹「店長が噛まれてゾンビになつたのが昼頃 . . . 約4時間か。今15:30急がないと怪我の酷さで早くなるかもしれないからな。

準備しろ！荷物は多過ぎず動きやすい量にしろ！」

正志「はい！」

隆「おーーー！って事はまず正志の家に行つてその瞞されたおっさんどつにかしてそのまま病院に行って直美と合流つて事か？正志の所はメールでそいつがゾンビになるから気をつけろとかじやダメなの？」

正志「実は父は体が悪く寝たきりなんです、母は多分信じてくれないだろ？し、妹にはなにがあつた時何も出来ないと思つんです。だから俺がどうにかしないと。」

隆「はあー、分かつたよ。三人で行けばなんとかなんだろー！お前等に付き合つよ。」

正志「ありがとうございます！」

二人の会話を携帯を操作しながら聞いていたが何も一樹は言わなかつた。

隆「お前はなんか言う事ないのかよー！さすがにシカトは切ないぞ！」一樹はそれに対して微笑し言つた。

一樹「俺が行くのにお前がついてきてくれない訳ないの分かつてるからな。ほら早く荷物まとめよ、すぐに出るぞ。」

そお言つて一樹は携帯でメールを送つた。

『兄貴、俺は無事だ。家の近くのコンビニに築城してて、ここは水も食料もあるしゾンビ共にバリケードを破られる事はないと思う。だけど予定が変わつて第一総合病院に行くことにした。そっちに行くことがある時はメールする。何もなくても数時間に一回は必ずメールする。みんな生きててくれて良かつた。』

『信、今お前どこだ？今から言つ事は嘘じやないから絶対に信用してくれ。俺の家の辺りにはゾンビだらけだからそこが安全ならこっちには来るな。隆も無事で一緒にいる、直美は仕事先にいるがメールが返つてきたから無事だと思つ。また連絡する。無事でよかつた。』

『直美、今から言つて事は嘘じやないから絶対に信用してくれ。俺の家の辺りにはゾンビだらけだからそこが安全ならこっちには来るな。隆も無事で一緒にいる、あと急患が多いと言つていたがそいつらはゾンビになる可能性があるから気をつけてくれ。今から病院に行くから無事ならメールくれ。また連絡する。』

隆「お前つて性格悪いな～、『隆君ありがとう！君が来てくれるなら100人力だよ』ぐらい言えないかねえ。」

似てない一樹のモノマネをしたが一樹は無視して正志に聞いた。

一樹「家はどこ？近くに交番とか警察署とかある？」

正志「家は病院に行く途中の真ん中ぐらいです。交番は近くにないんですけど、向かう途中に警察署はありますよ。」

隆「交番とか警察署がなんなの？この状態じや誰も助けてくれないだろ。」

一樹「俺等が今必要なのは助けじやない武器だ！警察署の中は多分ゾンビが必ずと言つていいほどいるだろ？が近くにいけば警官のゾンビはいるだろ？、そいつから拝借つてな訳。」

隆「なるほどそれならあんまり危険もないしな。ただ弾が少ないな。まあないよりマシか。」

正志「でも拳銃にはたしかワイヤーがついてるから外せないですよ。」

一樹「知らないのか？あれ三重のフックになってるだけで、すぐ外せないけど外せるんだぞ。まあ念のため万能ハサミが売るほどあつたから持つて行くけどな。」

隆「売つてんだつて。」

タイミング良くツッコミをいれ気分上々だったがシャッターから激しい音が聞こえた。

一樹「外にゾンビがいないのがベストだつたが時間もないしな、行くしかないか！まずは警察署を通つて正志の家だ！その後第一総合病院だ気を抜くなよ行くぞ！！」

隆「おう！」

正志「はい！」

三人は裏口が安全かどうか確かめ警戒しながら通りに出るとシャッターの前に一匹ゾンビが立っていたが一樹が木刀で脳天を叩き割つた。

一樹「よし大通りに出るぞ。」

辺りはネズミ一匹いないのになにかいる気配が漂う中三人は大通りに出でそこで三人は驚愕した。

3・作戦（後書き）

何か小説について気になる点を一つ挙げたら面白い等語つことがありましたらメッセージを頂けたら幸いです。

隆「なんだこれ・・・」

近くには居ないものの辺りはどこを見てもゾンビがいる。「ううつく奴、立ち止まってる奴、人であつたものを貪りつく奴、まさに地獄絵図だつた。

正志「こんなんで先にいけるんでしょうか?」

隆と正志が愕然としている最中一樹は注意深く観察し20m先の歩道脇に止まる一台の車を見つけた。

一樹「気を抜くな! こんだけ広い通りなら全体を一重にも囮まれなければ走つて逃げれる。それと提案がある。あそこに黒い1BOXの車が見えるな、あれに乗つて行こう。」

隆「おいおい良く考えろよ映画じやないんだ最近の乗用車は直結できねえぞ! 商業車ならともかくな。」

正志「でもなんとかしないと家まで走りっぱなしじゃ体力が持ちませんよ。その商業車つてやつを探しましょうよ。」

隆が呆れた顔で正志に言つた。

隆「このゾンビだらけの中で商業車を探しながら進んでたら少しも行かないうちにGAME OVERだ。」

ジエスチャーで両掌を上に向け肩まで上げた。すると一樹がその会話に割つて入つた。

一樹「あの車にはゾンビが一体乗つてるんだよ。」

隆「だからどうした?」

一樹「そのゾンビはどうやって車に乗つた? 丁寧にドアまで閉めたのか? いくつか考えられるのは噛まれた奴がただ鍵が開いていて車の中に逃げ込んだままゾンビになつたか、噛まれた奴が今乗つている車の所有者かだ! まあ他にいくつか例はあるがな。どっちにしろ鍵がある可能性は限りなく低いんだけどな。」

二人は一緒に唾を飲み込んだ。

正志「分かりました、でも誰が行きます？みんなで行つた方がいいですか？」

一樹「考えはある、一つは誰か一人で行つて鍵があれば中のゾンビを撃退しバックでここに戻り残る一人を乗せて出発だ。もう一つは三人で行つて鍵があればゾンビ撃退、出発だ。」

隆「鍵がなければ？」

一樹「分かるだろ、目的地に向かつて全力で走れ！さあどっちにする？もお時間が勿体無い、決めなけりや俺が一人で行くぞ。」

隆「俺は行くぜ！一人よりはマシだろ。なあ。」

考える間もなく隆が言つて正志に同意を求めた。

正志「ですね。」

一樹「鍵が付いていたら俺が中のゾンビを殺るからお前等は近づくゾンビを頼んだ。じゃあ行くぞ！ . . 1 . 2 . 3 ！」

掛け声と共に周囲のゾンビに気づかれないように車に近づいた。車に着くと車中のゾンビには気づかれたが他のゾンビには気づかれていなかつた。

一樹「こつち側じゃ鍵の場所が見えねえ！逆に回るしかないが絶対に見つかっちゃうな。」

舌打ちをしたあと周囲のゾンビが多すぎて一樹の顔色が悪くなつていた。

隆「ここまできたんだから引き返せねえんだ行くしかねえだろ！もし鍵があつても間に合わなかつたら走つて逃げればいい。」

同じ考えなのか正志が一樹を見て頷いた。

一樹「よし . . 1 . 2 . 3 ！」

一斉に運転席側に回り込むと鍵がついているのが確認できたが肝心のドアの鍵が開いていなかつた。

隆「早くしろよ近づいてきたぞ！」

口から異様な物を垂らしそンビ特有の両手を前に突き出しながら迫つているのを金属バットを握り締めて構えていた。

一樹「くそ！これしかないか！」

一樹は木刀を構えると運転席側の窓を叩き割つた！それと同時にゾンビが上半身を外に投げ出してきて一樹に飛び掛ってきた。そのころ後ろでは隆と正志がまだ数こそ少ないがゾンビと奮闘中だった。

正志「このやうおー死ねえー！」

ゾンビから持ってきたモップで攻撃していたが全く効きもせずゾンビは足を止める事はなかつた。

正志「隆さん、モップじゃ無理ですよー！」

隆は回りに居たゾンビ3体目を、金属バットで頭を叩き割つた所だった。

隆「これ使え。」

隆は正志に向かつて金属バットを放つた。

正志「でもそれじゃ隆さんは？」

受け取つたと同時に田の前にいたゾンビの脳天に叩きつけ絶命させて言つた。

隆「俺こう見えてもちよつぴり強いんだよ。」

4体で群がつて近づいてくるゾンビに向かつて走り出し手前の奴の顎にアッパーを入れ、隣の奴にの横面に右足刀を入れ、そのままの勢いでその後ろにいたゾンビに左後ろ回し蹴りを頭部に入れ、最後の一体は踵落としに行くまでの工程で顎を蹴り上げそのまま上を向いた顔面に打ち下ろし地面に叩きつけ一瞬にして4体のゾンビは動かなくなつっていた。正志は一つ大きく呼吸をして死に絶えたゾンビを見て言つた

隆「まあこんなもんかな。」

正志「すげえ！隆さんも一樹さんも強すぎ。」

隆「バカ！後ろー！」

正志が後ろを振り返つた瞬間一体のゾンビが田と鼻の先まで近づいていた・・・が正志は半歩引き金属バットを左腰に引き收め一閃しゾンビの頭上半分を切り落とした。

正志「あつぶねえー。死ぬかと思った。」

隆「お前すげえじゃん！剣道かなんかやつてたん？」

正志「いや親父が居合いの免許皆伝で道場もやつていたんで、小さい頃から教えられてたんですよ。隆さんと一樹さんは負けますけどね。」

隆「俺は昔空手を習つてたんだけどどつも顔面攻撃なしがしつくりこなくて辞めちまつた。一樹はなんもやってないんだけど俺が今まで会つた中でどびつきり強えぞ。」

正志「そおなんですか、一人を見てたらこの先大丈夫な気がしてきました。」

隆「俺もそお思つてきた。さて今度は数が半端じゃねえぞ、気合入れてけよ。」

正志「はい！」

一人には数えきれないほどゾンビが近づいてきていた。

一樹「くつそお . . .」

一樹は車の中のゾンビに不意をつかれ後ろに飛び難を逃れたが、背後からきたゾンビに掴まれてしまつた。だが強引にゾンビの頭を掴み強引に首をへし折りゾンビは崩れ落ちた。車の回りにはゾンビが寄つてきていたが一樹は氣にも留めず車の近くにいるゾンビを殴りつけたあと木刀で回りにいるゾンビの脳天を叩き割つた！最後に車中にいるゾンビの顔面に木刀を突き刺し動かない事を確認すると一樹は叫んだ！

一樹「こつちは〇〇だ早く . . .」

一樹が言い切る前に一人は猛スピードでこちらに走つてきた。後ろからは数え切れない程のゾンビが向かつてきていた。

隆「もあんな数はさすがに無理だ！早く行こう！」

一樹は必死に運転席にいるゾンビをどかそうと試みるが中々上手くいかない。そういうじてこるうちにゾンビはもうそこまで来ていた。

一樹「よしそいたぞ！乗り込むぞ！」

車中にいたゾンビをなんとかどかし乗り込もうとした時。

隆「一樹もお諦めろ！もお無理だ！走れ！」

一樹は腕を隆に強引に引つ張られ二人は走り出した！が正志は諦めきれず運転席に乗り込んだ。

隆「正志まだ間に合う！下りて走れえ～！」

隆は走りながら叫んだ。正志は聞こえていたが諦めきれずに車のキーを回すが中々エンジンがかからないままゾンビに割れた窓から腕を掴まれた！

正志「かかれえ～～～～～～～死んでたまるかあ！」

ゾンビが車を取り囲むのに時間はかからなかつた・・・

隆「正志・・・」

一人は辺りにゾンビがいない所まで行くと隆はゾンビが車を取り囲むのを見て愕然としいきなり一樹に掴みかかつた！

隆「お前が・・・お前が車で行こうなんて言わなけりや・・・

一樹の肩を掴む手に力が入り隆の目には涙が零れていた。すると一樹が車を取り囲むゾンビを指した。

一樹「隆！見ろ！」

その時ゾンビの集団の中から黒い1BOXが一人に向かつて飛び出してきて正志が叫んだ！

正志「一人とも止まるとゾンビが寄つてくるからこのまま乗つて！」

一樹、隆「正志！」

二人は車と平行に走るがやつと追いつくスピードなので中々ドアに手が届かない。

一樹「少しふィードを落とせ～！」

正志「まだ仮免までいってないからそんな微妙な操作できないよお～！」

一樹「アクセルを踏んでいる足を離せ～！」

正志は言われた通りにアクセルから足を離した、少しふィードが落ちてきたので一樹はドアに手が届きドアを開けると一気に飛び乗り、隆の手を取り引き上げた。

隆「間一髪だぜ～。」

一樹「正志大丈夫か？怪我ないか？」

正志「怪我はないですよ。二人は？」

一樹「こっちは大丈夫だ、無事で良かった。」

正志「もお終わりだつて思つた瞬間エンジンがかかつたんですよ。映画のワンシーンみたいですね。」

隆「バカ野郎！無茶しやがつて死んでたらどうすんだよ！」

正志「ごめんなさい。」

一樹「まあまあみんな無事だつたんだから結果オーライでしょ。でもまあ隆は泣くほど心配してたみたいだけど。」

正志「隆さんが……泣いた？」

隆「泣いてねえよ！てめえ何言つてんだよ！俺はただ心配しただけだ。」

正志「隆さん」「めんなさい」今度からはそおゆう事がなにようにします。」

隆「分かればいいんだよ、助かつて良かつたよ……一樹、さつきは、なんてゆうか言い過ぎた悪かつたよ。」

鼻の頭を指でいじりながら一樹を見なにように言つた。

一樹「今もお前あれもお前だら、嫌なうこんなに長く付き合つてねえよ。」

微笑しながら隆を見ている一樹を横目に隆は照れ隠しにバックを取り出し一気にミネラルウォーターを飲み干した。三人が乗つた車は大通りを走つていつた。少し慣れない運転で蛇行しつつ走る車をゾンビが近くにいない比較的安全な場所に車を停車するよう指示した。

隆「よしその辺でいいだろ、運転変わろ。」

正志「怖かった。」

緊張が途切れたのか大きく息を吐き肩を落とし首を鳴らし後ろの席に移動していた。

一樹「正志の運転の方がゾンビより怖かつたかもな。」

正志「ああそですよお仮免三回も落ちましたが何かご不満でも～

！」

少し頬を膨らまし目を細めながら一樹を睨みながら言った。

一樹「正志さんがいなかつたら僕たち助からなかつたですよおー、感謝感謝。 なあ隆？」

隆「そおそおゾンビに囮まれた時も凄かつたんだぜー居合いを習つてるらしく達人みたく金属バットでゾンビを切る切る。見せたかつたなあ。」

隆は運転席に乗り込みながらうつうと慣れた手付きで車を走らせる。

一樹「へえーそりや凄えな、じゃあ木刀は正志に渡しておいた方がいいな。でもさつきみたいな無茶はするなよ。」

木刀を正志に渡し正志は木刀を見ながら言つ。

正志「一人の格闘術？とゆうか運動神経がいいとゆうか僕なんか足元にも及ばないですよ。」

隆「実戦経験が豊富なだけだよ、俺も一樹もな。そおだ正志、一樹にあれ見せてやれよ。」

持つてきたバックの中から正志は一本のベルトを出した。

正志「ジャーン！これはなんでしょお？」

一樹「あつー拳銃じやん！どうしたんだそれ？」

なんでそれをお前等が持つてるんだとゆう驚きの表情で聞いた。

隆「実はさつきの殺したゾンビの中に警察がいて銃だけ取る暇がなかつたからベルトごと無理やり引きちぎつてきた。」

得意げに隆が言つと一樹は警察が使つている拳銃《ニューナンブ装弾数5発》を取り、付いていたワイヤーを万能ハサミで切つた。使つた事がない代物だつたがなんとかリボルバーを出し弾薬を確認した。

一樹「ラツキー！全部はいつてるぞ！」

隆「一発だけ弾頭がないのないか？一発だけ空砲が入つてゐた事あるぞ。」

弾薬を全部出し調べたが全て弾頭はあつた。

一樹「全部あるんだ、噂なんじゃねえの？でも五発じゃこの先はやつぱ辛いか。」

隆「まあいいそれは一樹が持つてないよ一番無茶しそうだしな。」

一樹「わかった。でもどこに入れときゃいいんだ？ズボンに差しとくのか？」

色々なところに入れたりするが中々いい所が見つからない。

正志「拳銃が入っていたホルダーをベルトに付けたらどうですか」なるほどと何度も小さく頷くとベルトからホルダーを外し自分のベルトの右側にホルダーをつけてその中に二ユーナンブを収めた。

一樹「どお？かっこよくない。」

隆「いいじゃん、でもこのままで行くと病院に着くの暗くなっちゃうから弾薬はもつとほしいな。」

急な事に対応出来るようにスピードを出し過ぎないように注意して走っていた。

一樹「正志警察署はもう近いのか？どのくらいだ？」

正志「あと信号一つ目の左側にあります。」

前に体を乗り出して先の信号を見ながら指を差して言った。だが

丁度そのあたりにはゾンビが何十体も集まっていた。

一樹「停まらないであいつら跳ねちまえ！でもスピード出しすぎるなよ！フロントガラスが割れたり、事故つたら洒落にならねえからな。」

隆「OK捕まつてろよー！」

車は少しスピードを出しそのまま群に突っ込んで行った！ドガガガガガガガッ！…とゆう激しい音を撒き散らし半数以上のゾンビを跳ね飛ばし、フロントガラスには血や体の何処かの箇所であつた物が付いていたがワイパーで取り除いた。

隆「気持ち悪い～ゾンビでも跳ねるもんじゃねえなあ。」

一樹「隆！シターンしてあそこにいるゾンビを蹴散らさない事には何も出来ないぞ！」

隆「分かってるって！俺のドライテク《ドライビングテクニック》を

なめんじやねえぞ！」

隆はハンドルを急激に切りサイドブレーキを上げアクセルワークとブレーキングで綺麗なスピントーンをして再びこちらに向かってきていたゾンビもろ共跳ね飛ばして行つた！何度もそれを繰り返していくと辺りには動いているゾンビはいなくなつた。

隆「こんなもんかな？」

一樹と正志は衝撃で色々な所をぶつけたが大した怪我ではなさそうだった。車体は至る所が凹みフロント部分は元の形がわからないぐらいになつていて走行するのに支障はなさそうだ。

一樹「よし、そうしたらあの鉄格子の門に鉄の扉があるんだがそこに運転席側を付けるか？」

隆「余裕！」

車はもはや動くことのないゾンビ達の上を乗り上げ、警察署正面右側にある鉄格子で出来た門にある鉄の扉に車を寄せた。

一樹「いくつか言う事がある聞いてくれ、まずこの中には三人で入る。隆、鍵を抜いて足元にでも隠してくれ。これで他の一人がやられたとしても一人はここまで来れば逃げれるし、やられた奴が鍵を持つてたら最悪だからな。」

正志「だったら鍵を付けっぱなしの方がいいんじゃないですか？」

一樹「まあ聞け、この中には多分ゾンビもいるかもしぬないが生存者もいると思う、なぜならゾンビが集まっていたからだ。もし鍵をつけたままで中に入つて生存者に車を乗つて行かれる危険性もあるからな。」

正志「なるほど、だからか。」

隆「中には生存者がいるんだろ？だったらそいつ等が銃や弾丸をくれるか分かんないぜ。何人いるかも分かんねえし。」

一樹「だから聞け！そいつ等がもし分けてくれなければ奪うまで！全てじゃないがな。あと一番面倒くさいのが生き残りの警官かな、妙に正義感が強いから一番銃を渡すのを拒否するかもな。以上だ何があるか？」

隆「いいよそれで行こう。」

正志「僕も大丈夫です。」

車のドアを開けるとちょっとやせっとじや壊れなそうな鉄の扉が威圧感を放ち来るものを拒むかのようになそこにあった。

4・戦闘開始（後書き）

何か小説について気になる所やいつなつたら面白い等語彙ひとつがありませんたらメッセージを頂けたら幸いです。

隆「どうやって開けるんだ？鍵もでかいし。」

一樹はバックから携帯のガスバーナーを出しそれを着火させるとそれを錠前に当て続けて真っ赤になつたところでミネラルウォーターをかけた。冷えて固まつた錠前にまたガスバーナーを当て続け真つ赤になつた所でミネラルウォーターをかけた。そこで錠前に異変が起つた！バキッ！とゆう音を立てて割れたのだ！それを金属バットで軽く叩くと錠前は脆くも崩れ去つた。

一樹「入るぞ！」

隆「何でそんな簡単に壊れたんだ。」

正志「なんかTVで見たことがありますよ、金属はかなりの温度高さが何度も起きると金属疲労を起こして脆くなるつて。」

一樹「そゆうこと。俺もそのTV見てたんだよ、まさかこんなに上手くいくとは思わなかつたけどな。」

隆「なんだよ出来るつて分かつてなかつたのかよ！出来なかつたらどうしてたんだよ！」

一樹「まあなんとかなつたから結果オーライで。」

そう言つて一樹がニューナンブを手に先頭で敷地内に入つて行くのを正志は腰に木刀を差し後ろを着いて行く。呆れた顔の隆が金属バットを握り後ろを振り向きながら警戒し中に入つて行つた。三人は正面右側にガラスで出来た両開きの大きな入り口を見つけたが中から机や椅子等で作られたバリケードを見つけた。

一樹「バリケードがあるつて事は少なくとも中には生存者がいたつて事だな。だけどこのバリケードを壊すとゾンビも中に入り込んでくる可能性もあるからここはダメだな。」

正志「生存者がいたつて何で過去形なんですか？何処か別の場所に避難したつてことですか？」

隆「それもあるかもしれないが中にいた何人かがゾンビになつて全

滅したつて事かもな。さつき俺等が外であんだけ大きな音立ててたのに誰も窓から覗いてないのは不思議だろ?」

それを聞いた正志は生睡を飲み込み冷や汗が一筋額から頬に垂れた。

一樹「隆、あの二階の窓の回りはバリケードもないし破つてもゾンビはそこから入つてこれないから、あの窓から入るか。」

隆「そあだな。」

正志「どうやつてあそこまで行くつもりですか?ハシゴか何かないと無理ですよ。」

一樹は窓側の壁から離れると壁に走り出し壁を走るかのように一歩、二歩と蹴り上げると窓の下にある出っ張りを掴むとそこに軽やかに上りきつた。

一樹「隆!」

一樹に呼ばれると隆も壁から離れると壁に走り出し壁を一步駆け上がると差し出された一樹の手を握りいつきに上りきつた。

一樹「正志!大丈夫だ來い!」

正志も壁に走り出し壁を蹴り上げるが伸ばされた手には届かなかつた。裏から呻き声と共に何かが滴り落ちる音が聞こえてきた。

一樹「急げ!」

正志は一心不乱に走り壁を蹴るが手には届かず背中から地面に落ち木刀も落としてしまった。タイミング良く一体のゾンビが正志に近づいてきた。

隆「正志!早く木刀を拾え!」

正志は中々体勢が直せず木刀を見つけられない!ゾンビが正志に覆いかぶさろうとした瞬間!パーン!乾いた音が鳴り響きゾンビの右頭部に小さな穴が開きゾンビはそのまま倒れこむ。

一樹「初めて撃つたけど反動も軽いしエアーガンと大して変わらないみたいだな。」

窓の所で一コーナンブを構えた一樹が言った。一樹はそこから飛び降りると正志に手を差し出し起き上がらせた。

一樹「さつきの車の貸しは返したからな。」

笑いながら言つと正志もつられて笑つた。一人は窓の下まで行き

一樹は正志の腰を持ち正志が跳ぶのと同時に上に放つた！正志は隆の手を取り上つた。一樹は落ちていた木刀を拾つと正志に投げて渡した。

一樹「もお落とすなよ。つてか正志身長が低いんじゃねえか？」

一樹は身長180cmぐらいで隆は170cm後半はあつたが正志は170cmあるかないかぐらいだつた。

正志「家系なんですよ身長低いのは！ほつといてくださいよ。」

正志は口を尖らせて言つた。一樹は窓側の壁から離れると壁に走り出し壁を走るかのように一步、二歩と蹴り上げると窓の下にある出っ張りを掴むとそこに軽やかに上りきつた。

一樹「悪かったよ謝るよ。じやあさて入るか。」

隆が部屋の中にゾンビがいないかを確認すると、鍵の部分を金属バットで叩き割ると同時に建物内に警報が鳴り響いた。

隆「やつべー！」

一樹「やつぱりな、多分こいつなると想つてた。」

隆「だつたら先に言えよマジ心臓止まるかと思つただろ！つてかこの音マズインじゃねえか？ゾンビ共が集まつてきちゃうぞ！」

一樹「そおだな急ごう！」

窓には犯人逃走防止のパイプが付いていたがなんとか中に入る事ができた。鳴り響いていた警報は鳴り止んだ。

隆「誰が消したんだ。」

一樹「自動的に時間で消えるか生存者が消したんだろう。ここにはゾンビはいなそうだな、ここは何の部屋だ？まあいい何か使える物がないか探すぞ。」

三人は机の中や棚の中を調べた。

正志「一樹さんは何かスポーツとかやつてたんですか？運動神経かなりいいし普通一階に何もなしで上れないですよ。」

隆「こいつ子供の頃病弱で運動とかしちゃいけなかつたらしきよ、

写真見るとガリガリで笑えるぞ。」

一樹「ほっとけ！」

隆「中学から一緒にいるんだけど部活はお互いやらなかつたけど中三の時に体育の時100m走と幅跳びで日本新記録を越して色々話題になつて大変だつたよな。あとは喧嘩の時も人並外れた動きでだいたい一撃で決めてたもん。」

正志「失礼ですけど一人は不良なんですか？」

隆「不良か懐かしい響きだね一樹君、つてか今は違うから過去形にはしてほしいなあ。」

一樹「無駄口叩いてる時間なんてねえぞ！」

昔話しが恥ずかしいのか会話を無理やり止めさせるかのように声を上げた。そこで正志が奥の部屋で壁に架かっているBOXの中に鍵を見つけた。

正志「鍵の束見つけましたけど役に立ちますか？」

一つ一つには所長室や倉庫等がしるされていた。

一樹「大収穫だ、よくやつたな。」

ふと奥の机の下から片足だけだが靴が見えた。一樹はそれに気づくとホルダーから一コーンブを抜くと机に標準を合わせながら近づいていった。

正志「人?ゾンビ?生きてる?」

一樹「わからんがゾンビかもしれないから気をつけろよ。」

机の後ろに回ると警官が頭から血を流して倒れていた。一樹は机の上にあつた灰皿をその警官に投げつけ当たりはするものの反応がない。

一樹「死んでるみたいだな、あたまを何かで何度も殴られてる様子からこいつはゾンビにでもなつたか？」

一樹は二コーンブをホルダに収め警官を観察したら腰にはあるはずの拳銃は無理やりワイヤーを千切られた跡があつた。

隆「何やつてんだ?こつちは懐中電灯と警棒とタバコぐらいしかなかつたぞ。」

一樹「じゃあここを出て地下1階に行くぞ！」

隆「なんで地下？」

一樹「さっき壁に建物の構造部が書いてあつたんだが3階と2階と1階は全てが部署とかそういう部屋しか書いてなかつたが地下1階には何部屋か空欄があつた、正志が見つけた鍵には地下つて書いてあるからどれかがそれっぽいだろ？多分どれかが拳銃の保管場所だ。」

正志「頭良い。」

一樹「さあいくぞ、大体構造は頭に入れたけど何があるかわからないんだ、気をつけるよ。」

三人は部屋を出ると廊下にはどこからか風に乗つていくつかの呻き声が聞こえた。その時時計の針は16：20を指していた。

隆「うじやうじやいたらやばいな。」

正志「警察署ですからかなり人がいたでしょ？からもしかするとかなりの数がいるかも。」

三人は階段に向かうと前から一体警官のゾンビが向かってきたが一体は一樹が頭部に上段蹴りを入れそのまま地面に叩きつけ絶命させた。もう一体は正志の腰から一閃に放たれた木刀はゾンビの首を切り落とした。

一樹「居合いつてすぐえな木刀なのに首切り落とせるのかよ。ってか始め会つた時よりなんか遅くなつてないか？」

正志「そりや最初は怖くてたまらなかつたんですけど二人を見てると何か勇気とゆうか自信が出てきて。こいつらに殺されてたまるか！みたいな気持ちになつたんです。後居合いは用はタイミングとスピードですよ、一樹さんも少しやればこのぐらいう簡単に出来ますよ運動神経良いし。」

何もしなかつた隆は倒れているゾンビを何か「ゴソゴソ」としている。

隆「ラツキー！拳銃二丁見つけ！両方とも弾丸満タンだぜ！」

「お言つと一つを正志に渡した。

正志「僕当てられる自信ないですよー、一樹さんが持つてた方が

役に立つんじゃないですか。」

一樹「あれ？ 勇気？ 自信？ ん？」

正志「わかりましたよやりますよやればいいんですね！」

半ば投げやりになる正志に隆はゾンビから取ったホルダーを渡した。

隆「出来るなら俺には銃口向けないでくれよな。」

笑いながら隆はホルダーをベルトにホルダーを取り付け一コーナンプを収めた。

正志「ゾンビと間違えなければ大丈夫じゃないですかあ。」

正志も笑いながら答えるとベルトにホルダーを取り付け一コーナンプを収めた。階段を下りていくと一階の正面玄関とお客様窓口のプレートが見えた。そこには想像よりも多くのゾンビが群がっていた。

隆「マジかよ中には警官のゾンビもいるけどあんなにいたら拳銃奪つてるうちにやられちまうぞ！」

一樹「今なら階段の回りには一体もいないから素早く下りれば見つからぬで行けるだろ。」

正志「もし見つからず下りれても帰りはビビります、またタイミング良く階段回りにはいないですかね？」

一樹「さあな、だけどこまで来たら行くしかないだろ。」

三人は沈黙の中頷き合つて田で合図を送るとタイミングをみて一斉に下の階段まで駆け下りた。運良く見つからず下りる事ができたが階段の途中で一樹の目の前にゾンビが現れ咄嗟に飛びゾンビの頭を両手で鷲掴みにすると顔面に右膝入れてそのまま1階と地下1階の間の踊り場まで一緒に跳んで行くと地面にそのまま叩きつけた！ゾンビの頭から足を退かすと半分以上も潰れていた。

一樹「行くぞ！」

三人は地下1階に下りると田の前には一本の廊下があつたが奥には数体のゾンビがいた。

一樹「多分今ゾンビがいる辺りが拳銃の保管場所だな。 あそこに集

まつてゐつて事は中に先客がいるかもな。」

隆「とりあえず行つて見るしかないだろ。今は拳銃は使わない方がいいな、上の奴等が下りてきたら俺等終わりだぜ。」

真つ直ぐに廊下は伸びていたので隠れる場所もなかつた三人は奇襲をかけた！一樹は一体を右、左、右と殴りつけるとその奥にいる奴を隆が金属バットで脳天を叩き割り、その隣にいた奴を正志が下から上に木刀を跳ね上げるとゾンビの頭前半分が床に落ちる前にその後ろの奴に左肩から胸まで切り裂いた。だがそのゾンビは物ともせず正志に掴みかかる！正志は途中で止まつてしまつた木刀を離し後ろに退くと横から一樹が飛び出しその木刀を掴み力尽くで下まで切り落とすと、腰に木刀を引き一瞬止まつたかと思つたらゾンビの首は床に落ち廊下に静寂が訪れた。

一樹「これで全部か？」

呆気に取られていたのか少し間があり隆は答えた。

隆「あ・・・ああそおみたいだな。」

倒れていたゾンビの中に警官はいたが拳銃は奪われていた。

一樹「じゃあここから入つてみるか。」

正志「一樹さんどうかで居合い習つてたんですか？僕にも太刀筋どころか抜刀したのでさえ見えなかつた。」

一樹「いや、喧嘩で何度も使つた事あるぐらいだよ。これサンキュー！」

木刀を正志に返すと鍵を取り出していた。

正志「じゃあなんで僕と同じ居合い、いや僕よりも無駄がない居合いが出来るんですか！？」

一樹「ただ正志がやつてるのを見てなんとなく出来そうだったから真似しただけだよ。そしたら出来た。」

小刻みに震えだし正志は声を上げた。

正志「一樹さん凄いよ！もし無事にこの問題が解決したら一緒にやりますか？」

一樹「バカ！静かにしろ！……まあ考え方とくよ。」

正志「はい！」

隆「いつからお前等は熱血君になつたんだよ。」

隆はやれやれといった表情をした。一樹は鍵穴にいくつか鍵を指すと鍵穴が回転し力チャとゆう音が鳴る。

一樹「いきなりゾンビが出るかもしれないから気をつけろ。あと生存者がいたら俺等を撃つてくる可能性もあるからな！」

警戒しどアを開けるとそこには10畳くらいの部屋だった。中には誰もいなく左右と正面に両開きの頑丈そうなロッカーがあつた。人が荒らした痕跡はなく一樹が手前のロッカーに手をかけるが鍵がかかつていて開かなかつた。

一樹「くそ！ここまで来てくれか、この鍵は俺開けられねえぞ！この中にあるかもしねえのに！」

すると隆が鍵穴をじっくり見てなにやらバックから取り出し鍵穴をいじつている。

一樹「何やつて……」

小さな音が鳴り隆は一樹に言つた。

隆「開いたぞ。」

一樹「はつ？」

一樹は目を丸くして驚いていたが扉に手をかけると見た目とは裏腹に軽い力で開き中が見えた。

一樹「ビンゴ！！隆他のも頼む！」

ロッカーの中にはニューナンブ三丁《装弾数5発》、コルト・ガバメント三丁《装弾数7発》、コルト・ガバメント用マガジン六個、弾丸38口径50発入り×2、45口径50発入り×2、防弾チョッキ六着、バック一個。

隆「全部開いたぞ、やつたじやん弾丸もいっぱいあるから一安心だな。」

他のロッカーも同じ物が入つていた。三人は慣れない手付きですべてに装弾させると各自同じく分けた。一樹は着ていた服の下に防弾チョッキを着込み手にはニューナンブを持ち、腰のホルダーにコ

ルト・ガバメントを入れ、ズボンの前に二ユーナンブを差し、バッケに「ルト・ガバメント」二丁二ユーナンブ「二丁を入れマガジン三個と余った弾丸ポケットにしまった。

正志は服の上から防弾チョッキを着込み、左側のベルトに木刀を差し、コルト・ガバメントを腰のホルダーに入れ、ズボンの前にもコルト・ガバメントを差し、二ユーナンブ四丁、コルト・ガバメント一丁をバックに入れ、マガジン三個と残りの弾丸をポケットに入れた。

隆は防弾チョッキを着ていた服の中に着込み、左手に二ユーナンブを持ち、右手には金属バットを握り、腰のホルダーにコルト・ガバメントを入れ、ズボンの前にもコルト・ガバメントを差し、二ユーナンブ三丁、コルト・ガバメント一丁、をバックに入れ、マガジン三個と残りの弾丸をポケットに入れた。

隆「結構重装備になつて安心は出来るがちと動き辛いな。」

各々の用意が終わると一樹が違う部屋から音がするのが聞こえた。一樹「二人ともオートの方は装弾させてセーフティかけとけよ。あと他の部屋も見てみるぞ、生存者がいるかもしれないしな。」

隆「おい、目的は果たしたんだ！他の奴等に構つてる暇なんてないだろ？正志の家に向かうぞ！」

一樹「なんか気になるんだよ、一応国家公務員だろ警察つてさ、警察の生き残りがいればもしかすると何でこうなつたか分かるかもしれないだろ。」

正志「その可能性はありますね、じゃあ急ぎましょ。」

隆は不満そうな顔をしていたが渋々一人に着いて行つた。

三人は部屋を出ると近くにあるドアに近づく。

一樹「押収物、保管庫？」

鍵を開け中に生存者やゾンビがいないのを確認すると辺りを見回した。中には棚が幾つか並んでいてダンボールが所狭しと並んでいた。

隆「押収物つて事はやばい粉とか薬とかもあんのかなあ？」

た。

隆はダンボールの中を覗いたりして言った。

一樹「ここには用はない次行くぞ！」

その部屋の向かいにある最後の部屋のドアに立ち鍵穴に鍵を差し込み力チャツとゆう音が鳴つてドアノブに手をかけた時、中からガタンとゆう音が聞こえた。

正志「誰かいりますね確実に、ゾンビだつたりして。」

一樹「入つて見なけりや分からん。」

一樹はゆっくりとドアを開けるとパーンと乾いた音が部屋中と廊下中に鳴り響いた！一樹は右胸に衝撃を受け後ろに倒れた！

正志「一樹さん！一樹さん！」

正志の呼びかけに一樹は反応がない。

隆「大丈夫だ俺はゾンビじゃない！助けに来たんだここから一緒に逃げよう！」

*「いやあ～来ないで！」

*は部屋の奥から何度もこちらに向けて発砲した！全ての弾丸は壁等に当たつた。何度もかにカチッカチッとゆう音が鳴り弾丸が尽き今度は拳銃を投げてきた。

隆「わかつた銃は捨てていくからゆっくりそつちに行く！良いな！」
隆が部屋の中に入ると奥の棚に後ろを向き震えて隠れている婦人警官がいた。隆はゆっくり近づくと後ろからやさしく抱きしめて言った。

隆「大丈夫、もお心配いらないよ。さあここから出て家に帰ろう。」
そうすると婦人警官は隆の方を振り向き胸の中で声を出して泣いた。隆はやさしく肩と頭に手を回し抱きしめてなだめていた。

一樹「隆！急げ銃声を聞いて一階の奴等が下りてきやがった！」

婦人警官が放つた銃弾は右胸に当たつてはいたが先ほど着た防弾チョッキの部分に当たつていた。だが衝撃が強かつたのか軽く咳き込んでいた。

隆「もお平気なら少し急いだ方がいいみたいだ走れるかな？」

隆は婦人警官に聞くと少し落ち着いた婦人警官は頷いた。

隆「よしじやあ行こう！」

隆は婦人警官の手を取り廊下に走り出した！

正志「隆さあ～ん！こっちだあ～！急げえ！」

正志は通路の真ん中にあるエレベーターの扉を開けて大きく手招きしていた。隆と婦人警官は全速力で走った！だがゾンビの大群の方がエレベーターに着くのは早かつた。一番先に着いたゾンビを一樹がズボンから出したコルト・ガバメントで頭を打ち抜いた！

一樹「早くまだ間に合う！急げ！」

一樹はホルダーから出したコルト・ガバメントも持ち掴みかかってくるゾンビの額を打ち抜いた！それでもまだ押し寄せて来るゾンビの大群に正志もコルト・ガバメントを持ち応戦するが押されつづあつた。

隆「一樹！先に行つててくれ！後から必ず行く！」

隆は走るのを止めて言った。

一樹「何バカなこと言つてんだよ急げ！」

隆「正志！一樹を頼んだぞ！」

そう言つと隆は婦人警官を連れてヒターンして走つて言った。

一樹「隆～～～～～～！」

正志は両手でコルト・ガバメントを持ちゾンビに撃ち続けるが弾が尽きた、一樹はゾンビなんか構いもしないで隆の所に走り出す所を正志が止めてエレベータの中に入れ、閉じるボタンを押した！閉じるドアに一体のゾンビが近づいてきが正志が一樹からコルト・ガバメントを無理やり奪うとゾンビに残弾全てをを撃ち込んだ！ゾンビが吹き飛ぶのと同時にドアが閉まり。正志は二階のボタンを押した。

一樹「何で隆を見捨てた！ふざけんなよ！てめえ！隆・・・行かなきや・・・助けに行かなきや・・・あいつ待つてるから行かなきやダメなんだよお～！」

正志に掴みかかり罵倒し田には涙が溜まっていた。正志は急に一樹の頬を殴りつけた！一樹は後ろの壁までよろめくとそこに座り込

んだと同時にエレベーターのドアは一階に着き開いた。

正志「殴つてすみません。でも隆さんが……隆さんが僕に一樹さんを頼むつて言つたんだ！だから僕は何があつても隆さんの代わりに一樹さんを護らなくちゃいけないんだ！」

ドアが閉じようとするのを正志が手でそれを阻止した、その目からは涙がこぼれ頬をつたつていた。

正志「一樹さん、隆さんは簡単にやられる人じやない！短い間だけどあの人はそうゆう人だ！もし万が一隆さんが戻らなかつたとしても、一樹さんは直美さんだつて助けに行かなくちゃならないんだ！だからこんなあなたらしいですよ。」

座り込んでいた一樹がスッと立ち上がりシャツの袖で顔を拭うと、正志を見て言つた。

一樹「六つも年下に説教されるよりじや俺も落ちぶれたな。正志！今から車に戻つて隆を17：30まで待つ！もしそれまでに来なければ先に進むぞ！」

正志「一樹さあくん。」

正志は立ち直つた一樹を見て泣き崩れた。

一樹「泣いてる暇なんかないぞ！拳銃に装弾も済ましておけよ。」

正志「自分だつてさつきまで泣いてたくせに。」

一樹「何か言つたか？」

正志「いえ何も。」

二人は来た道を戻り車に向かつた。現在17：05

5・侵入（後書き）

何か小説について気になる点や「こうなつたら面白い等想つことがあるたらメッセージを頂けたら幸いです。

6・脱出

その少し前

隆「あつたあつた。」

先程婦人警官を助けに行く時に置きっぱなしだった拳銃を拾い上げた。二人は押収物、保管庫に入り隆は鍵を閉め、棚を倒しドアの前に置いてバリケードを作った。

隆「よしとりあえずこれでいいな。そうだ自己紹介してなかつたね、俺、板垣 隆年は23才君は？」

棚にあるダンボールを物色しながら聞いた。

婦人警官「・・・多古 梨乃24才です。」

隆「梨乃さんか、一つ年上ならお姉さんだね。ん? 今年24才?」

梨乃「今日誕生日です。」

隆「じゃあ同じ年だね俺も今年24才。ってか今日誕生日なの?」

梨乃「最悪な誕生日・・・」

梨乃是また泣きだしてしまった。隆はどうしたらいのか分からずとりあえず話し始めた。

隆「えーっとねさつき梨乃が撃つた奴覚えてるかな? そいつも今日同じ誕生日なんだ。」

隆は昨日一樹の誕生日を一日間違えた事、ケーキを一樹の顔に押し付けた事等を話し今までの事を面白く話した。

隆「んで人がボケてもシカトしたりする奴なんだよあいつは。」

梨乃是隆の話しを聞いているうちに少しづつ笑い始めた。

梨乃「一樹さんって方が本当に好きなんですね、友達のことをそんなに楽しく話す人初めて見ましたよ。」

急に顔を近づけて隆が言った。

隆「やつと笑ったね、やっぱ可愛いじゃん。俺の目に狂いはなかつたな!」

梨乃「やだ化粧ボロボロだし可愛くないから見ないでください。」

恥ずかしかつたのか耳まで真つ赤にして横を向いた。

隆「あいつとはね中学からずっと一緒にいるんだけど、あいつの事は一番信用してるし、あいつがいなかつたら今の俺はいないだろうしね。だから裏切つたり約束破りたくないんだよね今もこれからも。

」

梨乃「いいなあそうゆうのつて。」

隆「そおいや梨乃は何でここに？」

少し黙つた後話し始めた。

梨乃「今日は朝いつも通りに出勤してきて普段と変わらなかつたんです。八時くらいから色々な所から暴漢が出たとか異常者がいるとかでみんな出動していました。」

それがその異常者を連れて帰つてきた人達も所々怪我をしてしまつていて、異常者は言う事を聞かず暴れるのをやめなかつたので留置場に入れました。中には他の方も入つていたんですか収容したらその人達に襲い掛かり噛み殺してしまつたんですよ。それで致し方なく発砲許可を取りたかつたんですが、署長室にいるはずの署長に連絡が取れなくて・・・いや署長だけじゃなく部長等管理職の方々が見当たらなく、一人の警官が致し方なく発砲しなんとかその場を収めましたですが、外にその異常者と同じ症状の人達が警察署に集まつて來たんです。私達は必死にバリケードを作り何とかなつたのですが、他に出動した人達と連絡が取れなくなつていたんです。それで午後一時頃からまた異変が起つり始めたんです。怪我をして帰つてきた警官達が外の異常者と同じ症状になつてたんです！

発砲するんですが中には一般の方もいらしたので中々撃てなかつたりでみんな混乱してしまつてもう何がなんだか分からなくなつていて仲間の警官が私の手を取り地下のあの部屋に逃げ込んだんです。私の他に一人いたんですが武器庫の鍵を取りに行くと言つて出て行つたまま戻つてきませんでした。それでずつと一人で隠れていたら隆さん達がきてもパニックになつちゃつたんです。」

隆「そおだつたんだ．．．良く一人でがんばつたね。」

梨乃「でも私のせいでこんな事になつてしまつてすいません！私になんて構わなければ隆さん助かつたのに．．．」

隆「ちよつと待つてよ、それじや俺達助からないみたいじゃん！」

梨乃「えつ？」

驚いた顔で隆を見る。どこからかダンボールを持ってきた。

隆「ジャジャーン！」

梨乃「何？これ？」

隆「爆弾じゃな？ダイナマイトイって奴かな。」

ダンボールから一つ細長い片側からは導火線が出ているものを見て言つた。

隆「さつきこの部屋に来た時目に入つたんだよねえ。威力は分からないけどこれでなんとか切り抜けてみせるよ。だから終わりだなんて言わないで俺を信じて。」

梨乃「隆さんが来なかつたら助からなかつたんだから隆さんに全て託します。」

その時ドアを叩く音が響いた。

隆「待つててくれたみたいなタイミングできやがつたな！」

爆発や爆風等から大丈夫のように部屋の奥に棚とダンボールを積んで壁を作つた。

隆「梨乃、ここで待つてて。俺が合図したら頭を低くして隠れてて。あと万が一があるからこれ渡しておくよ。」

隆はコルト・ガバメントを梨乃に手渡し、ダンボールからダイナマイトを一本取り出した。

梨乃「隆さんは何を？」

隆「俺はお客様が来たみたいだから、挨拶してくるよ。」

梨乃「気をつけて．．．」

隆「ありがと。」

隆は激しく叩かれるドアの前に立ち棚などバリケードを少しづらし、少しだけドアが開くようにして鍵をあけた。

隆「頼むぞ、上手くいってくれよ。」

ドアを開けると隙間から長い廊下を埋め尽くす程のゾンビが皿に入つた。隆はポケットからタバコを取り出し火をつけた。ドアの隙間からはゾンビ共の腕が飛び出していて近くにいる隆を掴もうとしているが届かない。隆はタバコの火を一本のダイナマイトの導火線に火をつけ廊下の奥に投げつけた！

隆「梨乃！伏せろ～！」

とその時一体のゾンビの腕が隆の腕を掴んだ！

隆「くそ！離せ！」

隆は掴む腕を殴り引き離そうとするが一向に離す気配はなく諦めかけたその時一つの銃声が響くと隆を掴んでいた腕に当たり隆は開放された。

梨乃「隆さん急いで！」

隆は梨乃に向かつて走り出し爆発音と共に作つた壁に飛び込んだ。

その少し前一樹と正志は車の近くの壁を背に外にゾンビから身を隠していた。

正志「一樹さんそろそろ一七・三〇ですね、やつぱり隆さんはもあ・・・」

一樹「大丈夫だ！あいつは後からすぐに行くつて言つたんだ、あいつはいつもはふざけているけど約束は破つたことないんだ。」

一樹は全ての銃に装弾を終わらせて携帯を見ていた。

兄貴『わかつた病院に行くなら止めはしないが気をつけるよ。家の回りにゾンビ共は少ないからこつちは大丈夫だ。またなにがあつたら連絡する。』

『兄貴へ。こつちは今警察署で銃を探しに来て収穫はあつた。これから病院へ向かう。』

一樹「直美と信からメールがない、信はどこにいるかわからないからどうしようもないが直美は・・・くそ！」

正志「一樹さんこのままじゃ真っ暗になっちゃいますよ急がないと。」

「

一樹は携帯を握り締め空を見上げていた。

一樹「わかつた正志の家族にも時間がないしな、車に乗れ行くぞ！」

二人が車に乗り込むと警察署の中からものすごい爆発音と共に建物の窓ガラスは割れ破片を飛び散らかせた！

正志「なつ何だ今の！？ガスに引火でもしたのか？」

一樹「隆だ！あいつしかいない正志！行くぞ！」

一樹は正面右側の入り口に走った。

正志「えつ？ちょっと待つてくださいよ。」

入り口に着くと一樹はコルト・ガバメントのマガジン部分でガラスを割り鍵を開け中のバリケードを崩していった。

正志「一樹さんその先は危険ですよ！」

正志の言う事も聞かずバリケードを越した。ゾンビはほぼ全体が地下に下りていたがそれでも20～30体は少なくてもいる。だが一樹はゾンビに発砲しつつ接近して近くに寄るゾンビを片つ端から殴りけり、コルト・ガバメントが火を噴いた！自分の回りにゾンビがいなくなると地下に下りる階段に走り寄つたがその時またもや爆音が響き爆風で一樹とゾンビは一斉に吹き飛ばされた。

正志「何が起きてるんだ？」

一樹は爆風で吹き飛ばされ壁に背中を激しく打ち付けていてすぐに起き上がり近くにいたゾンビが数体が一樹に近寄る。

正志「一樹さん！逃げて！」

正志はゾンビに向かつてコルト・ガバメントを発砲するが扱いに慣れていないせいか全く当たらなかつた。

一樹「邪魔するなあ～！」

一樹は近寄るゾンビに倒れたまま発砲し弾を撃ちつくすとコルト・ガバメントからマガジンを抜き予備のマガジンを出し装填させズボンからもう一丁コルト・ガバメントを出し瞬時に飛び起き周囲にいるゾンビ共の眉間に的確に捉えた。また一樹は階段に駆け寄り眼下にいるゾンビ目掛けて発砲した！正志もやつと一樹に追いつくと

樹の「コルト・ガバメント」が弾切れになり、一つ共マガジンを入れ替えると、一丁はまたズボンに差し、正志の腰から木刀を引き抜き、目下に飛び降り、ゾンビの頭部を叩きつけ、着地と同時にコルト・ガバメントを違うゾンビの頭を打ち抜いていた。

狭い階段に飛び降りた一樹に大勢のゾンビが逃げ場がないほど取り囲む。正志も上から援護をするが扱いが慣れていないため、一樹に近いゾンビを狙えない。一樹は近くにいる奴から片つ端から撃ち続けて、いき少し間合いが出来ると目の前にいるゾンビ三体を同時に居合いで頭を叩き切った！

周りにいるゾンビを全て殲滅させると地下に向かって駆け下りた！と同時に何かが下から上がってきて、一樹と衝突しそうになるが、一樹は横に跳び、それに木刀を切りつける！が木刀はその鼻先で止まり、一樹の眉間に木刀が向かっていた。

隆「お待たせダーリン。待たせちゃったかな？」

隆は銃口を下ろし笑いながら言い、一樹は隆を睨み。

一樹「遅えんだよ！暇だったからこいつらと遊んでたよ。」

そう言うと二人は笑った。

梨乃「あの・・・急いで逃げないと一階にいるのが・・・」

隆「そうだ急げ！」

二人は一階に上がり銃を構えるとそこには微かに動いている奴はいるが、20~30体いたゾンビは全滅していた。

隆「どうなつてんだ？」

隆が唖然と立ち尽くすと、正志が近寄り言った。

正志「全部一樹さんがやつつけちゃいましたよ。」

隆が一樹に振り向こうとした時、横を一樹が走り抜けた。

一樹「急げよ、外もこの調子だと結構集まってるぞ！」

一樹に続き、正志が走り出し、隆と梨乃もそれに続いた。右側玄関を出ると、見えたのは車に数え切れないほどのゾンビが集まっていた。

一樹「あれじや走り出せねえ！」

隆「いいもんあるぞ。」

「

隆がバックからダイナマイトを出した。

一樹「こんなもんどこで？」

隆「押収室に落ちた。」

隆は導火線に火をつけ振りかぶった。

隆「どいてろ！ 隆アターック！」

隆は思い切りダイナマイトを放り投げ道路の真ん中に投げつけた。

一樹「お前バツ」

正志「マジ！？」

梨乃「キヤツ！」

四人は後ろに飛び退くと同時にダイナマイトは大爆発を起こし周囲一体を跡形もなく吹き飛ばした。

一樹「バツカ野郎！ 何考えてんだ！ 車まで吹っ飛んだらどうすんだよ！」

隆「まあまあほら見てみろよ。」

車は無事にそこにあつた。車の周りにいたゾンビ共は爆発の衝撃で息絶えたものや爆風で遙か先まで吹き飛ばされていた。

隆「ほら結果オーライってやつでしょ。」

一樹は呆れた顔をしていたが隆を見て手を差し出した。それを隆が握り返した。

一樹「全くこのバカは死んでも治らねえな。一遍死んでこい。」

隆「いやあ中々死ねないもんだね、神様がまだ俺を死なせてくれなくてさあ。やっぱ世の中が俺を必要としてるって事かな。」

一樹「バ～力言つてろ。」

正志「でも本当に無事でよかつた。」

梨乃「あの . . . 折角の所申し訳ないんですけど急ぎませんか？」

隆「おだつた、早く行かねえと真っ暗になつちまつだ。」

四人は車に乗り込み警察署を脱出し正志の家に急いだ。

四人を乗せた車は隆の運転で道沿いの街灯が点きだしていた中を走っていた。車中では隆が先ほどまであったことを説明していた。

隆「んでダイナマイトで吹っ飛ばしてやつてその後はひたすら撃ち進んで来たんだけど階段の近くまでは効いてなかつたみたいで結構ゾンビがいたんだよ。突破は無理そうだつたからまたダイナマイトの出番で、吹き飛ばした後一樹に会つたつて訳。」

一樹「危うく俺まで巻き添え食らうとこだつたじゃねえか！」

隆「まあそお怒るなつて、そんな事より一階にいた奴等は本当に一樹一人でやつたのか？」

正志「そおなんですよ一人でゾンビの群れに走つて行つたと思つたら次の瞬間にはそこにいたゾンビ共を全員やつつけてまた次にっこじで凄かつたんですよ！何度もやばい時もあつたんですけど木刀を手にしてからがまたすごいのなんのつて。」

正志は初めておもちゃを貰つた子供のような顔で壁が飛ぶのも構わず説明した。

一樹「無我夢中でよく覚えてないんだけどな。」

隆「昔からそおゆう事あるよなお前は。んでそん時正志は何してたの？」

正志「いや、あの、一樹さんが危なくなつた時援護したんですけどゾンビに全く当たらなくて・・・すいません。あつそうだ一樹さんこれ落としたままだつたんで拾つておきました。」

正志は一樹に空のマガジンを三つ一樹に渡した。

一樹「悪い、助かるよ。」

隆「まああやまる事ねえよ正志がいなかつたら俺等だつてこいつにないんだからな。」

一樹「そおだ今回こおなつたのはこいつのせいなんだからな。」

一樹はそお言つと運転席の後ろ側を軽く蹴つた。

隆「だつてよお、もし間に合わなかつたらみんなやられちまつたかもしんないだろ?だからさあ . . .」

梨乃「すいません、私が悪いんです。私がいなければみなさんは危険な目にあわなかつたのに . . .」

隆「梨乃、そんな事言つなよ。あの時はあれでよかつたんだ、みんな無事だしそんな事思つてる奴なんかいないよ。」

一樹「い、や不満大有りだね!」

正志「うん、その通りだね。」

二人は隆が運転席から伸ばした手を助手席に座る梨乃の肩に置いてフォローしているのを見て言った。

隆「お前等よくそんな酷い事言えるな! 梨乃がどんな思いをしてきたかわかつてんのか。」

一樹「その事に対してもうあねえよ! その人がどんな辛い思いをしてきたのは見ればわかる。ただ一つだけ気に入らない事があんだよ!」

隆「気に入らないってなんだよ?」

一樹「違和感なく梨乃つて呼び捨てにしてる」ということは名前もなんも知らねえのにさあ。」

隆はえつ?とゆう表情をして梨乃を横目で見て顔を赤らめた。

正志「さり気なく肩にまで触れていましたぜ親分。」

一樹と正志は細めた目で隆を見ながら言い、隆は慌てて自己紹介をした。

隆「え、つとこちらは多古 梨乃さん^{たじいの}24歳で一樹と同じ今日が誕生日で、警察官で俺等とタメだ。」

梨乃「宜しくお願ひします。あのせつとはすいません、お怪我ありませんか?」

後ろに振り向き会釈をしながら一樹に言った。

一樹「大丈夫だよ、ちょっとビックリしたけど防弾チョッキ着てたしね。それにどうせ死ぬなら君みたいに可愛い子に殺される方が幸せだしね。誕生日も同じだしなんか運命とかだつたりして。」

隆が軽く咳払いをして話しの間に割つて入るよに続けた。

隆「こいつがさつき話した岡村 一樹 それとこっちの青と白の囚人 おかもいがすき 服っぽい服着てるのが江田 正志 一八才高三だ。」

正志「囚人は酷いですよバイト中にこんなことあって着替えるの忘れてたんですから。」

隆「ここにくるまでにずいぶん偉くなつたもんだな最初はびびりまくつて震えてたお子様だつたのにな。」

さつきの仕返しと言わんばかりに正志をからかつた。

正志「隆さんだつて俺が危ない時ボロボロ泣いて正志死なないでくれぐつて叫んでたじやないですか。」

隆「そんな事言つてねえだろこのやろー。」

正志「へへ～んだ、こつちこれるもんならおいでの～だ。」

正志は隆に舌を出してからかつていて隆は後ろを振り向いて正志を睨んでペットボトルやタバコを投げつけていた。

一樹「前ちゃんを見ろ、何かあつてからじや遅いんだぞ！正志もそのぐりいにしどけ。」

隆「うおつと！」

隆は正志とやりあつてると車は蛇行運転になつていたが一樹の一言で前を向き体勢を持ち直した。

一樹「全くこいつらはこんな時なのに緊張感つてもんがないよなあ。」

「

一樹が大きく溜息をついて言つとそれに笑つていていた梨乃が言つた。梨乃「でも良かつたまたこ～うして笑えるなんて思つてもいなかつたもの。隆さん、一樹さん、正志さん、本当に感謝してます。」

一樹「いいんだよ、人間一期一會だ。あと俺等はもう仲間だからこれからは助けられてもお礼を言つ事なんてないよ。それと俺も梨乃つて呼んでいいかな？俺もさん付けじや落ち着かないしな。」

正志「自分だけ抜け駆けはないよ、ねえ梨乃。つてか俺ん時はそんな事言わなかつたじやないですか！じゃあ俺も今度から一樹つて呼ぼお。」

正志が助手席に座る梨乃に近づきながら言った。

一樹「お前はダメだ。」

正志「え、なんで俺だけダメなの。」

一樹「男には先輩後輩とか上下関係つてのがあるんだよ。」

正志「そんなんあ。」

一樹は正志に厳しい先輩風を吹かし、正志は残念そうに口を尖らせて落ち込んだ。

梨乃「正志君良いよ、梨乃つて呼んでも。」

正志「マジ？ いいの？」

梨乃「ねえいいでしょ？ 一樹。」

一樹「全くしょおがねえな。」

一樹は頭を軽く搔き笑いながら言った。

隆「なあんか俺だけ仲間外れにしてない？ どこ行くのも運転手つて損だよなあ。」

梨乃「そんな事ないよ。隆には一番感謝してるのよ。」

隆「おつ . . . おい正志、道はまだまっすぐか？」

隆は恥ずかしさを隠すため前を向いたまま正志に言った。

正志「おです、ねまだまっすぐ行つて下さい。そうすると左側にガソリンスタンドがあるんでそこを右に曲がってください。」

隆「了解！」

四人を乗せた車は目的地に向かい走っていた。田は大分落ちあと少しで夜になろうとしていた。現在 18:40

正志「次を左に行つたら右側に見えるんですけど、どうしましよう比較的裏道なので奴等は少ないですけど、どうやつて家に入りましたう。」

一樹「バリケード作られてても何とか入り込めるだろ？ 一階とかから。」

正志「そお . . . ですよね。」

一樹「なんか言いたそعدだな？なんかマズイ事でもあるのか？」

隆「左曲がったぞ。そろそろか？」

正志「左に見えるのが僕の家です。」

隆「左つて壁しか見えねえぞ？」

正志「それウチの塀です。」

隆「えつ！？結構先まで続いてるぞこの塀。」

その塀は長くおよそ100m以上はあり高さは4mをはあつた。正志「多分正面玄関も、裏口も開かないと思つんで塀を乗り越えるしかないんですけど、どうしましょ。」

隆は驚きを隠せないのか黙つていた。

正志「一応裏口行つて見ますか？」

車は裏口に着き車を停めると一樹が飛び出し近くにいたゾンビを木刀で頭を叩きつけ絶命させた。

一樹「よし、いいだらうここにはもういないみたいだ。」

一樹は辺りを見渡すと合図を送り車からみんなが降りてきた。

正志「やつぱり開いてない。どおしよう。」

一樹「この扉はどうやって鍵かけてるんだ？」

正志「こここの鍵は裏から門をかけてあるだけなので中に入れれば簡単に開けるんですけど。」

一樹「わかつた。」

一樹は急に車に向かつて走り出しそのまま車の屋根まで駆け上がるとそのまま塀に一步、二歩、三歩とかけあがり意とも簡単に4mはあるだろう塀によじ登り中が安全なのを確認すると向こう側へと消えた。

その時ゴトゴトと音が鳴りその後ゆっくりと裏口が開き一樹が手招きをしていた。

隆「今更があいつ本当に人間離れしてるとよなあ。」

正志「僕だつてもうこんな事じや驚きませんよ。」

唯一始めてみた梨乃是目を丸くし一樹が駆け上がり越えていった場所と裏口にいる一樹を交互に見ていた。

隆「梨乃！入るぞ。」

梨乃「はつ、はい。」

四人は正志の家に入るとまた同じように裏口を閉め奥に進んだ。

隆「こりやすつげ～広いな！道場つて儲かるんだな。」

正志「僕は経営は良く分からんのですが結構代々伝わつてきている土地らしいですよ。でも父が倒れてからは門下生が少なくなつてしまつたので、経営やばいのかな？」

正志は軽く苦笑いをして母屋に向かい歩いていた。

一樹「親父さんは病気か何かで？」

正志「それが分からんんです、去年から体調を崩し始めどこの病院へ行こうが原因が分からぬの一言でした。」

一樹「そうか、余計な事を聞いて悪かつた。」

正志「いいんです気にしないでください。あつ見えました、あそこです。」

正志が指差すところに辿り着いたそこには一般家庭の4個分ぐらいの一階建てで瓦屋根の母屋が建つていた。

一樹「やつぱりぜんぶ鍵が閉まつてバリケードをしてるみたいだな。正志なんとかならないか？」

正志「ちょっと呼んでみますね、お～い！母さん！莉奈～！」

正志は何度か呼んでみるが何も反応を示さなかつた。

正志「あれ？おかしいな？必ずあそこに誰かしらいるんだけどなあ。」

「隆「まさか思いたくないがもう・・・」

正志「そんな事ないですよー！とか違つ部屋にいるんですつて、きっと・・・」

すると窓から何かがこちらを隠れながら覗く物がいた。

女の子「やつぱりお兄ちゃんだ！お母さん、お兄ちゃんが帰つてきたよ。」

それは正志の妹であつた。

正志「莉奈！良かつた無事か？」

莉奈「うんみんな大丈夫だよ。今お母さんが鍵開けに下りたよ。」

少しして中に明かりが付き玄関のバリケードを崩しているのかガ

ラガラと激しい音を鳴らし玄関は開きそこには純和風な感じの和服を着た女性がいた。

正志の母「正志・・・」

正志の母は駆け寄つて正志に抱きつゝと涙を零し力強く抱きしめた。

正志「ちよつ母さん痛いつて、ほらみんなも見てるし。」

正志の母はゆっくり正志から離れるとみんなの存在を知り急いで涙を拭い顔を赤くしていた。

正志の母「私つたらみなさんの前でなんて事を。」

一樹「いいんですよ、親が子を思ひ気持ちは当たり前の事なんですから。良かつたら中に入つても？」

正志の母「ありがとうございます。どうぞお入りください、みんなの事を主人もお待ちしていますから。」

正志「父さんが？まあみんな上がつてください。」

3人は家に入るとその広さに圧倒された。敷居を跨ぐとそこには古いのではなく赴きがありこんな時でも清掃も行き届いていた。

隆「玄関が普通の家と変わらない広さだぞこりや。」

梨乃「でも正志君おぼっちゃまには見えないわよね。」

隆「最近の高校生なんてあんなもんだよ、髪染めてピアスなんてしない方がおかしくらいじやないか。」

梨乃「やっぱそなんだねえ、補導される子もそんな感じの子多いからなんか複雑。」

一樹「今の世の中真面目な奴の方が殺人をしたりしてるから一概には何とも言えないがな。」

階段を上がり廊下を進み一樹が正志の母に聞こえないよう言つた。一樹「中に入いる噛まれた奴が少しでも怪しい行動を取つたら躊躇するなよ！」

隆「わかつた。」

正志「はい。」

正志の母「みなさん」」です、中に入つてくつろいでいて下さい、

今お風呂の支度とお茶をお持ちしますので。」

一樹「お構いなく。」

三人は部屋に入る「や」には先程窓から覗いていた女の子が立っていた。

莉奈「お兄ちゃんおかえり。」

急に抱きつくと正志はその勢いで隆を巻き込み倒れてしまった。

正志「痛え、『や』莉奈！早くどけ！」

莉奈「やだよおだ！すんごい心配したんだからね。」

莉奈は短いスカートを履いていたが仰向けに倒れる正志の上にまたがっていた。

隆「痛たたた、『や』『や』れるなら向いひでやつてきなさいお嬢ちゃん。パンツも見えてんぞ。」

莉奈「大丈夫だよおじさん、別に見られたつて減るもんじゃないしね。」

隆「おじさん！？」

隆は腰を抑えながら立ち上がり一樹を見てがつくりと肩を落とした。

正志「バカ！お前隆さんに何て事言つんだよ。」

一樹「莉奈ちゃんだけ？申し訳ないんだがおじさん達お兄ちゃんに話しがあるから離してもらえないかな。」

すると一樹を見た莉奈は急にスカートを抑えて立ち上がった。

莉奈「始めてまして、江田『えたりな』莉奈です。16歳高一です。彼氏はいません。お兄さんは彼女ですか？」

一樹「いないけど。」

莉奈「じゃあ私と付き合つてください。」

四人は口を開けたまま呆然としてしまった。

正志「お前さつきからなんなんだよ！みんなに失礼だろ！」

莉奈「なんかビビッつてきちゃつたんだもん。」

正志「ビビッじゃねえよ全くみなさんはいませんこんな妹で。」

梨乃「いいんじやない、素直ないい子で。」

隆「一樹はお兄さんで、俺はおじさん・・・」

唯一隆だけ落ち込んでいた。

五人はテーブルを前に座り休むことにした。莉奈は一樹の隣に座り異様なまでにくつついていた。

正志「こちらが一樹さんで、こちらが隆さんで、こちらの女性が梨乃さんだ。失礼がないようにしろよ。」

莉奈「一樹さんって言つんだ。みなさん莉奈です、よろしくお願ひします。おじさん達とお兄ちゃんつてどうやって知り合つたの？」

隆「またおじさんつて・・・」

梨乃「私だつてあの子からしたらおばさんなんだから気にしないの。」

莉奈「警察面のお姉さん、梨乃さんでしたつけ、おじさんと付き合つてゐるの？」

梨乃「えつ？付き合つてないわよ、それがどうしたの？」

莉奈「もし付き合つてたら梨乃お姉さんとおじさんとじゃ釣り合はないなあつて思つて。」

隆は尚も余計に落ち込んだ。

隆「やつぱ俺だけおじさん・・・生まれてこなきや戻かつた・・・」

梨乃「そんな事ないよ隆、ほら元気出してつよよしよし。」

梨乃は隆の頭を子供のように撫で元気付けていた。

正志「莉奈～！お前わつわから隆さんに恨みでもあるのか？」

莉奈「別に、普通だよお～。」

一樹「さてそんな事より莉奈ちゃんに聞きたいことがあるんだが。」

莉奈「そんな、莉奈つて呼んでください。」

一樹「じゃあ莉奈に聞きたい事があるんだけどいいかな？」

莉奈「何でも聞いてください。」

一樹「まずお父さんはどこに？」

莉奈「具合が悪いので隣の部屋で横になつてます。」

一樹「そうか、あと怪我をした人がいるみたいだがその人はどこに？となりか？」

莉奈「なんか具合悪くなつたからつて横になつてくるつて言つてました。」

一樹「わかつたありがとう、梨乃はここに莉奈と待つててくれ。」

梨乃「わかつた、気をつけて。」

一樹「隆！顔上げろ！行くぞ。正志、隣の部屋に行くぞ、案内頼む。」

「正志「わかりました、行きましょ。」

莉奈「何？私も一樹さんと行くー！」

一樹達に着いて行こうとする莉奈を力ずくで梨乃を抑えた。

梨乃「女は黙つて男の言つ事を聞くものよ。まあ時と場合によるけどね。」

三人は部屋を出て手にはコルト・ガバメントを手に隣の部屋に向かつた。

三人は隣の部屋に着いた。

正志「ここです。」

隆「もしかすると手遅れの可能性もあるぞ。」

正志「覚悟します。」

一樹「入るぞ。」

部屋に入ると中は真っ暗で何も見えない、正志が照明のスイッチに手がかり明かりをつけた。その奥では一人の男性が寝ていた。

*「誰だ？」

正志「父さん！？」

正志の父「正志か？」

正志「うん。」

正志の父「そうか無事にここまでこれたんだな。後ろのお二人のお陰らしいな。」

正志の父は後ろに立つ一人を見て言った。

一樹「岡村 おかむらかずき 一樹です。」

隆「板垣 いたがきたかし 隆です。」

正志の父「正志の父です。お一人には色々正志を助けていただいたみたいでなんとお礼を言つたらいいのか・・・して一樹君つて言つたかな？たしか居合いができると聞いたが？」

正志「父さんなんで知つてるの？」

正志の父「莉奈の電話にお前から連絡があつたことを一部始終聞いたよ。」

正志「そおなんだ僕の壱ノ型 いちのかなっせん 一閃を見ただけで使つたんだよ、僕よりも完璧にね。」

正志の父「なるほど、この正志が言つんだから間違いないだろ？な。見ただけで出来るとは何かをしてらっしゃったのかな？」

一樹「いえ何も、一人とも持ち上げすぎですよ。たまたま出来ただ

けでまぐれですよ。」

正志の父「いや、まぐれで出来るような技ではないんですよ。足の運び、右肩、右肘、右手首、右掌、そして抜刀の速度、どれかひとつが欠けても木刀では普通の打撃となんら変わらんからな。一つだけ言うなら君は天性のものを持っているとゆうことだ。ビリだねウチの入門しないかね？悪いようにはしないぞ。」

一樹「そんな大袈裟なあ俺はどこにでもいる一般人ですよ。あとどうも鄙い事とかが苦手なんですよ。」

隆「もつたいねえなここまで言つてくれてんのに。」

正志「そですよ、約束したじゃないですか！僕と一緒にやつてくれるつて言つてたじやないですか。」

一樹「俺は考えとくつて言つ . . .」

その時階下からガシャーンと何かが割れる音と悲鳴が聞こえた。

一樹「ちつ、忘れてた。急がねえと。」

一樹は悲鳴が聞こえた方へと走り出し、隆と正志も後を追うが正志は呼び止められた。

正志の父「正志、これから何かあつた時は一樹君に付いていきなさい、あの子の目には何か秘められた物が見える。」

正志「ああわかってる。」

正志は振り向き一人が向かつた先へ急いだ。一樹は一足早く悲鳴が聞こえた所に着くとそこには台所だつたがいるはずの正志の母親がない。すぐ後ろから隆と正志がやつてきた。

隆「正志の母ちゃんは？」

一樹「分からない、一体どこに？」

その時台所の隣の部屋から物音が聞こえ一樹はそこを見るとドアが少し開いているのが見えた。

一樹「そこか？」

一樹はドアを開けると田の前には人であつたものが口から血が混じつたよだれを垂らし一樹の喉元に噛み付いてきたが、一樹は腕でそれを受けと横に倒し手に持つていたコルト・ガバメントで頭を

吹き飛ばした。

隆「一樹大丈夫か？」

一樹「なんとかな。それよりおふくろさんは？」

三人はその部屋を探すと押入れの中に身を小さくして震えていたのを見つけた。

正志「母さんもお平気だから。もお心配要らないから僕が付いてるから。」

正志はそう言うと母親を強く抱きしめた。

隆「やっぱ親子つていいもんだな。なあ一樹。」

一樹「ああそだな。大丈夫みたいだから俺は先に戻つてるぞ。念のため隆は付いててやつてくれ。あと親父さんと莉奈にはできるなら内緒で。」

隆「わかつた。」

そこを後にした一樹は途中にあつたトイレに入り左腕の袖を捲つた。

一樹「限られた時間はもないか。」

なんと一樹は先程の奮闘でゾンビに腕を噛まれていた。手に巻いていた布を傷口に巻き止血し部屋に戻つた。この時19:10

莉奈「あつさつきなんかでつかい音が聞こえたけど何があつたの？」

一樹「何もないよおふくろさんがお皿を割つちゃつたみたいでね。」

梨乃「どうだつた？ 大丈夫だつた？」

一樹「ああ、おふくろさん怪我もないし大丈夫だよ。お皿は手遅れだつたから片付けてきたよ。」

梨乃「そお . . .」

一樹は椅子に座ると田の前に灰皿が目に入り莉奈に聞いた。

一樹「タバコ吸つてもいいかな？」

莉奈「どうぞ、うちではお父さんしか吸わないけど今はあんな状態だから吸わないけどね。」

それを聞くと一樹は懐からタバコを出し深く吸つて氣を落ち着か

せていた。少しして隆と正志は母親を連れてお茶を持って上がりってきた。

正志「こんなものしかないんですけど良かつたらどうぞ。」

テーブルにはお茶と煎餅が出された。

梨乃「ありがとうございます。じゃあお言葉に甘えて。」

梨乃はお茶を手に取り啜つた。

一樹「おふくろさん、お氣使いありがとうございます。大丈夫ですか？」

正志の母「大丈夫です私には護らなくちゃいけない人もいるし、正志も付いていますから。」

一樹「そうですか、なら良かつた。」

正志の母「そうだおなか空いているでしょう？お風呂の支度をしたので良かつたら入ってください。みなさん大分汚れてるみたいだし。」

笑いながら正志の母は言つたが四人は改めて見るとお世辞にも綺麗な格好はしていない、血と汗で汚れ所々が破れていた。体も擦り傷や打撲数え切れない傷を負いつつも良くここまで無事に来れたものだ。

一樹「何から何まで本当にありがとうございます。では遠慮なく頂きます。梨乃、先にお風呂頂いてくるといいよ。」

梨乃「みんなの方が疲れてるだろうし、私は最後でいいよ。」

隆「レディーフーストだよ。」

莉奈「私も梨乃お姉ちゃんと一緒に入る。」

正志「バカ！そんな羨ましい・・・じゃない迷惑だろ！」

梨乃「私は迷惑じゃないよ、じゃあ一緒に入るつか莉奈ちゃん。」

莉奈「やつたね。」

二人は浴室に向かつた。

一樹「実は話しておきたい事がある。」

一樹は持ってきた拳銃などの手入れをしながら話した。

一樹「考えたんだが梨乃はここに残つてもらおうかと思う。ここな

らあの高い塀だゾンビ共は絶対に入つて来れないしここなら比較的辺りにもゾンビは少ないしな。」

正志「そうですね、病院には今まで以上のゾンビがいるかもしだいですね。」

一樹「……違う、正志お前も残るんだ。お前はここにいてみんなを護つてくれ。頼む。」

隆「そうゆう事、大体お前の事気に食わなかつたしまあいただけ少しほは役に立つたけどな。だからこの先には関係のないお前はいらなうって事だよ。」

一樹「まあそあゆう事になるかな。」

正志「そんな事言つたつて無理ですよ！あなた達にはどれだけ助けられたと思ってるんですか！ここにだつて僕一人じゃ来れなかつたしさつきだつて僕じや母さんを護れなかつたかもしぬない。だから少しでも一人の力になりたいんですよ。」

正志は一人がワザワザ危険な所に連れて行きたくない気持ちを察し何があつても付いて行くと言つて聞かなかつた。

一樹「だからな正志、俺等は別に帰つてこないつもりじやないんだ。直美を連れて必ず帰つてくる。」

正志「絶対に嫌だ！」

その時後ろのドアが開き正志の父親が入つてきた。

正志の母「お父さん歩いても大丈夫なんですか？」

正志の父「この子達は必死にがんばつてここまで来てくれて私達を護つてくれた。今後の事まで話しているのに寝てられる訳ないだらう。」

正志の父は椅子に座り一樹と隆に言った。

正志の父「申し訳ないが隣で話しが聞こえてしまつてな。一樹君、隆君、どうかこの子も連れて行つてあげてはもらえないだろうか？この子は気が優しく引っ込み思案な所があつたが今朝から数時間会わないだけでこんなにも男の顔になつて帰つてきた。だから足手まとい承知でお願いしたいんだ。どうかこの子を宜しくお願ひします。」

正志の母「お父さん . . . 」

正志「父さん . . . 」

隆「そこまで言われちゃあなあ、わかりました、任せてください正志は責任を持つて連れて帰つてくるので安心してください。」

一樹「親父さん、正志は俺等に会わなくともこいつは一人前の男ですよ。俺も隆も正志がいなければここに辿り着くのは無理だつた。親父さん、正直正志を無事に帰す事は約束できません、それでもいいんですか？」

正志の父「それは正志が一番良くなつてゐるだらう。代々江田家の男は頑固らしくてな。一人ともこの子を頼みます。」

一樹「わかりました。親父さん顔を上げてください。正志！今日はもう外は暗くて危険だから出発は明日だ。ちゃんと朝起きねえと置いてくからな！」

正志「はい！ . . . ありがとお父さん。」

正志の父「礼を言つなら一人に言ひなさい。正志良い顔になつたな。あとあの娘さんのことなら心配しなくても本人がちゃんとわかっているだろ？。」

一樹「えつ？」

正志の父「さつき君達が下に下りていつた時に娘と話していたのが聞こえたんだよ、君達とは一緒に行きたいが足を引っ張るだけになるとな。だからこゝに一緒に残つていいかと話していたよ。あの子もまた強く生きてきたんだな。」

隆「梨乃 . . . 」

その頃風呂場では。

梨乃「莉奈ちゃん16才だつたよねえ？」

莉奈「おだけどおしたの？」

梨乃「何でそんなに胸が大きいの？食事？生活？何の違い？私なんて全然ないから . . . 」

莉奈の胸を見た後自分の胸を見て溜息をつく。

莉奈「そんな事ないよ大きいと肩こるし男子には変な田で見られるとし電車やバスに乗ればかなりの確立で痴漢に遭うしね。でも小さい方が感度が良いくて言うよね。」

莉奈は急に梨乃の胸を後ろから揉みはじめた。

梨乃「ちょっと莉奈ちゃん止めてって……あつ……んつ……」

莉奈「超敏感でかわいい~。」

梨乃は莉奈を振りほどくと手元に置いてあつた桶で莉奈の頭を叩いた。

梨乃「いいかげんにしなさい。」

莉奈「ごめんなさ~い。」

頭を抑えて半ベソをかいていた。

梨乃「高校生の癖になんてそんな事知ってるのよ全く、しかも上手いし。」

莉奈「え~そんな事ないよお今時みんなこんな感じだよお。」

梨乃「まさか初体験はまだ……だよね。」

莉奈「中一の終わりに教育実習で来てた人と放課後学校でしたよ。」

梨乃「中一? 14才? 教育実習生と? 学校? 世も末だわ……つて不順異性交遊じやないその教育実習生も署で取り調べる必要があるわね。」

莉奈「ちょっとまつてよ昔のことだし時効でしょ! それよりも梨乃お姉ちゃんは彼氏とかいないの? まさか処女だつたりする?」

梨乃「処女ではありません。彼氏はいな~いけど……」

莉奈「けど……」

梨乃「気になる人はいる。」

莉奈「わかったおじさんでしょ?」

梨乃「うん……でもなんか好きってゆうかなんか一緒にいたい人。

「

莉奈「良かった、おじさんで。一樹さんだったらどうしようつかと思つたよお。」

梨乃「怒らないで聞いてね、でももしかすると私一樹の事が好きかもしれないの。」

莉奈「だつて今おじさんだつて言つてなかつた。」

梨乃「それとはまた違う気持ち、なんか何かをしても田で一樹を探してる自分がいるんだ。なんか不思議な人だよねふざけてたと思つたら急に眞面目になつたり、目がねなんか見ると深いつてゆうか一樹を見れば見るほど魅かれていくの。」

莉奈「わかつたよ、梨乃お姉ちゃんは今から私のライバルね。負けないから。」

梨乃「わかつた。お手柔らかに。さてやろそろ出来しそうかみんなが待つてるしね。」

梨乃は少し大き目の洋服を借りて着替え、一人はみんなのいる部屋に向かつた。

正志の母「こんなものぐらいしか出来ないしお口に合ひつかどうか分からぬけど良かつたら、召し上がつて。」

煮物や揚げ物多彩な料理がテーブルいっぽいに運ばれた。

正志「母さんいくらなんでも多くない?」

正志の母「あら若いんだからこのぐらい大丈夫よ。」

丁度風呂から上がつた梨乃と莉奈がやつてきた。

莉奈「莉奈お腹ペツコペツ、あつ！ いただき～。」

莉奈はテーブルに出されていた唐揚げを摘んで一口で食べたが母親に手を叩かれ怒られた。

正志の母「こらー！ 御行儀悪い。お密さんが来てるんですからね。」

莉奈「ごめんなさ～い。」

梨乃「おば様手伝えます。」

正志の母「いいのよもう終わりだから、座つて。」

梨乃「じゃあお言葉に甘えさせていただきます。」

正志「じゃあみんなも揃つたしいただきましょ～うか。」

隆「頃そお～いつただきます！」

他「いただきます。」

みんなは料理に箸をつけ口に運んだ。

隆「皿に…おふくろわんこれならこくらでも食べれますよ。」

一樹「うん、美味しい。」これがおふくろの味ってやつだな。」

正志の母「あら、嬉しい。おだててもこれ以上は何も出ないわよ。」

お茶を入れ笑いながら言うとみんなに差し出した。

梨乃「お世辞じゃないですよ本当に美味しい。」

隆「そもそも嘘じゃないですよ、俺、暖かいつてゆうかなんてゆうかこんな皿いじ飯一樹の家でぐらうしか今まで食べた事ないからさあ。」

正志の母「お母さんの料理は？」

一樹「！？」

隆「俺母親知らないんです、父親も。物覚え付いた頃にはもう施設にいて…まあそんな事より冷めちゃうから食べましょ。」

莉奈「え～気になる。」

正志「バカ！そんな事いいんだよお前は黙つて食べて。」

莉奈「はあ～い。」

少し静かな時間が流れ隆が話し始めた。

隆「なんか空氣悪くしちゃったね、じゃあ少し昔の話でもしようか。いいよな一樹？」

一樹「お前がいいならいいんだじゃないか。」

隆「わかった。莉奈ちゃんおじさんの昔話聞かせてあげるよ。一樹

も出でくるし興味ある？」

莉奈「うん、聞きたい！」

隆が一樹を見ると食べるのを止めテーブルの上で手を組み話し始めた。

隆「ほらよくそういう所つて園長先生が良い人で父親や母親の変わりつてママとかだと言つけど実際はそんなもんじゃなかった。飯はいつもと変わらず冷たくて皿いなんて一度も思つたことなかった。料理をこぼしたりしたら頭を何度も叩かれて物置に閉じ込められて

一日何も食べさせてもらえないなんて当たり前で、洋服を汚したら一日裸でいさせられるんだ。そうすると子供ってどうなると思う？みんな自分の机から動かなくなつて誰とも話さなくなるんだよ。」

莉奈「みんな可哀相。」

隆「そおだねでもやつぱり小さい子供だと何もできないし行くところもないから黙つて従うしかなかつたんだよ。でも、毎日人形みたいな暮らしで俺は我慢できなかつた。それで中学になつたと同時に施設飛び出したんだ。新聞屋に頭下げて住み込みで働いかせてもらつたんだけど、やつぱりどこ行つても施設出だと後ろ指差され変な目で見られた。やっぱガキだったからかグレたつてやうのかな？悪いことばっかして中三になると俺の事を学校で誰も何も言わなくなつて回りにも仲間がいっぱい出来てた。」

9・過去（前書き）

読んで頂いている皆様へ。

今回から少しの間だけ昔の話になってしまいますがこれからも宜しくお願いいいたします。

時は遡り十年前 . . .

隆が通っていた中学の一つの教室に、一人の生徒が走っていた。机の上に座つてゐる長ラン、ドカンまあ昔でいえばオーソドックスな不良の服装に身を包んだ生徒に駆け寄つて言つた。

「板垣君、四中の奴等が明日、橋の所の土手に三時に仲間を連れて来いだつて！ どうしよう向こうはわかるだけで40～50人は集まるよ。こつちは集めても20人ぐらいしか . . .」

結構な距離を走つてきたのか息を絶え絶えで話す生徒の腹に隆は蹴りを入れ悶絶させた。

「うるせえ！ やつてやろうじやねえか1人で2、3人ぶつ飛ばせば事足りるじやねえか。全員に遅れたり逃げた奴は殺す！ って伝えておけ！」

隆は腹を押さえてうずくまつてゐる生徒に怒鳴ると生徒は返事をして、よろめきながらも走つていつた。

「たくつ、使えねえ。」

隆は見下した目でその後姿を見ていた。

翌日 . . . 校舎の屋上に大勢が集まつてゐた。

「板垣の野郎一年で学校シめたからつていい気になりすぎだよな！」
一人の生徒がタバコを吹かしながら他の生徒に話していた。

「昨日なんて橋の所の土手に三時だつて伝えただけで蹴り食らつたんだぜ！ あいつ調子に乗りすぎじやねえか？ 一遍やつた方がいいんじゃねえの？」

その生徒は昨日隆に伝言をした生徒で話しながら胸の前で片方の手を握り拳を作りもう一方の手でそれを力強く握つていた。
それを見て一人の生徒が言つた。

「誰がやんだよ、俺は10人いてもあいつとやんのは嫌だぞ！喧嘩だけはあいつ負け知らずだからな。」

一同がそれに対し言葉なく黙っていた。

「なあ良い事思いついたんだけど。明日バツクれちまわねえか？」

一人の生徒がそこにいる生徒を見回しながら言った。

「それが出来りや苦労してねえだろ！俺等だつて面子だつてあんだけぞ！」

その生徒に一人が言うと他も一緒に呆れた顔をしていた。

「まあ聞けよ、板垣の野郎の事だから何人いても四中の奴等に突っ込んでくのは確実だろ？そしたら当分病院から出てこれねえ。」

「だからそれじゃ俺等の面子が立たねえつて言つてんだよ。」

提案を出した生徒にまとして却下を言い渡すが一人の生徒は言うのをやめなかつた。

「それでよそのままだとあいつらに最悪傘下つてか手下になつちまうだろ？そんなんじやこの辺りも安心して出歩けねえ。だから板垣がやられた後、あいつにはついていけないから他の中学シめるのに手を組まないかつてな。三中は兵隊だつて多いから四中には願つたり叶つたりだろ。」

一同が真剣に話しきを聞きそれに賛同するかのようになつた。

「そあだなそれなら俺等負けた事になんねえし他の中学シめれば最悪でもNO・2だぜ。」

立ち上がり他の生徒の士気を上げた。

「でもよ下手すりや板垣死んじまつたりして。」

一人の生徒が心配そうに提案者に言つた。

「いいんじやねえの死んだつて、どおせあいつ施設出だから誰も悲しむ奴なんていねえからな。」

提案者は笑いながらその生徒に言つと全員で馬鹿笑いしていると、その集団の後ろに普通の学生服で規則正しい髪型の生徒が立つていた。

「何だてめえ何見てんだよ、殺されてえのかよ！」

一人の生徒が眞面目な生徒に近寄り襟首を掴むと眞面目な生徒は笑っていた。

「やだねえ面子とか言つてて一番かつこ悪い方法選ぶんだ、不良は面子が大事なんぢやないの？」

眞面目な生徒は臆する事無く不良全員に聞こえるように言つた。

「くそガキ！」

襟首を掴んでいた生徒は空いている手で眞面目な生徒を殴りつけた！だがその拳は空を切つて掴まれていた生徒はいつのまにか殴りかかっていた生徒の後ろを歩き集団に向かつて歩いていた。

「いつの時代だか知らないけど鳥の巣みたいな頭してかつこ悪いもしないか、どおせそこに行かないなら行けない理由俺が作つてあげるよ。」

集団の目の前まで歩いていくと手前にいた一人の顎先に目にも止まらぬ速さで殴りつけると生徒はそこに崩れ落ちた。

「殺す！てめえらやつちまえ！」

提案者が全員（一人を抜かして）を仕切り眞面目な生徒を逃がさないよう後に回り近くにいる奴から殴りかかつた！

「ちよつ笑わすなよ、時代劇かと思って桜吹雪か印籠出す所だつただろ！」

眞面目な生徒は殴りつけてくるのを軽々とかわすとカウンターで次々に生徒達を倒していった。次第に何人かはそこから逃げたが残つた奴等は眞面目な生徒に悉くと返り討ちにあつた。

「さあて逃げちまつた奴等は置いといてお前だけは許せねえからなあ。」

眞面目な生徒は提案者に言つた。周りには逃げた生徒を引いても10人近くが足元に倒れていた。

「あれだけいた奴等が・・・てめえ誰なんだよー！まつまさか四中の！？」

提案者は驚きを隠せなく足元は震え眞面目な生徒を指差し言つた。

「アホ！ 態々お前等のタメに四中がこんな事する訳ねえだろ。」

眞面目な生徒は呆れた顔で言つた。

「じゃあ誰なんだよ一体！？俺達に何の恨みがあつてこんな事すんだよ！」

少しずつ近づく眞面目な生徒から逃げるように後退りしながら言った。

「一組の岡村 一樹おかむりいつきだ、成績はまあいいかな、部活はやつてなくて趣味は特にナシ。あと学校じゃ田立たないのはお前等が田立ちすぎ！ ってかお前等弱すぎるだろこれじゃ行かなくて正解。」

一樹は冗談交じりに話すと提案者は落下防止の金網が背中に当たり身構えた。

「一組の岡村？ そいつがなんで俺達を！」

そう言つと提案者は一樹に走りながら殴りつけたが一瞬早く一樹の拳が提案者の顔面にめり込み倒れた。

「人には触れちゃいけないってもんがあんただろ、それにお前は触れた・・・それだけの理由だよ。って聞いてねえか、少しやりすぎたかな。」

一樹は提案者に言うが聞いていないのが分かると辺りを見回し頭を搔きながら言つてその場を後にした。

その少し後・・・

「四中の奴等全員殺してやる！」

隆は土手に近づくとそこには40～50人以上がまちかまえていた。

「くそ！ かなりいやがるな、んつ？ あいつら何処に隠れてんだぞこにもいねえぞ。」

辺りを見回すが何処にも仲間は見当たらなかつた。

「あいつら逃げやがつたな！ ・・さすがに死んだな。」

隆はタバコを出し火をつけるとその集団に向かつて行こうとして

いた。

「板垣、どこいくんだよ。」

単車に乗つて一樹が隆の目の前に現れた。

「誰だてめえ！」

「なんだよ同じクラスの顔も覚えてないのかよ、岡村 一樹だよ。おかむらいつき俺は知つてお前は知らないのなんか不公平じゃない？」

一樹は単車のエンジンを切ると隆に言つた。

「そいつが何の用だ、目障りだ消えろ！」

隆は一樹を相手にしないで橋の下にいる集団に目をやつた。

「仲間来ないけど一人で行く気か？」

隆の肩に手をかけて言つた。

「てめえには関係ねえだろ！ . . . なんであいつらがこないの知つて . . . 」

手を振り払いながら言つと一樹の顔を見て隆は驚いた顔をしながら言つた。

「だつて俺がここに来れない様にぶつ飛ばしてきた。」

一樹は片目を瞑つて親指を立てた手を前に出した。

「てめえ何やつたかわかつてんのか！」

隆は一樹の頬を殴りつけて倒れる一樹に言つた。

「痛え！、あいつらならいてもいなくても変わんねえし氣に食わねえからやつた、それ以外に理由なんてあるかよ。」

殴られて口元が切れたのか口端から血が出ているのを親指で拭いながら言つた。

「この落とし前どおつけるつもりだ！？」

隆が一樹に掴みかかり怒鳴つた。

「だからこの喧嘩俺が貰つてやるよ、だから板垣は家に帰つてチンと遊んできな。」

掴まれていた手を振り払い立ち上がり汚れた服を手で叩きながら隆に言いその集団を見ていた。

「ふざけんな！お前あの人數だぞ一人で勝てるわけねえだろ！」

またも一樹に掴みかかると自分の顔を一樹の顔に接近させて言い放つた。

「でもお前だつて一人で行こうとしてただろ？」

近づいていた隆の目を見ながら一樹は静かに言うと隆は掴んでいた手を話し一樹に背を向けて黙つていた。

「本当はお前が逃げ出すのを見に来たんだけど一人であれに向かおうとしただろ？だから気が変わつた。それに連中がこなかつたのは俺にも責任があるからな。」

一樹は単車に跨るとエンジンを再びかけ何度もアクセルを回した。

「お前……何するつもりだ？」

「誤解してたよ、大勢いなきや何も出来ないと思つたけど、お前は違かつたよ。また会えたら謝つてやるよ。」

そう言つと隆の問いかにも答えず単車に乗つたまま土手を猛スピードで駆け下り集団に向かつて走つていき近くまで行くと単車を飛び降り無人の単車は集団に突つ込み1／3を動けなくした。

「あいつ無茶苦茶しやがる！」

隆はそれを見て言つと左手を駆け下りた。

「うらあ！一人で何もできねえ奴等が俺に勝てるわけねえんだよ！」

一樹は不意を付かれたのか驚きを隠せず混乱している集団に殴りかかつていった。

「なんだこいつは！？やれえこいつを生かして帰すなあ！」

一樹は周囲にいた奴等を瞬時に動けなくしてた。が後ろから鉄パイプで殴られてしまい倒れこんでしまつた。

「今だ！このふざけた野郎を殺せ～！」

倒れた一樹に蹴りや鉄パイプなどが容赦なく襲い掛かる。

「ぐつ……が……くそさすがに無理か。」

その時、取り囲む連中を殴り飛ばし一樹の所にやつてきて一樹の腕を掴み起き上がらせた。

「てめえ無茶にも程があんぞ！」

隆が一樹の腕を掴んだまま怒鳴つた。

「来るの遅いっつーの！俺痛いの嫌いなんだから頼むよ。」

怒っている隆に一樹はふざけて言うと隆は笑っていた。

「こいつ板垣 隆だ！」こいつには油断するなよ！」

「あれ？もしかして有名人なん？ってか俺は？」

隆を指差しながら言うが誰にも相手にされなかつた。

「おい、お前どのくらいやれるんだよ？やるからには勝算あつたんだろ？」

隆が取り囲む奴等に警戒しつつ言つた。

「あるよ。」

「どうすればいい？」

背中を一樹に合わせ田の前の奴等を威嚇しながら言つた。

「！」のまま背中合わせに目の前にいる奴等を倒す！ そうすりやいつかは目の前の奴等はいなつて戦法。」

胸を張つて威張りながら話した。

「てめえ等なにくつちやべつてんだよーー！」

一人が鉄パイプで殴りかかると隆はギリギリで見切り顎に下から突き上げた拳が打ち貫かれる。

「お前漫画じやねえんだから常に背中は合わせてらんねえしこの人數だ体力だつて持ちやしねえよー！」

そう言つと一人は次々に回りから襲い掛かられる。

「だつて漫画だと上手い事やつてたんだから出来るかなあつて思うのが少年の心じやねえ！」

殴りかかつてくるのを避けると襟を掴んで何度も殴りつけながら言つた。隆は一度に一斉に来られて目の前の奴を一発殴ると回りから何倍もの攻撃を食らいそれでも構わず目の前の奴だけをどんどん倒していく。

「一人ずついくな一斉にやれ！」

それをきいた奴等は二人に一斉に飛び掛つてきた。一樹はなんか避けながら殴り返すが次第に息も上がりだし攻撃を食らうよくなつてしまつたが足元に金属バットが落ちているのに気づき拾い上

げて振り回し、回りにいる奴等を退かせると先で隆が羽交い絞めをされて数人に殴られ続けていた。

「とつ…」

一樹は隆の所に走り出すと掛け声と共に跳び、ボディーアタックをすると隆諸共そこにいる奴等が倒れこんだ。

「もつとちゃんと助けられないのかよお前は…」

そお言い倒れながらも一緒に倒れている奴を蹴り続けていた。

「ちゃんとつてどんなんだよ?」

一樹はすぐに起き上がると持つていた金属バットで近寄つてくる奴を殴りつけていた。

「たかが一人に何やつてやがる!早くやりやがれ!」

隆も起き上がり手には鉄パイプを握つていて容赦なく頭を叩きつけていく。

「おい、お前!」

隆が一樹を呼ぶ。

「俺はお前つて名前じゃ……ない!」

喋つてる途中に殴られたが持ちこたえて殴り返しながら言つた。

「こんな時に何だつて良いだろ!」

反撃をしつつ一樹に少しずつ近づき言つた。

「一樹だ!」

一樹が隆を後ろから殴りつけようとした奴に蹴りを入れながら言つた。

「じゃあ一樹、俺はあいつさえやれればいい。だから俺が道を開くからあいつをぶつ飛ばして来い!」

二人は始めと同じに背中合わせになり隆が集団の後ろで指揮をして偉そうにしている奴を目で合図して言つた。

「賛成だけど反対。正直もうあそこまで行く体力がないのもそなんだけど元はお前の喧嘩だろ?だったらお前が行けよ!ほら敵さんは待つちゃくれねえぞ!」

そお言つと金属バットを振り回し近くにいる奴等を殴りつけて道

を作つていくと囮まれてゐる輪に隙間が出来そいつまでの道ができる。

「板垣、いけえ！お山の大将をやつつけちまえ！」

一樹は近くの奴に取り押さえられながらも隆に近寄る奴等を殴りつけていた。

「隆だ！」

隆は一樹に言つと一樹は倒れこみ囮まれて大勢に殴りつけられた。隆は近づく奴等を振り切つてそいつまで走つた。

「誰かこいつを抑える！ぶつ・・・

隆は止まらずそのまま敵の顔面を殴りつけ倒した、そのまま馬乗りになつて殴り続けそいつはそのうち動かなくなつていた。隆は後ろから鉄パイプで頭を叩かれ倒れこむとそのまま押さえ込まれ殴り続けられた。

「一樹！やつたぞ！」

隆は大声で叫ぶとそのまま氣を失つた。

「あのバカ・・・マジでやつた・・・だな・・・

一樹もそれを倒れながら囮まれてゐる隙間から見ると氣を失つた。

9・過去（後書き）

今回から書き方を変えてみたのですがいかがでしたでしょうか？随時気になる点等アドバイスがあれば気軽にメッセージを頂けたらなと思います。

p.s

今回から同サイト内の白黒さんからアドバイスを頂き書き方を変えてみました。尚私の知識不足で読みにくいかもれませんが、それについては白黒さんは関係ないのでその点も宜しくお願ひいたします。

10・過去2（前書き）

まだもう少しだけ過去になるのですがもう少しだけお付き合いたいことをお願いいたします。

それから三日後…

「…………ん…………は…………？」

隆は目が覚めると目の前には記憶にない天井が広がった…辺りを見回すと、自分が寝ているベッドの他に幾つかベッドが並んでいてそこには何人が横になっていた。

隆はベッドから起き上がりうとすると体中に痛みが走り顔を歪ませた。よく見ると体中包帯だらけで顔の半分以上がガーゼで見えなくなっていた。

「だめだつてまだ寝てねえと、肋骨が何本か折れてるし他にもひびとか打撲で最低でも治るのに二ヶ月はかかるつて言つてたぞ。」隣のカーテンが開きそこには隆と大して変わらない姿の一樹がベッドの上から喋りかけていた。

「…………は？あの後どおなつたんだ？」

「お前三日も寝てたんだぞ、まあ実は俺も昨日の夜目が覚めたばつかで詳しくは聞いてないんだけどあの時誰かが通報したらしくて警察が来たんだつてよ、それでそのまま病院送りみたいな感じかな。でもよく俺等生きてたな、さすがに死んだかなあつて思つたよ。」

一樹は説明すると枕元にあつたナースコールを押した。

「三日も経つたのか……」

隆は悲鳴を上げる体に鞭を打ち横に置かれていた学生服に袖を通し始めた。

「ちよつお前何やつてんだよ？」

「決まつてるだろ、四中に行つてお礼しに行くんだよ。」

「バカ！そんな怪我で何が出来んだよ…行つてもやられるだけだぞ！」

一樹も包帯だらけの体を起こし隆を止めた。

「俺は負けちやいけねえんだよ…じゃねえと俺は俺じゃなくなつち

「お、うんだねー。」

隆は一樹の腕を振り払いながら言うと病室を出ようとした。だが入り口から入ってきた男に軽くぶつかっただけだが怪我をしていることもあって簡単に倒れてしまった。

「悪いな、大丈夫か？」

男は隆に手を差し出して謝罪をするが隆はその手を払つて痛みを我慢して一人で立ち上がつた。

なれどよ 読んでるのはかれいくれだ兄ちゃんかな おー！ 樹
起きてたか、おふくろに頼まれてた着替え持つてきてやつたぞ。あ
りがたく思えよ。クソガキ。」

男は一樹に荷物を放りながら言った。

サンギニ、病院の服でとおも着心地悪くでわあ、

「おまえに何が不思議な事か。」

—翻訳文庫—

つた。

「これってなんだお兄様だろ！」

一樹の尻は軽く一樹の脇は拳を当てると言葉なく一樹はしゃがみ

「エヌモ

隆は一樹の兄貴に軽く会釈をするとそのまま去ろうとした。
おひいき

「ああ君かあ、俺は一樹の兄貴で岡村啓だ。おおきなじおふくろから聞いた
よなんだつけ？イナガキ君だつけ？喧嘩強くて番長なんだろ？つて
か急いで何処行くんだ？このバカとあんま怪我か変わんないんだろ
？」

隆は眼光鋭くし畠を睨みながら問い合わせに答えた。

「だから無理だからやめとけって! 行くなりせめて! 我が治つてからしていい。」

啓に叩かれた腹が痛むのか手で押さえながら隆に歩み寄った

「だからお前には関係ねえだろ！」

「一樹、なんで止めんだ？ 行かせてやれよ！ 男が一度決めたことこのいちいち講釈たれてんじゃねえよ！」

啓は一人の後ろから腕組をしながら一樹に怒鳴った！

「だけど兄貴こいつ本当に死んじまうぞ！」

「岡村……ありがとな、でも俺こいつしなくちゃ俺じゃなくなつちまうからさあ。」

隆は一樹に叫びた路に一礼した。

「隆……」

一樹は振り返り足取り重く去つて、いつする隆に向も言へず聞いた。

「よし……じゃあそあと決まれば行くか！」

「えつ……？」

「えつ……じゃねえよお前そんなフフフフフ歩いてたら着くの何日かかるんだよ、そこまで俺が車で送つてつてやるよ。」

急に啓が言つたこともあり隆は目を丸くして驚いた。

「いやそこまではちょっと……」

「なんだよ実はそのまま逃げよつとしてたんじゃねえだらおな？」

少し呆れた態度で隆に言つた。

「んな訳ないっすよ、俺行きますよ……」

啓に言われ頭に血が上つたのか路に近づきそのまま言つ放つた。

「だつたら問題ないな、んじゃ行くぞ。」

隆はなんか腑に落ちない気持ちだったが先に歩いてしまつた啓の後を着いて行つた。

「えつ？ 何？ なんなんだ？」

一番良く分からぬ顔をしていたのはその場に取り残された一樹だった。

「どこまで行けばいいんだ？」

駐車場に着いた二人は啓の車に乗り込み啓が隆に聞いた。

「四中なんすけど、分かりますか？」

「あああそこか、分かるよ。」

「つてか普通置いていかないだろ！？」

後から来た一樹も車に乗り込んで一人に言った。

「あれ？お前も行くの？」

「隆が行くんだからしじうがねえだろ！」

「だから言つてんだろ岡村には関係ねえって！」

「うるせえ！行くつて言つたら行くんだよ！あと一樹だ！」

一樹は後ろから隆に怒鳴ると胸が痛むのか胸を押さえながら苦笑いの顔で言った。

「わかったよ、一樹。」

「熱血は終わつたか？僕達？」

「すいません、お願いします。」

三人を乗せた車は目的地に向かつて走り出した。

「着いたぞ。」

数十分走ると三人の乗つた車は一つの学校の正門に着き三人は車から降りた。下校時間なのか校舎から生徒が出てきていた。

「なあ申し訳ないんだがここの中長？頭？の人呼んで来てくれないかな？こいつが話しがあるんだって。」

啓は一人の真面目そうな生徒に隆を指差しながら言った。

「多分その人でしたらもう少しで来ると思いますよ、さつき玄関にいましたから。」

「わかったよ、サンキュー。」

真面目な生徒は軽く頭を下げる帰つて行つた。

「隆だつけか？そろそろ来るつてよ。」

啓が隆に聞くと隆は校舎から出でてくる奴等を睨んでいた。

「隆あいつ等・・・」

「わかつてる。」

一樹が隆に言つと隆は音が聞こえるぐらいに拳を握り締めていた。

「ん？あそこにいるの・・・誰だ？」

下校してくる生徒が隆に気づくとさつきまでふりついていたのが

嘘のように隆は走り出した。

「あつ！板垣だ！！」

それに気づいた時にはもう田の前まで隆は近づいていて先頭にいた奴の顔面を殴りつけ近くにいる奴も同様に殴り続けた。

「おいみんな呼んで来い！板垣が乗り込んできやがった！」

そう言つてる間にもそこにいた奴を倒すが体が言つ事を聞かず殴りつけられ隆は倒れこんでしまった。

「おい今だやつちまうぞ！」

隆は怪我のせいか体が思うように動かずひたすらに蹴り続けられていたが、そこに一樹が走り込んできて隆の周りにいる奴等を殴りつけ隆を起き上がらせた。

「今度は逆の立場になつたな、つてかちよつとは考えて行動しろつての！」

「お前にだけは考えて行動しろつて言われたくねえつての。」

「そりやそあだな。」

一樹は隆に言われ少し考えると微笑しながら答えた。

「やべえ、かなり集まつてきたぞ。ちなみに俺来たはいいけど正直動けないんだよね・・・」

「心配するなよ俺も一緒だ。ただこの頭だけでいいからぶつ飛ばさないと気がすまないんだよ。」

そお言つてる間に回りにはかなりの数が集まつていて逃げ場もなくなつていて。奥から一人の男が一樹と隆の前に現れた。

「よお板垣、元気そあだな？死んでくれたと思ってたのに残念だよ。あとお前の所の奴等ちよつといじめてやつたら一度と逆らわないから許してくれつて泣いて頼んできたぞ。」

四中の頭は隆を馬鹿にした言い方で薄ら笑いをしながら話すと隆がそいつに向かっていき殴りつけると回りにいた奴等に取り押さえられてしまつた。

「てめえ殺してやる！」

「おお怖いもおお前邪魔だから消えてくれよ。もお一度と歯向かえ

ないよにしとけ。」

取り囲む奴等に言うと後に下がつて行つた。

「てめえ逃げんじゃねえ！」

隆の叫びも空しく掴まれていた奴等に取り囲む中心に投げ飛ばされてしまつた。頭の合図で取り囲む奴等は襲い掛かり一人は身構えるが怪我のせいもあり大した抵抗も出来ず殴られ続けてしまい一人とも倒れこむと奴等も殴るのを止めた。

「一樹 . . . 悪いな巻き込んでしまつて . . .

「本当だよ . . . つて言いたいがしようがねえだろダチなんだからよ。」

「バカこんな時に笑わせんじゃねえよ . . .

二人の所に頭が来てしゃがむと倒れている隆の髪を掴んで持ち上げた。

「板垣、泣いて謝るんならこのぐらいで許してやるよ。」

「てめえが泣いてどおしても謝つてくださいって言つなら考えてやるよ。」

頭はそう言つた隆を殴りつけると立ち上がつた。

「おいこいつらもおいらねえ痛めつけてどつか捨てて来い！」

取り囲む奴等は一人を立たせ押さえると殴り始めようとした時どこからか手を叩く音が聞こえ一同がそこを見ると啓が手を叩きながら歩み寄ってきた。

「最近の中学生は映画の見すぎなんだねえ、そこの番長かな? いい台詞だねえ役者めざしたら?」

笑いながら集団に近づくと一人の生徒が掴みかかってきた。

「こらおっさん! てめえがくるような所じゃねえんだよ消えてろ!」

啓はムッとした顔をすると生徒の顔に左手を置くと瞬時に右手で左手の中指を摘んで弾くと生徒は額を押さえてしまつてしまつた。

「おっさんって誰に言つてんだよ! まだ俺は18才だ!」

それを呆然として見ていた奴等も我に返ると三人が飛び出した。

「バカ！やめとけッ！」

一樹が言うのを聞く訳もなく三人は啓に殴りかかった、だが啓は殴りつけてきた拳をかわし懷に入ると額に頭突きをした！もう一人の頭を掴むとそのまま額に頭突きを入れた瞬間後ろから不意に一人が殴りつけてきたがそれを片腕で止めるとそのまま握り潰そうとするそのまま生徒は座り込んだ。

「人の忠告は聞いとくもんだぞ、少年達。」

啓は掴んでいた手を離すと一人は起き上がりこなく一人は手を押さえたまま動かなかつた。

「てめえ誰だこの野郎！」

一人が啓に問いただした。

「俺？そこに倒れてる奴のお兄ちゃん。別に加勢しにきたわけじゃないから勝手にやつていいぞ。」

「まさか・・・おい！お前の名前なんて言つんだ？まさか岡村じゃないよな？」

頭は震えだと一樹に聞いた。

「何で知つてんだよ？お前に自己紹介した事ねえぞ！」

それを聞くと頭は集団を搔き分け啓の前まで行くと深く頭を下げた。

「失礼しました！」一人が岡村さんのお知り合いとは知らず大変失礼しました！一人はこのまま帰つていただき今後も手出しを致しませんのでどうか許していただけないでしようか！？」

頭は啓の前で頭を下げたまま震えながら言つた。

「俺は何も関係ねえよ、そのバカ共が勝手にやつた事だから気にしなくていいし好きにやつてくれ。一般市民として見学に来ただけだしな。」

「はい、ありがとうございます。おい！お前等一人を離してやれ！これで終わりだ。」

頭はそれを言うと取り囲む奴等は一人を離した。隆は自由になると啓に掴みかかつた。

「あんたがどんだけ偉いか知らねえけどこれは俺の問題なんだよ！」

部外者は下がつてくれよ！」

啓は襟首を掴んでいる隆の腕を外すと言つた。

「なあお前が今のここの頭か？」

「はいそうです！」

「なんだこの有様は？怪我人一人に寄つて集つて袋にして頭は何もしねえで、俺等ん時の四中とは偉い違いだな。」

「いや・・・あの・・・」

啓に言われ頭は震えだし下を向いたまま黙つてしまつた。

「特に何も言つつもりはなかつたがこれじゃ四中の恥になんて。頭としてどお責任取るんだ？」

頭は震えたまま何も言えなかつた。

「じゃあこうしろこのバカとタイマンはれ！そおしたらこのバカも気が済むだろ！しお前もこんな怪我人相手じゃ負けねえだろ？そおしたら恥かかねえで済むだろ？」

頭は隆を見るとそこには立つてゐるだけでも辛そうな姿があつた。頭は啓の顔を見ると頷いた。

「じゃあ決まりだ頭同士のタイマンだな、勝つても負けても恨みっこナシ！」一人ともいつでも初めていいぞ。」

啓はそう言つと一樹の所まで行くとタバコを咥えて火を付けた。

「板垣てめえは殺す！」

「さつきまでビビッてた奴が言つても怖くねえぞ！」

頭が先に殴りつけるとかわす体力がないのかモロに顔面に食いつてしまいよろめきながらも殴り返すがすんなりとかわされてしまつた。

「兄貴、なんでこんな風にしちまつたんだよ？隆はもあ立つてゐるだけでも辛いんだぞ！」

「だからお前はバカだつて言つてんだよ、まあ黙つて見てろよ。」

一樹は啓の言つ事がわからなかつたが黙つて隆を見ていた。

隆は何発も殴られ倒れずにはいるのが精一杯のようで殴る事さえも

出来なくなっていた。

「もお負けでいいから止めてくれよ！兄貴！」

一樹は啓の肩を掴みながら言つと啓が言つた。

「見てろよもお決まるから。」

啓が言つと一樹は一人を見た。だが状況は変わらず隆が一方的にやられているだけだったが次第に頭の息が切れてきて一気に勝負をつけようと大きく振りかぶつた。

「これで決まりだ！死ねえ！」

振りかぶつた拳は隆に勢い良く襲い掛かつた！拳は隆の頬に当たるが首を曲げて逸らすと、下から思い切り突き上げた拳がカウンターで頭の顎に直撃し体が少し浮きそのまま力なく崩れ落ち動かなくなつてた。

「これで勝負ついたな。今回はこれで終わりだ！両方ともわかつたな！？あと今後は俺は関係ないから好きにやってくれ、ただ恥じになるような事はするなよ！」

啓が言つと取り囲んでいた奴等は混乱しているのか誰一人として動かなかつた。

「結局兄貴がおいしい所全部持つていつちまいやがつたよ、俺なんて今日殴られに来ただけだぜ。なあ隆。」

一樹が隆に近寄ると丁度倒れそうになつた所を一樹が支え肩を貸した。

「お前等よく聞けよ！俺は逃げも隠れもしねえ！だからいつでもかかつてこいや！うちの中学の奴等なんて関係ねえ俺と一樹が相手してやるからよ！そいつにも起きたら言つとけ！」

「俺もお！？」

隆は取り囲む奴等に言つと一樹に肩を借りて歩き出すが一人ともふらふらで真つ直ぐに歩けなかつたが車までなんとか辿り着いた。

「隆やつたな、お前すげえよ！」

「一樹がいなかつたら無理だつたつてえの」

二人は手を上げて叩き合つたが衝撃でこの間の怪我と今回の怪我

の痛みが我慢できずに倒れこんでしまった。

「あら～こいつら余程限界だったのかな？」こりゃ おふくろにキレられるな . . .

啓は一人を車に乗せて病院へと戻り一人が眠りから覚めるのは数日後の事だった。

余談だが病院に着いた後重傷者が二名病院から抜け出した事で大騒ぎになつていてそこには一樹の母もいて啓は母からも病院からも数時間に渡り説教を喰らつた挙句飯は抜きだった。

そんな事など一人は考えもせずただ疲れた体を癒すために眠つていた。

あの出来事から数ヶ月が過ぎ一樹の退院が決まり岡村家では家族みんなで一樹の帰りを待っていた。

「ねえ時間もうとっくに過ぎてるよ、やつぱ迎えに行つた方がよかつたんじゃないの?」

一樹の妹の和美が心配そうに何度も時計を見ながら言った。

「一樹が恥ずかしいから来ないでいいって言つからさあ。」

「もおガキじゃないんだし心配する必要なんてねえって、それよりなんで俺まであいつ待つてなくちゃなんねえんだよ?夜仕事あるから少しでも寝たいんだけど。」

一樹の母も心配なのかテーブルの上に用意された料理を見て溜息をつきながら母に対してもう寝そつた田をこすりながら不満もかねて啓は言った。

「入院が長引いたのだつて啓、あんたにも責任があるんだから文句言わないの!」

「へいへい、俺が全て悪いんだよつと。」

啓はそういうと席を立つた。

「啓何処行くの?」

「ターバーノー。」

啓は空になつたタバコの袋を握り潰すのを見せると玄関に向かつていつた。すると玄関先でなにやら話しが聞こえ啓はおもむろに玄関を開けた。

そこには一樹が立つていて塀の影に隠れていて見えないがその人物ともめでいるようだつた。

「おう帰つたか遅かつたな、みんな待つてんぞ早く入れよ。」

「ただいま、いやあこいつがどうしてもヤダつて聞かないからさあどうにかここまで連れて來るのにも苦労したんだつて。」

啓は首を傾げて塀を覗き込むとそこには隆が気まずそうに隠れて

いて路に氣づくと苦笑いをし会釈した。

「お前かあ、退院一緒にだったのか？ってかこんなどこもなんだから上がつて行けよ。お~いおふくろ~一樹帰つてきたぞお~」

「やっぱ俺帰る。」

「何言つてんだよここまで来たんだから上がつたつて一緒にだつて。兄貴さあこいつ一人で入院するのがヤダからつて無理やり退院してきたんだぜ、看護師さん軽く切れてたな。」

一樹の怪我の治りが早かつたとゆうか隆の怪我が思つてた以上に酷かつたのか動くときに足を少し引きずつていいふだ。

その時玄関には一樹の母が来ていた。

「一樹随分遅かつたじやないお父さんも待つてるから早く入りなさい。 . . あらその子一緒に入院してた子じやないの。」

「まあなんてゆうかとりあえず当分こいつ家に泊めてもいいかな？」「だからいいいつていつてんだろ！」

一樹が母に言つと隆は迷惑そうに声を荒げて言つた。

「別に構わないわよ。そんな事よりお腹空いたんじやない？みんなでご飯食べましょ。ほら入つて入つて。」

隆はまさかそんな返事が返つてくるとは思つてもいなかつたので立つたまま固まつていると一樹が肩を叩き顎先で合図をすると一樹は玄関に入つていぐ、その後をキヨロキヨロ田配りしながら隆も入つていつた。

「ただいま。やっぱ家が一番だよなあ。ほら隆も来いつて。」

「あ . . ああ、おじやまします。」

隆はなんとか聞き取れるくらいの小さな声で言つと一樹の母が近寄つてきた。

「板垣君だったよね、帰つてきたらただいま、おかえりでしょ~。」

隆は俯きながら声を濁しながら言つた。

「板垣君、ウチに当分いるつて事は最低限ウチの決まり」とは守つてもううからね。わかつた？」

「は・・・はい。」

「よし決まり、今日からみんな家族だから気兼ねしないで普通でいいからね。あと板垣君じゃ呼びづらいわね、名前何で言ひの？」

「隆です。」

「じゃあ隆、そのボロボロの学生服着替えてきりやいなさい、その間にいい飯用意しておくから。」

「あ、あの・・・着替え持つてないから・・・」

「だったら一樹の勝手に着ればいいじゃない文句言つようならいつの服全部燃やしちやうから。」

一樹の母は隆の肩をバシバシと何度も叩き笑いながら言つた。

「お～い聞こえてるんですけどお～。」

「あら？ いたの？」

「燃やされちゃたまつたもんじゃないんで隆さん部屋まで来てもらつてもいいッスかねえ？」

一樹は母親を笑いながら睨むと隆にも皮肉を入り混ぜて言つた。

「ほりやつやと着替えてきな。」

一樹の母は隆の背中を平手で叩くと一樹と隆は部屋へと向かつた。部屋に着くと一樹は隆に合ひ洋服を探し始めていた。

「適当に座つててよ。」

「あ・・ああ。」

隆は部屋を見渡すとそこにはベッドの他にはパソコン、ギター、スノーボード、等最近の学生の部屋とゆう雰囲気だった。隆はギターの弦を指で軽く弾くと綺麗な音が響いた。

「それさ冗談から貰つて最初はやる気あつたんだけど中々上手くならないから止めたんだ。何？ 興味あんの？」

一樹は隆に着替えを渡すとギターを手に取りパソコンの前にある椅子に腰掛けギターを弾き始めた。

上手いとは言えないが静かな音色が広がり一樹がそれに合わせて歌い始めた・・・

ギターの音色と歌声が終わると一樹は元の場所にギターを戻しな

がら言つた。

「人前でやんの恥ずかしいな、なつ下手だろ?」

一樹は苦笑いをしながら言つとタバコを咥えて火をつけた。

「まあギターはな、でも歌は結構いいと思つ。」

「そつそつか? いやあカラオケ以外で人前で歌うの初めてだからそお言わると余計に恥ずかしいな。」

椅子に座りながらクルクルと回ると頭を無造作に搔き筆り照れていた。

「それより本当にいいのか俺なんかが転がりこんじまつても? 別に帰る所がないわけじゃないから別にいいんだぞ。」

隆は置かれたギターを見つめていたが急に真剣な眼差しで照れていた一樹に言つた。

「いいじやんおふくろもいいつて言つてたし兄貴だつてお前の事気に入つてくれたみたいだしな。でも和美には手出すなよ! 兄貴異常な程和美には過保護だからな。」

椅子の上に座りながら胡坐をかきながら話していくがいきなり隆に指差して言つた

「出さねえよ! つてか何でお前は俺にそこまでしてくれるんだよ、喧嘩もそおだし何でだよ?」

隆はずつと疑問に考え思つていたことを言つと一樹は少し考えて話し始めた。

「俺さガキの頃病弱つてか生まれた時にはなんか思い病氣にかかつてたみたいで長く生きられないつて言つてたんだよ、今までに世界でも数人しかなつた事がないらしくてな。」

正直まだガキだったから一つも覚えてないんだけど頭の奥底には記憶があるみたいで今でも時々夢見るんだよ。」

一樹は机から一枚の写真を出して隆に渡すとベッドに腰掛けた。

「もしかして一樹 . . . か?」

写真にはベッドの上には点滴等で管だらけのガリガリに瘦せた子供が写つていた。その回りには小さな男の子と若い頃の一樹の母と

その腕に抱かれた赤ん坊とその横には男性が写っていた。

「そつたしか四歳つて言つてたかな、その時はもう何をしてもダメらしくて最後に家族で写真を撮つたんだつてさ。」

「ダメつてどおゆう事だよ？ 今お前ここにいるじゃねえかよ。」

「大丈夫だよ幽霊でもなんでもねえから。実はなその後なんか製薬会社がその病気に効く可能性がある薬品と治療法方があるつてゆう申し出があつてさ、助かる可能性があるならつて説でお願いしたんだよ。」

製薬会社もそれで治つたら富と名声が手に入るわけだから医療費はあつちで負担するつて言つてくれたんだ。でも代わりに見通しがつくまでは機密漏れの恐れがあるから面会は出来ないつて事だつたけど治るならそんな事ぐらい構わないつて事で了承したんだよ。」

一樹はタバコを咥えて火をつけると隆から写真を受け取りそれを見て少し黙つていた。

「それでもお治つたのか？ もしかして長くないとかか？」

隆は悲痛な目で一樹を見ながら言つた。

「そんな顔すんなよ、もお大丈夫完治したよ今はもう大丈夫だよ。まあまだ数ヶ月に一回検査しに行つてるけどな。 . . ただ正直覚えてはないんだけどその時はいい思い出？ つてのはなかつたなあ、真つ白い部屋にいて何人かが俺に注射かわからんねえけど薬打つたりされてさ親父とおふくろが面会に来るまで誰とも話してなかつた記憶はあるよ。どのくらい月日がたつたのかわからんけど一年ちょっとで退院してさそれからはガリガリだつた体も肉がついてきて運動も出来るようになつてきてさ、嬉しかつたなあ親父とおふくろのあの喜んだ顔。」

「治つた事が嬉しかつたんじゃないのか？」

「それもあつたけどガキながらも思つたんだ俺には家族がいるつて . . だからこれからもずっと大事にしていこあつてさ。あと今までこの話し誰にもした事ないから内緒な。」

「家族か . . 」

「俺はなんかどつかを隆と似てるなって思つて放つておけなかつたんだ。もしここにいるのが嫌で出て行きたかつたらもお止めないよ、ただもしそおなつても俺等ダチだよな。」

一樹はタバコの箱を持ち蓋を開けて隆に差し出すと隆は一本取り出し口に咥えると一樹がそれに火をつけた。

「あ～あ面倒くせえ奴と知り合つちまつたなあ、回りにいたダチはお前がみんなぶつ飛ばしちまつたからもお誰も寄り付かねえしこの際賄沢いつてらんねえか。」

「あれがダチ？手下つてか子分みたいだつたぞ！」

一樹は驚いた顔で隆を茶化した。

「うつせ！俺といると面倒に巻き込まれるぞ？それでもいいのか？」「嫌だつたらもお今一緒にいねえよ。」

「じゃあしょおがねえからダチにしてやるよ。」

「一樹さん僕友達いないから友達になつてくださいだろ。」

二人は少しずつ笑い始めると声をあげて笑つていたが一樹が時計を見ると我に返つた。

「やつべ早く着替えて行かねえとおふくろにぶつ飛ばされるぞ。」

一樹が焦りながら言つと隆は少し考えて立ち上がりながら言つた。
「一樹、俺今日帰るよ、やつぱり親父さんもおふくろさんも兄貴さんも妹さんもお前が大事だと思つ···だから今日みたいな日は俺みたいな奴はいない方がいい···」

「俺みたいな奴つて何だよ！」「

隆が言い終わるのを待たずに一樹は言い放つた。

「ほら俺施設出だろ、だから···」

「だからなんだ？何がダメなんだ？お前が言つてる事になんかまずい事でもあんのかよ？」

隆の肩を掴み一樹は切ない目で何度も言つた。

「いやだから普通の家庭と違うからやつぱり···」

「普通の家庭つてどんなんだよ？お前とウチの誰かは何かが違うのか？俺にはわからんねえよ。」

掴んでいた手を話すと椅子に腰掛けた。

「一樹 . . . 」

「とつあえず飯食つてけよ、着替えていかねえとおふくろキレるだ。怒らせると後が怖えぞ。」

一樹は隆が着替えるのを待つてると部屋のドアが開き、には啓がいた。

「おふくろが早くしろだつてよ。」

「ああごめん今行くよ。」

二人は急いで部屋を出て啓の後を着いていった。

「一樹 . . . 今度昔の話し聞いてくれるか?」

「お前が話したい時いつでも聞くよ。」

三人はリビングに着くとそこにはみんな集まっていた。

12・時間（前書き）

今話で過去も終わり現在に戻りましたのでこれからも宜しくお願いいたします。

一樹と隆は空いていた席に腰掛けたと隆は一樹に言われその隣の椅子に腰掛けた。

「じゃあみんなそろつた事だし始めましょうか。」

一樹の母は隣に座る一樹の父にビールを注ぐと一樹と隆にもグラスを差し出し一樹のグラスにビールを注いだ。

「ほら隆も飲めるんでしょ？」

一樹の母はビール瓶を差し出すと隆は軽く余釀してグラスを差し出すとグラスいっぱいにビールが注がれると隆はビール瓶を受け取ると啓に差し出すと御酌した。

「じゃあお父さんなんか一言お願ひしますね。」

一樹の父はグラスを持つと軽く咳払いすると話し始めた。

「え～隆君だつたな、一樹と隆君退院おめでとう。まあこれからはなるべく怪我のないよう気をつけるよつこ、では乾杯。」

「乾杯」

一樹の父はグラスを持つ手を少し上に上げると皆々も同じように上げ隣同士等でグラス同士を合わせた。

「さて何から食べようかなあ～。隆、遠慮なんかしないでいいからな、病院食よりかはイケるぞ。」

一樹は隆に言つてテーブルに用意された料理を皿に取り分けていふと隆は何かを思ったのか話し始めた。

「あの・・・えっと・・・あらためて紹介させていただきます、初めて板垣^{いたがきたかし}隆です。今日は家族水入らずなのに俺なんかがお邪魔してしまつてすいません。実は一樹が怪我したのは全部俺のせいなんです、だから俺ここに居るべきじゃないんです・・・だから・・・」

隆は俯いたまま話していたが、それを止めるかのように一樹の父が話した。

「隆君、一樹は怪我した事に君に不満でも言つたのかな？」

「 . . . 言われてません . . . 」

「 だつたらそんな細かい事気にすることないんじゃないかな。友達つてのはそんなもんだと思つぞ。 」

一樹の父はグラスを口に運ぶとビールを飲み干すと一樹の母がグラスにビールを注いだ。

「 そうよ、ウチは嫌な物は嫌つて言つから言われなければ気になんてしなくていいのよ。 」

「 そおだよ隆！ 気にしてないで食えつて、好きなだけ居ていいんだからな。 」

一樹は皿にいくつか料理を取り分けると隆の前に置きビール瓶を持ち隆に差し出すと隆は黙つたままグラスの中のビールを飲み干し一樹にグラスを差し出す。

「 そあそお飲んで食べて今日は楽しも'ぜ。 」

一樹は差し出されたグラスにビールを注いだ。

「 ジゃあそれなら私も飲んじゃ おつかなあ～。 」

和美が自分のグラスにビールを注いだとしたら一樹の母に腕を捕まれて阻止された。

「 あんたはダメ、まだ子供なんだから。 」

一樹の母はビール瓶を取り上げると和美は頬を膨らませながら言った。

「 え、だつてカズ兄と歳一個しか違わないじゃんなんでカズ兄だけ良くて私はダメなの～。 」

「 ダメな物はダメなの。 」

「 まあいいじゃないか今日べらり、なあ母さん。 」

一樹の母は軽くため息をつくとビール瓶を和美に渡した。

「 飲み過ぎちゃダメだからね、もおお父さん責任とつてくださいね。 」

「 やつたねえ。 」

和美は話しても聞かずにグラスにビールを注ぐとそれを一気に飲み干しましたグラスにビールを注いだ。

「隆君話しが途中だつたが隆君が良かつたら好きなだけ居るといふ。ただし条件はあるがね。」

「条件ですか?」

「ああウチは時間が合わないとき以外は一緒にご飯を食べる」と、あと一緒に住むのなら私達は家族なんだから遠慮せず何でも言つこと。わかつたかな?」

「そんな . . だつて俺 . . 施設出だから家族とか . .

一樹の父の問いに困り自分にみんなの視線が集まつていて啓と田が合つた。

「隆! そんな事どおでもいいんだよ! 親父が聞いてんだ、ちゃんと返事くらいしろ。」

隆は目を瞑り数瞬時間を置くとそこに立ち上がつた。

「親父さん、お袋さん、啓さん、妹さん! 至らない点ばかりだと私は思いますが少しの間御世話になります。」

隆はその場で深く一礼した。

「ああ隆君宜しくな。」

「少しなんて言わないで居たいだけ居ていいんだからね。」

「じゃあ夕力兄だね、そなるとカズ兄いらないんじやないの?」

和美が冗談交じりに一樹の母に言つた。

「おね隆の部屋も用意しなくちゃいけないし」の際だからいらないのは処分しちゃおうか。」

「こらこら誰がいらない物だよ、危険な奴らだな。つてか隆もだよみんなに御世話になるつて言つておいて俺にはないのかよー? そこ重要なとこだぞ。」

一樹の母と和美を交互に指さしながら言つと次は隆の肩を軽く叩きつつこみを入れて言つた。

「えつ? どなたでしたつけ? お袋さん知つてます?」

「さあどなたかしら?」

「啓兄にどつかから着いてきちゃつたんじやないの?」

「俺はそんな事言えないと、酷いやつ等だねえ。」

「ほらみろやつぱ兄貴は違うね。」

「でもそろそろ自分の家に帰つた方がいいんじゃないの？僕。」

「やつぱおくるかー。」

全員の笑い声で今までの重かつた雰囲気はなくなり食事を初め飲んで騒いで隆には家族でこんなに楽しむのは初めてなので新鮮さを感じこの家族に暖かさを感じた。

一樹の家に一緒に住むようになり四六時中一樹と行動を共にし学校でも少しずつだが険が取れてきた。

隆も初めはギクシャクしていたが一樹のペースと一樹の家の明るさで隆も少しずつ打ち解けていき高校も初めは行く気などなく働くと決めていたが一樹の親に進められるのもあって一樹と同じ高校を受けることになり猛勉強の末見事合格となり、そこで直美や信と知り合うことになる。

現在

一同が隆の話に聞き入りながら食事を終えた。

「だから俺の家族は一樹の家族以外に考えられないんだ。あの日食べた飯は今でも鮮明に覚えてるよ。生まれて初めて母親の料理を食べたつて気持ちで一杯だつたよ。」

話が終わるころにはみんな食事も終わり隆はズボンからタバコを取り出すとそれを口に咥え火をつけた。

「そおだつたの . . .

正志の母は話を聞き終わると物悲しい目で隆を見つめた。

「なんか空氣悪くなるような話してすいません。でもお袋さんの料理も本当においしかつたです。」馳走様でした。」

「こんなものでよければいつでも食べに来てくれていいのよ。」

「是非。」

正志の母は空いた皿を片付け始めると梨乃と莉奈も食器を下げテ

一ブルを拭き隆と正志にお茶入れると莉奈が言った。

「おじさん昔不良だつたんだあ～なんか笑える。やつぱ髪型とか制服つて漫画に出るみたいなやつ?」

「だからおじさんじやないつてのー。」

「じゃあおじちゃん? それでどおだつたの?」

隆はため息をつくとタバコを灰皿に押しつけ火を消しお茶を啜つた。

「まあ髪型と服装はそおだつたけど一樹と短い血ひし中学生業と同時にやめたよ。なあ一樹? . . . あれ一樹は?」

隆は辺りを見回すがそこに一樹の姿はなかつた。

「そおいえば隆が話してる途中になんか出て行つたわよ。」

梨乃が洗われた食器を拭きながら血ひしと隆が不安氣味に聞いた。

「どにに?」

「一樹さんなら恥ずかしいから出でてるつて言つてたよ、あとつこでに敷地内が安全かどうか調べてくれるつてえ」

「つたくあいつは勝手な行動しやがつて。でもまあ一樹なら心配ないだろ。」

そのころリビングに集まる一同を余所田に一樹は家の外にいて警戒しながら進むと裏口につくと塀に寄りかかり持つていたコルト・ガバメントとニコーナンブに装填を済まし一呼吸していたら何かが一樹に近寄つてきた。

「誰だ! ?」

一樹はそれに対しニコーナンブを構え引き金に指をかけた。

「待つてくれ私だよ。」

「親父さんじあしててこーに?」

一樹は構えていたニコーナンブを下ろすと驚いていた。

「なにか裏口から物音がするんで窓から外を覗いたら君が外に出て行くのが見えたんでね。」

「でも絶対安全じゃないのに危険ですよ、早く戻つてください。」

「わかつたよじやあ戻るとするかな、ああそつだ君はびおするんだい？一人で行くのかね？」

正志の父は一樹に言われ戻り始めるとすぐ「振り返り一樹に言つた。

「えつ、いや、あのお～～～」

「いいんだ正志の事なら、初めて君に会つた時から田を見てわかつたよ。あの友達隆君にも言わなくていいのかね？」

正志の父の問いに一樹は少し黙り話し始めた。

「俺のわがままでみんなを危険な田に合わせれないし時間もないんですよ。」

「時間？何があるのかね？」

「実は初めはメールが返つてきてたんですけど数時間前から連絡がこないんです、無事でもそおじやなくても行かなくちゃならないんです！」

「こんな暗闇の中出ていつたら田的の場所に着く前にあいつらの餌食になり得ない、だつたら明日明るくなつてからでも遅くないんじやないか？」

一樹はまた少し黙ると左腕の袖を捲ると傷口を正志の父に見せた。

「何て事だ～～～」

「だから今行かないと時間がないんです、俺がここに居ても後々みんなに迷惑をかける事になるし、もしあいつが生きているなら最後までにあいつに会いたいんです。」

正志の父は一樹を見つめると裏口に歩み寄った。

「行くんだろう？出来るならその人を連れて戻つて来てくれるのを祈つてるよ。」

「親父さん～～～」

「他に私に出来ることは？」

「大丈夫です、ただみんなには傷の事言わないでおいてください。」

「・・・わかつたみんなには私から上手く言つておくよ。」

「ありがとうございます。・・・じやあお願ひします。」

正志の父は門に手をかけると一樹は「コルト・ガバメントを扉に構えると扉から門は外されゆっくりと少しだけ扉が開き一樹は外を覗いた。

「大丈夫みたいで、じゃあ行つてきます。みんなに元氣でと伝えしてください。」

「わかった、気をつけるんだぞ。」

一樹は正志の父を見て頷くとゆっくりと外に出て塀を背にしながら車に近寄つていいくと裏口は「コト」「コト」と音を立て閉まつた。

「この世に神がいるのならあの子をどうか護つてやってください。」

一樹は車まで近寄ると音を立てずに車に乗り込みエンジンをかけると走り始めた。

正志の家を出てから少し走り始めると少数だがゾンビがいるのが見えたが一樹はお構いなしに突っ込んでいくと鈍い音が静寂な夜の帳へと消えていく。

大通りに出るとゾンビ共はこれといった活動はしていなくただその場所に佇んでいるだけであつたが一樹の乗る車の音に気づくとゆっくりと歩み寄つてくるが車のスピードには追いつけなく走りすぎていく車をゆっくりとついて行くだけだった。

「視界は悪いがなんとか行けそうだな。」

一樹は避けるゾンビは避けていきダメな場合は跳ね飛ばしながら漆黒の闇の中を走り去つて行つた。

暗闇の中民家やマンションから漏れる明かりが見えるとまだ生存者はいるんだなと思いながら走つていると遠くでかなりの数のゾンビが集まっているのが見えスピードを緩めた。

「あそこに何があるんだ?」

一樹はそれを避けて通ろうとするがバリケードがあるのを一瞬早く分かり急ハンドルを切り車は横に振れるとそのまま横に進むが間一髪バリケードと車の隙間は何十センチも開かずに止まつた。

「くそ!危ねえ、何でこんな所にこんなもんが……?」

よく見るとそれは車を横にしてあつたりテーブルやタンス等で作られているのを見る限り人為的で一人や二人じゃ出来ないことを物語つていた。

そこに集まっていたゾンビが一樹の車に近づいてくるが一樹はすぐ車を走り出すと横の道へと抜けていった。

「なんであるか所にバリケードなんか出来てんだ？横道から入られたら意味ねえだろ。」

一樹は独り言でぼやき測道を走つているとまたしてもバリケードが目の前に現れ急ブレーキで停まった。

「まあなんとなくそおじやねえかとは思つてたけどやべえな。」

近くにゾンビはいないもののこれだけ暗いとどこに潜んでるか分からぬし病院までまだ距離があるためどうしても車が必要なので少し考えると車を降りてバリケードを退かせるか考えていたが一人ではどうしようもなかつた。

「しょうがねえダメ元で突っ込んでみるか。」

一樹は車に乗り込みギアをRに入れバックして距離を取ろうとした時運転席側の窓がコソコソと鳴りそつちを振り向くと一樹に銃を構えた男がいた。

「エンジンを止めて早く降りろ！早くしろ！」

男は一樹に言うが一樹は男を横目で見たままホルダーに手をかけコルト・ガバメントを取り出そうとしたが男に抑制された。

「妙な事をすれば即座に発砲するぞ早く降りろ！」

一樹は致し方なく車から降りると男に銃をつきつけられた。よくみると周りには他にも何人かが潜んでいるのが見えたが銃を持つているのはこの男だけみたいだ。

「一人か？こんな所で何をしている？」

一樹はその男を睨みながら言った。

「人を助けに行く途中で大通りにバリケードがあつたからこっちに抜けてきたんだ、そしたらここでもこれってな訳だ。」

男は他の仲間に目で合図をすると一樹の近くに鉄パイプや包丁等

を持った三人が寄ってきた。

「ここは危険だから着いてきてもいいのか。」

男が言つと他の者が一樹の後ろに立ち背中に包丁を押しつけられ横のビルへと入れられると奥へと進みまた外へと出されると路地に出た。

「どう行くんだ?」

「つるさい黙つて着いてここへ。」

「へいへい。」

一樹は馬鹿にした返事をすると後ろを歩いていた男が気に入らなかつたのか銃を持つ男に言つた。

「誠さんこいつやつちやにまじょうよーゾンビ共に噛まれてるかもしないし。」

一樹は背中に押しつけられていた包丁が離れるのが分かると四人の他に誰もいないのを確認すると後ろの包丁を持った男に振り返り包丁を持つ手を左手刀で払うと腹に右肘鉄を入れ顎先に左拳を打ち上げると左にいた奴を後ろ蹴りをして吹き飛ばした。

銃を持った男が一樹に銃を向けた瞬間そこに一樹の姿はなく瞬間銃を持つ男の後ろに回っていた一樹は膝の裏を踏みつけ男が膝をつくと横面を右拳で打ち抜くと男は崩れ落ちた。

それを見ると他の一人が襲いかかってくるが一樹は落ちていた銃を拾うと一人に向けた。

「そこまでだ、武器捨ててもらおうか。」

二人は一樹の指示に従い持つていた武器を捨てた。

「じゃあいくつか聞きたい事があるんだが、お前等何なんだ?」

「俺たちは選ばれた者なんだ、だからこの国は俺等でえていくんだ。」

「あつそお . . . んじやあ俺には関係ないからどうでもいいんだけどここに先にある第一総合病院に行きたいんだけど他に道は?」

「あのビルを中心に半径2~300メートルぐらいはバリケードが作つてあるだからそれを迂回していけば行けるはずだと。」

男が指さす方を見ると20階建て以上のビルがありそれから200メートルぐらいなら大した迂回にはならないなと考えていた。

「わかつた、んじゃあもお邪魔するなよ。」

一樹は来た道を戻ろうとする後ろから一人が襲いかかってきたが一樹はスッと横に避けると一人の顔面に飛び膝を入れ倒れた所で顔面を踏みつけるともう一人の男がまた襲いかかってくるが振り下ろされる鉄パイプを受け流すとその腕を掴み後ろに回すと取り押さえた。

「お前等やられキャラの定番すぎだろ、まあいいけどなつ！」

一樹は男の頭を掴むとジルの壁にぶつけ気絶させた。

「無駄な時間を過ごしちまつたな。ちっこんな時間か急がねえと。」

携帯を見ると19:50になっていた。一樹は来た道を戻り車にたどり着くがそこにはゾンビが数体群がつっていたがホルダーからコルト・ガバメントを取り出し全弾使い殲滅させると車に乗り込みコルト・ガバメントに装填を済ませ車をバックさせ大通りに出ると道を迂回させ第一総合病院へと向かうがそれを遠目に見る者がいたが今の一樹に知るよしもなかつた。

所々外灯の消えている通りは見通しが悪く傍らでは人であったものが蠢き呻き声を上げている横を一台の車が走り抜けていった。

一樹は数少ない外灯とヘッドライトを頼りに停まっている車等を避けながら目的に向かつて走っていた。

そのころ正志の家では . . .

「あいつどこ行ったんだ？外も粗方見て回つたけど見あたらなかつたぞ。」

隆は息を切らしみんなのいるリビングに走つてきた。呼吸を整えながら言うがもうそこには一樹はいないのだった。

「離れにも道場にもいませんでした。」

正志も幾分遅れて戻つて一樹がいないのを告げると一同沈黙を介していると梨乃が口火を切つた。

「もしかして一人で . . .」

皆同じ考えだつたがまさかと思い誰も言わなかつたが梨乃が言った事で隆が声を荒げ言つた。

「正志！車あるか！？」

「えつ！？あ . . . 裏門の所に停めたままですけど。」

「違うお前の家のだ！あのバカ多分一人で行きやがつた。」

「まさか！？」

正志は愕然とするなか一同が隆に目を配ると隆は荷物をまとめ始めた。

「ガレージに行けば車あるけど、本当に一樹さん行つちゃつたの！？」

莉奈が隆に聞くが隆は黙つたままマガジンに弾を込めていた。

「自分も行きます！」

「私も！」

正志と梨乃が隆に叫うが隆は眉間にシワをよせ息も荒く黙つていた。

「隆さん！聞いてるんですか！？」

「つるせえ！！」

正志は隆の肩に手をかけて叫うと隆は怒鳴りその手を強引に払いバックを手に持ちその場を飛び出し玄関を出て行つてしまつた。

「隆・・・」

梨乃は小さく呟くとどうしていいのか分からず壁に寄りかかり力なく座り込んだ。

「莉奈！梨乃さんを頼んだぞ！」

正志もそう言つと自分の荷物をバックに適当に詰めるとその場を後にした。

「お兄ちゃん！何処行くの！」

莉奈の叫び虚しく正志には届かず走つて行つてしまつた。

「みんなバカよ・・・なんで他の人の気持ちもわからないで・・・」

梨乃は座り込んだまま泣き崩れてしまつた。そこに莉奈が手を取り梨乃に叫んだ。

「梨乃お姉ちゃん行こう！」

梨乃は手を引かれ何処に連れて行かれるかも分からず莉奈について行つた。

その頃裏門には隆が着いていた。コルト・ガバメントを手にし門に手をかけ外すとゆっくりと扉を開け外を覗いた。

車を停めていた場所にはもう車は無くかわりに数体のゾンビが力なく蠢いていた。

「くそ！やっぱ一人で行きやがった！」

隆は車が無いことを確認すると扉を閉め門をかけた。すると後ろに人影が映りコルト・ガバメントを向けるとそこには正志が立つていた。

「やっぱ車なかつたんですか？」

隆はコルト・ガバメントを下げると黙つたまま頷いた。

「じゃあ早く急ぎましょう。急げば一樹さんに追いつくかも…」

「車は？」

「表門の横のガレージにあります、急ぎましょ。」

正志を先頭に走り出し一人はガレージに向かった。ガレージに着くとそこには梨乃と莉奈がいた。

「莉奈！梨乃さんを頼むって言つただろ！」

莉奈は上を向いて聞こえていないふりをしていてその横には梨乃が黙つて立つていた。

「そんな事より車はどこだ！」

隆は梨乃を一目見ると隆に視線を戻し言つと、正志はガレージの扉を開けた。

「あれです！」

そこには軽自動車があり奥にはシートを被つた車があった。

「この際わがまま言つてられないからな、鍵は？」

隆は軽自動車に近づくと正志が隆を呼び止めた。

「隆さんどうせならこれなんてどうです？」

正志は奥にあつたシートを一気に捲るとそこにはレースにも使われるGT-R32だつた。

「この家に合わない車だな。」

「父さんが免許取れたらお祝いで買つてくれたんですよ。軽よりも幾分マシだと思いますよ。でも壊さないでくださいね。」

正志は鍵を出し隆に渡すと助手席に自分のバックを積もうとしたが隆がそれを止めた。

「正志、お前は一緒には連れて行けない。」

「なんですか？連れて行ってくれるって約束したじゃないですか！」

正志は隆に近づきながら言つた隆はそれを無視するかのように運転席側のドアを開けた。

「何がなんでも一緒に行きますからね…」

正志が言つと隆は急に振り返り正志の頬に右拳を打ち抜いた。

正志は後ろに吹き飛びながら倒れると莉奈が正志に走り寄り隆に叫んだ。

「おじさん何するのよー。」

莉奈が正志の口から垂れる血を持つていたハンカチで拭った。

「正志……お前には守らなくちゃいけない人がいるって言つてただろ？ それは嘘か？」

正志はそれを聞いてふらつきながら立ち上がりて言つた。

「嘘じゃないですよ……」

隆は正志に近づくと急に胸倉を掴んだ。

「じゃあお前は俺と一緒に行つてどうやつて家族を守るんだよー！ー！」

隆は大声で怒鳴つた。するとガレージの表側のシャッターが激しい音を立てて叩かれた。

「くそつ！ 大声出しそぎたか……まだからもう事だから正志お前は残つてここを守れ。」

隆は胸倉を掴んでいた手を外しながら「う」とシャッターに近づき隙間から外の様子を伺つていた。

「隆さん……死んだら絶対許さないっすからねー！」

「ああ約束するよ、あのバカ連れて必ず帰つてくるよ。」

その時隆の携帯の着信音が鳴り響いた。

「ん？ 信からだ！」

メールを開くと同時にピーッとゆう警告音と共に電源が切れた。

「こんな時に充電切れかよ！ かと言つて充電してる暇もねえし。」

隆は携帯を握り締め自分のだらしなさに腹が立つた。

「隆……」

梨乃が閉ざしていた口を開いた。

「どうした？」

「やつぱり私も一緒に連れてって……ううん私も行く！」

先ほどまで落ち込んでいて一言も喋らなかつた梨乃が急に言つたので隆は驚いて何て言つていいのか分からず呆然としていた。

「やつぱりおじさん一人じゃ一樹さん助けるか分からぬから梨

乃お姉ちゃんが一緒に行った方が安心かもね。」

莉奈が言つと隆は我に返り言つた。

「ダメだ！みんなここにいるんだ、一樹は俺が連れて帰るから待つてるんだ！わかったな！」

隆は車に乗り出ようとと思つたがシャッターを開けてしまつと中にゾンビが入つてしまつと思い考えて言つた。

「正志、シャッターはどうやって開け閉めできるんだ？」

「外と中の両方にシャッターの横にBOXがあつてそれで開け閉めするんです。あとこのカードリモコンでも出来ますけど。」

隆は少し考えて言つた。

「お前らは庭に出て俺が合図したらシャッターを開けてくれ、それで俺が出ていつたらまたシャッターを閉めて中に入られるゾンビを最小限にするんだ！正志出来るな？」

隆はそう告げると車に乗りエンジンをかけ何度もアクセルを踏んで調子を確かめていた。

すると助手席に梨乃が乗り込んできてシートベルトを締め始めていた。

「ダメだつて言つただろ！今度こそ無事に帰れないかもしねないんだぞ！」

「それは隆だつて一緒にしょ、私だつて何かの役に立ちたい！隆と一樹がいなかつたら今私はここにいないんだもの。だから一緒に行かせて。」

隆が正志に振り返り同意を求めようとしながらもう正志と莉奈は扉の所に移動していた。

「おじさん、もうここまで来たら一緒に行かなくちゃ男じゃないんじゃない。」

「隆さん、梨乃無事で帰つて来てくださいね。三人の帰り待つてますから。」

隆は呆気にとられ梨乃を横目で見て考えていた。

「だつてさ、宜しくね隆。」

「本当に危険なんだぞ！梨乃の事守りきれないかもしれないんだぞ！それでもいいのか？」

「うん、分かってる。何かあつた時は今度は私が一人を助けるようにならんばる。」

梨乃は隆を真つ直ぐに見て答えると隆はハンドルを力強く握ると叫んだ。

「正志！こつちは準備OKだいつでもいいぞ！」

正志は扉を開け庭に出ると持つていたカードリモコンのCOPボタンを押した。すると機械音と共にシャッターが動き始め下から徐々に外の景色が見えてきた。

そこには先程までシャッターを力いっぱい叩いていた物の姿が見えてくると同時に車はタイヤをスピンさせながら田の前のゾンビを跳ね飛ばしながら颯爽と飛び出して行つた。

それを見送つた正志はすかさずカードリモコンのDOWNのボタンを押すが中に数体入つてきてしまい持つていたコルト・ガバメントで頭を狙つて打つが後ろの狙いはそれで壁に当たり何度も発砲するが肩に当たつたりで致命傷にはならずゾンビの進行を止められずいると降りてくるシャッターに一体のゾンビを挟んでしまい途中で止まつてしまつたため大勢のゾンビの進入を許してしまつた。

正志は庭に出て扉を閉め鍵をかけるが何かバリケードをしないと長くは持たなそうだつた。

「一樹さん……隆さん……俺じゃ一人みたいになれないのかなあ……」

正志が一人で愕然とし肩を落としていると莉奈が正志の背中を音が響くほど叩いた。

「痛つ！何すんだよ！」

「何すんだじやないでしょ！おじさん達帰つてくるまでここは乗り切らなくちゃダメなんでしょ！私もお父さんもお母さんもお兄ちゃんが頼りなんだからしつかりしてよ。」

気丈に振舞つて強がつてはいるが足元は小刻みに震えているのが

見え正志は莉奈を抱きしめた。

「ごめんな、俺がしつかりしなくちゃ いけないんだよな、莉奈の方
が怖いよな。でももう大丈夫だ俺が守るから。」

「うん。」

莉奈は正志の胸に顔を埋め抱きしめ返していた。

「よし、何かここを塞げる物探してこなくちゃな。手伝ってくれる
か?」

「もちろん。」

二人は物置等にバリケードが作れるような物を探しに行つた。

かなりのスピードで走り抜ける車には隆と梨乃が乗つていて一樹
の向かっていった第一総合病院へと後を追つた。

14・病院（前書き）

この回は少し短くなっています。

午後八時を回りいつもなら人通り少なく静けさの中に佇む建物は今日ばかりは違っていた。

辺りには力なく歩く人であつた物は異様な声と共に傷ついた箇所から血を垂らし何かを探し彷徨つっていた。

そこから少し離れた所に建物の様子を伺いながら身を隠してゐる一樹がいた。

一樹は携帯を取り出して見ると一件のメールがあつた。

「直美！」

一樹は我を忘れてメールを開くが直美ではなく信だつた。

『みんなどこだ？電話繋がらないからダメかもしれないがメールしておく。届いたらメールくれ。』

一樹は信が無事だつた事が分かるとホッとし信に返信した。

『みんな無事だ、安全な所に隠れて隆にもメールしてやってくれ。』

メールを送信するとまた辺りを見回しながらゾンビに見つからないように建物へと近づいていった。

あと数十メートルの所にくるとその建物の横に第一総合病院と書かれた看板が見えた。

ガラスで出来た自動ドアの中は明かりはついていて一階のロビー部分見渡せるがそこには数体のゾンビが見えるだけで生存者は見当たらなかつた。

一樹は病院の上層を見ると所々部屋の明かりを見るとそこのはじこかに直美が居ると信じ、突破するタイミングを伺つてゐると静寂の中携帯のバイブ音が鳴り響き近くにいる一体のゾンビが振り向き一樹は見つかってしまった。

一樹は両手にコルト・ガバメントを装備すると一気に病院の自動ドアに向かつて走りだした。

それに気づいた他のゾンビも足取り重く一樹の進路を妨害するかのように両手を前に出し捕まえようとするが持ち前の身の軽さでゾンビの間をすり抜けていきすぐに自動ドアまで辿り着いた。

機械音と共に自動ドアが開くと中にいたゾンビが気づき一樹に近寄ってきた。

ロビーは結構な広さがあり外からでは数体しか確認出来なかつたが中に入ると予想以上の数がいて驚きを隠せなかつた一樹は一瞬固まるがすぐ我に返り一樹は振り返ると外に飛び出した。

外にいたゾンビももう数メートルまで近づいてきていた。ロビーにいるゾンビも刻一刻と迫つてきていた。

一樹は両手に持つっていたコルト・ガバメントを二丁ともズボンに差し込むと横に走り出し病院の壁に上へと続く配管に手をかけよじ登り始めた。

ゾンビの集団は一樹の登る配管まで来ると手を上に突き出し一樹を掴もうとするが既に届く位置には居なかつた。

一階の明かりのついていない窓に辿り着くと中を確認するとそこにはシーツ等が置いてあり人影は確認できなかつた。そのまま上に登ろうとしたが下に群がるゾンビが配管を掴み激しく揺さぶり始めしていく配管を止めているボルトが抜けてきていた。

そのままじや落ちてしまつと感じた一樹はその窓に手をかけると運良く鍵はかかつておらずすんなりと中に入れた。

同時に丁度一樹が居た位置から配管は折れて落下した。

ズボンに差していたコルト・ガバメントを手に取り部屋の中を探索し安全を確認すると通路に通じるスライド式のドア取っ手を握ると少しだけ開き外の様子を伺つた。

すると通路を埋め尽くす程のゾンビがいてドアが動いたのに気づいたゾンビがこちらに向くと一樹と田代が合い咄嗟にドアを閉めるが激しい音を立ててドアを叩き始めた。

一樹は取っ手を力一杯握り開かないようになつたが長くは持ちそうになかつた。近くに置まれて置いてあつたシーツが田代に入り手を伸ばしながら手に取る事が出来ると取っ手に巻き横にある棚に縛りつけなんとかその場を凌いだ。

「なんなんだこの数は！？」

一樹は驚愕し直美の安否も不安になつたが自分に残された時間がない事を考えると例え生きていなくとも限られた時間直美を探す事だけを考えよう決意した。

ドアを叩く音が少し弱まり一樹は携帯を取り出していくとメールが一通着ていた。

信 『一樹どこにいるんだ？ 隆と直美は返事こねえし。』 いつも色々あつて大変だつたんだぜ！ 今そつちに向かつてるよ。』

兄貴 『一樹無事か？』

一樹はメールを読んでいると突然激しい音が鳴るとドアが外れ隙間から何本もの腕が伸びてきた。

「やつべえ！」

部屋を見渡すが他に逃げ場はなく窓に向かい外を見るが配管は途中で折れていて手は届きそうになかつた。

一樹はおもむろにシーツを手に取りまたしても窓に向かいシーツを捻り先端を小さく縛ると配管を支持するボルトに向かつて投げつけた。

すると配管とボルトの隙間に上手く通り先端をキャッチすると同時にドアは倒れ中に数え切れないほどのゾンビが入ってきた。

一樹は後ろを振り返ると窓に足をかけ外に飛び出すとシーツを掴んだまま宙吊りになりなんとか足を壁にかけ配管まで手が届きました上へと登り始めた。

15・救助（前書き）

かなり長い間休んでいましたが少しづつでも更新していくたいと思
いますのでどうか宜しくお願いいたします。

暗闇の中静かに佇む建物の回りに悲痛の叫びともとれない呻き声を上げ彷徨う者、建物の壁を幾度も力強く引っかく指は爪は剥がれ落ち肉さえも削がれ骨が露出しても止めない者の頭上では配管に引っかかり垂れ下がったシーツの少し上に一人の男が配管をつたつて上へと上つていた。

三階を通り過ぎ四階に必死の思い出辿り着いた一樹はすぐ左側の窓が開いているのに気づき窓に手を伸ばした瞬間骨が軋むぐらの強さでその腕を掴まれた！

開いた窓から変貌を遂げた人間が身を乗り出して一樹に襲い掛かってきた！

だが一樹は掴まれている腕で掴み返しそのまま窓の外へと引っ張り出すとゾンビは重力に逆らえず一樹の左腕に爪を食い込ませ傷を残して落下して下に群がるゾンビの上にグチャツ！…とゅう音と共に数体のゾンビを道連れに活動を停止した。

開いた窓の中を身を乗り出し警戒しながら見るがロッカー等が邪魔をして中が見渡せないが腕に少しづつ力が入らなくなってきたのもあって意を決して中に入り込む事に決め、音を立てずに照明についていない部屋に入り込んだ一樹はズボンに差していたコルト・ガバメント一丁を取り出し前方に構えながら月明かりを頼りに部屋の安全を確認したがそこにはゾンビの姿はなかつた。

この部屋はさつきの部屋とは違い少し狭く扉もアルミ製で手前に引いて開けるいたつて普通のドアだった。

「ここは更衣室か……？」

一樹はボソリと呟くとコルト・ガバメントを一丁ホルダーに收めドアに鍵がかかてるのを確認した。

ロッカーに寄りかかりタバコを取り出し火をつけ深く吸い込むと少しばかり肩で息をするとズボンから携帯を取り出し直美にメール

を送った。

『無事なら返事くれ、俺は今病院の四階にいる。』
するとどこからか異音が聞こえ耳を済ませると寄りかかっている

ロッカーから聞こえた。

ロッカーを見つめネームプレートを見るとそこには田木と書かれていた。

ロッカーに手をかけると鍵はかかってなくカチャツと小さな音をたてて開いた。中にはナース服がかかっていて下には見慣れたバックが置いてありそこから異音が聞こえてきていた。

その場にしゃがみ込みバックを手に取り開くと中に異音の正体があつた。直美の携帯だつた。メールを開くと一樹からのメールが着ていたが読まずに閉じて携帯が壊れそつなぐらい力強く握り締めた。小刻みに震え憤りのない気持ちを抱いていると眼下にあるバッグの中の手帳からはみ出でていた写真に気づきそれを取り出すと学生服の一樹と直美だけが写っている写真だつた。

そのまま立ち上がると写真をズボンの後ろポケットに入れ窓に向かって歩きだし窓に辿り着くと息を深く吸うと大声で叫んだ！

「直美、助けにきたぞー！ いるなら返事しろおー！」

一樹は叫び終わると窓から体を乗り出し他の窓をキヨロキヨロと見回していると同じ階の一室の窓から何かが外を覗き込んでいて一樹に気づくとすぐさま顔を引っ込めてしまった。

一樹は急いでドアに近づくとドアの外に何かがいるのがはつきりと分かっていたが今の一樹の思考回路に回り道とゆうのはなかった。ホルダーからもう一丁ノルト・ガバメントを取り出すと一呼吸置いて鍵を開けドアノブを回し勢いよくドアを開くとそこには先程一樹が叫んだのもあってナースや医者のゾンビが群がっていたが一樹の目の前にいるゾンビは一樹を黙認するやいなや後ろに脳漿をぶちまけその場に崩れ落ちたが次々と迫ってきた。

一樹は怯む事なく的確に頭部を打ち抜いていくが一丁共全弾打ちつてしまふが目の前のゾンビに体当たりを放ちながら通路へと

出ると同時に一丁を口に咥えてポケットからマガジンを一つ出し素早くマガジンを入れ替えると銃身をスライドさせるとすぐ目の前に頸が外れるぐらいに口を開いたゾンビが襲つてきていたが下からコルト・ガバメントの銃口を向け発砲すると頸から脳天に銃弾が突き抜けていった。

一樹は先程人影を見た部屋の方にゾンビを跳ね除けながら走ると二階の病棟に比べこの階は更衣室等病院関係者以外立ち入らない階とゆうのが幸いしてゾンビの数も多くはなかつた。

走りながら口に咥えたコルト・ガバメントにも装填を済ませると振り向きながらゾンビめがけて発砲するが走りながらとゆうのもあり当たらなかつたが、やつと人影を見た部屋のドアの前まで来て一樹はドアを叩いた。

「おい！開けてくれ！中にいるんだろ！」

一樹の叫び空しく返事はなかつた。

「コラ！返事くらいしやがれ！」

徐々に追い詰められる一樹はゾンビに向かつて発砲するが数が多くないと言つても少ない訳ではない。

「くそが！」

ドアを力一杯殴りつけると一つ奥にあるドアが目に入りそこに駆け寄りドアに手をかけると鍵はかかっていなく開くとすぐさま脇目もふらず窓に向かっていきコルト・ガバメントをズボンに差し窓を開けると右側の物陰から一体の白衣を着たゾンビが飛び掛ってきたが一樹は一步横に避けると同時に後頭部に回し蹴りを放つと勢いで壁に顔面を打ちつけズルッと血の跡を壁に残して動かなくなつた。

それを確認するとまた窓に向かい体を外に乗り出し隣の窓ガラスをコルト・ガバメントの尻で叩き割りそのまま隣の窓に飛びついた。外にぶら下がつた一樹は割れたガラスで手や指が痛々しく切れ血が腕を伝い垂れてくるが渾身の力を振り絞つて体を引き上げ何か部屋に入ることができた。

その瞬間一樹の頭部に想像もつかない衝撃が走り一樹は氣を失つ

てしまつた。
現在 20:40

16・生存者（前書き）

少しずつでもこゝへしてこられたのを思つので短いかもしませんが御了承ください。

「真っ暗だ……どうだここは……俺は何を……」
 「……あ。……か・き。……一樹……田を覚まして……」
 「樹。」

「直美……？」

一樹はその声に気づくと少し重くなつた田蓋を開き咳くがそこには直美は居なく代わりに一人の男が横たわり後ろ手に縛られた一樹に銃を向けて立つていた。

「おい！言葉がわかるなら動くな！」

男は銃を何度も握り直しながら動くなと聞かれて小さな声で被一樹に問いかけた。

「ぐつ……け……警察？」

一樹は頭に酷い傷みが走るが堪えて体を起き上がらせると田の前にいる男は30代前半ぐらいの警察官だった。

「よし、すまないが念のため縛らせてもらつた。聞きたい事があるんだが何をしにここへ来た？」

「知り合いを助けに来たんだ、だからこれ解いてくれないか？」

一樹は壁を背に寄りかかりながら立ち上がり回りを見るとドアはバリケードで塞がれていてその横には何人かが身を隠していた。

「本当か？わざわざ奴等がうづうづじやいる所に来たつてのか？」

「そうだ。」

「じゃあこれは何だ？」

警察官はバックからコルト・ガバメントとユーナンブを取り出して見せた。

「この非常事態だ少し拝借をせてもらつただけだ、映画でもそういうだろ？」

警察官はバックにコルト・ガバメントとユーナンブを戻すと銃を構え直すと一樹に近寄ってきた。

「信用できないな、申し訳ないが助けが来るまでそのままでいるから。」

「ちょっと待つてくれ俺には時間がないんだあんた達には迷惑かけないしすぐここを出て行くから頼むよ。」

一樹はそう言いながら少し警察官に歩み寄った。

「動くな！この状況だ次は発砲するぞ！」

「わかった！わかったから撃たないでくれよ。……あつ？」

警察官に許しを請うと何かに気づいたのか少し声を出して上を見るつられて警察官も頭上を見た。

その一瞬・・・一樹は前に出されて銃を構えていた手を右足で蹴り上げると銃は真上に弾き飛ばされ天井に激突すると衝撃で発砲され乾いた音の後ガシャーンとゆう音と共に窓ガラスが粉々に割れた。銃は天井に当たり床へと落ちる前に一樹は蹴り上げた足を戻しそこにジャンプし足を縮めると後ろ手に縛られた手を潜らせて前に出し着地すると同時に両手を警察官の首筋に強打した。

警察官は蹴られたのと銃の発砲で驚き何も出来ない所に打撃を受けてしまったので倒れ目を虚ろにしていた、一樹は落ちてきた銃をキャッチしようと思ったが手が届かず床に銃は落ちてしまった。すぐさま倒れている警察官の首を踏みつけ言つた。

「動くな！動くとこのまま首の骨へシ折るぞ！・・・映画とかじやキャッチできるのになあ・・・」

聞いてるかどうかは月明かりだけでは表情が確認できなかつたが縛られていた布切れを口で咥えて解き足を警察官の首に置いたまま落ちた銃を拾い上げると横腹に強烈な衝撃を受け吹き飛ばされてしまい壁に激しく背中を打ち付け銃を落としてしまふと痛がる暇もなく首を締め上げられ壁を背にそのまま高々と持ち上げられた。

「ぐうえ・・・くつそ！」

一樹を持ち上げているのは奥に潜んでいた一人だった。

容姿は髪を上で縛り体格はかなり太つていて浴衣を着ていた、そつ相撲取りだった。相撲取りは一樹を持ち上げたまま更に力を入れ

締め上げていくと一樹は意識が朦朧としてきた。

何とかしようと腹や胸に膝蹴りを入れ顔面を殴りつけるが宙に浮き力が入らないこともありビクともしなかった。

薄れる意識の中開いた口からはヨダレを垂らし口端からは少し泡が出て小刻みに震えていたが徐々に体は脱力しやがて意識は飛んでしまった。

17・責任（前書き）

あつきたりな展開にはしたくないとひつ考えで執筆しこままでのどこか変な所があつましたら気軽にお申し付けください。

意識を失った一樹に更に追い討ちをかけるかのように締める力を弱めなかつた相撲取りだつた。

すると異変が起きた、一樹の体が一瞬大きく跳ねた。

「なつ何だ？」

何か違和感を感じたがそのまま首を折ろうと更に力を入れる相撲取りだつたが一樹の眼が大きく見開かれると一樹の右腕は締め上げる相撲取りの左腕を掴んだ。

段々と一樹の指がめり込んでいく、相撲取りの腕は指が食い込みその部分から血が垂れてきた。

「ぐつぐくく！」

相撲取りは傷みを我慢し首を折ろうと力を込め捻りあげた！

「ベキヤツ！」

部屋に鈍く何かが折れる音が響くと一樹は締められた腕を放され地面にへたり込んだ。

「ギヤアーーー！」

鈍い音の後数瞬送れて部屋の中に叫び声が響くと相撲取りは座り込んで左腕を押させていた。

一樹は首を押さえ細かく大きく何度も呼吸をすると息を整える前に落ちていた銃を拾い目の前に座り込む相撲取りから距離を取り相撲取りと警察官と奥に潜む者に銃を向け威嚇していた。

呼吸が整つてくると警察官の近くに落ちているバックに銃を構えたまま近寄り手にした。

その時ドアの外からドアを叩く音や引っかく音が聞こえた。

「ちつ！ 気づかれたか！ おい、あんた達に危害を加えるつもりはない、だからすまないが出てきてくれないか？ バリケードも確認しなくちゃいけないしこのお相撲さんも手当てしないと。」

すると暗がりからゆっくりと三人姿を現した。一人はナース服を

着ていいので看護士だろう、それに肩を抱かれ出来たのは十歳ぐらいのパジャマを着た女の子、もう一人は眼鏡をかけた痩せた男だった。

「すまないこんな事するつもりじゃなかつたんだ、人を探してるだけなんだ、だからすぐにここを出て行くから心配しないでくれ。分かつてくれたなら手当としてやってくれないか?」

そう言うと看護士は小さく頷くと女の子と一緒に相撲取りに駆け寄つていった。

「この人は大丈夫だなそのうち目を覚ますだろう、バリケードも問題ない。」

眼鏡をかけた男は警察官を見て言った。

「わかった、ありがとう。」

一樹は壁に寄りかかるとバックの中身を見ると全て一樹の物だったコルト・ガバメントに装填を済ましたがコルト・ガバメントの予備残弾はマガジン一個分の7発だった。

バックから荷物を取り出し装備していくと看護士が一樹に言った。

「あの・・・良いですか?」

「何?」

看護士は唾を飲み込み一呼吸置いて言った。

「腕の怪我なんですけどかなり酷いです、骨が折れたとゆうより粉々になつてるんです。添え木なんかじゃなく早急に手術しなくちゃいけないかもしれないです。」

一樹は自分でやつたものの驚きを隠せなく相撲取りの所まで行くと警察官を介抱していた眼鏡の男も近寄ってきた。

「これはまずいな、手術しないとこの人一生使い物にならなくなるぞ。」

眼鏡の男は怪我を見て言った。

「あなたは?」

「こここの医者だよ、それよりもどこをどうすればこうなるんだ?」

医者は眼鏡に指をかけ少し上げて一樹を横目で見て言った。

「……意識がハツキリしてなくてなんか目のが真つ暗になつてもうダメだと思ってて氣づいたらお相撲さんが座り込んでたんだすまない……」

一樹は俯き肩を落としていると相撲取りが言った。

「……大丈夫だ、こ……このぐらいなんて事はないつすよ。」

「何を言つてる……これじゃ少し動かすだけでも痛むだろ。」

「なあに稽古に比べればこのぐらい、しかも素人さんに怪我をせられたなんて親方にしたらそれこそ大ゴトつすよ。」

相撲取りは額にすごい量の脂汗を滲ませ左腕を右腕で押さえながら言った。

「わかつたよ。添え木をすれば少しあはマシだろ。」

医者はパイプ椅子を持ち出し逆さにして椅子の足を何度も曲げると根元から折れた、それを四本共やると相撲取りの腕に添えるとどこからか出したのか包帯を巻き最後に包帯を肘と手首に縛つて輪を作り首にかけた。

「どうだ？」

「ああ大丈夫だ、心配ないつす。」

少しばは楽になつたもののその傷みは想像がつかないぐらいなのだろう表情は曇つたままだった。

「…………すまない、こんな事するつもりじやなかつたんだ……」

「氣にするな、俺だつてあんたを殺すつもりだつたんだからこのぐらいで謝らなくていいつす。」

「本当にすまない、本当何て言つていいのか……そうだこれを。

一樹はバックから二コーンパンツを二丁出すと医者に渡した。

「これは？」

「一つはそのマッポのでもう一つはないよりマシつて事で良かつたら使つてくれ、全部渡してもいいんだけど行かなくちゃいけないから必要なんだ……本当に迷惑かけたすまない、そのマッポにも気づいたら謝つておいてくれ。」

一樹は窓に向かい携帯を見ると時間は21・30を過ぎていた。

「君はどこに？」

「人を探してるんだ、この病院のどこかにいる筈なんだよ。」

「その人は一体誰なんだ？こんな危険を冒してまで助けようとするなんて大事な人なのか？」

一樹は少し黙り窓の外を眺めながら言った。

「この病院の看護士で田木つてやうんだけど昔からの・・・友人なんだ。」

「田木？あの田木か？」

「田木先輩の事ですか？」

二人共ほぼ同時に言うと一樹は振り返り看護士に近づくと 肩を掴み揺さぶった。

「知ってるのか？どこだ？どこに？直美はどこにいるんだ！」

我を忘れた一樹は看護士力強く掴み揺さぶっていると医者に制止された。

「ちょっと君それじゃ知つても話せないだろ？」

一樹はハツとしすぐに手を離した。

「すまない、わかる事があつたら教えてくれ、頼む！」

田木先輩は外にいる人達が溢れ出す前に自衛隊？の人達が来て避難したと思います。私もその人達に連れていってもらう筈だつたんですけど人波に飲まれて出遅れちゃつて、そうしたらこの子に会つてどうしていいのかわからなくて隅でじつとしてたらおまわりさんに会つたの。それで外より中に立て籠もる方が安全だとやう事でここにいるんです。あつ田木先輩は車に乗り込む所見たから大丈夫だと思いますよ。」

「私も似たような物だな。」

一樹は直美が絶対ではないにしろ無事だというのを聞かされ安心しその場に座り込んだ。

「それでその自衛隊？はどこへ？」

「ごめんなさい、そこまでは分からぬの。」

「そつか……それだけでもわかつただけでも良かつた、ありがとう。」

一樹は再び窓に向かおつとすると医者が少し考えて言つた。

「もしかすると……。」

「何か知つてゐ事でも！？」

一樹はまたまた皆がいる所に戻つた。

「いや、絶対ではないから聞くだけ無駄かも……。」

「それでもいい！教えてくれ！」

「本当に多分なんだがうちの院長はその手の人達に知り合ひが多いから何か手がかりがあるかも知れないと思つたんだが、この状況じや院長室まで辿りつけないから無理……か。」

「その院長室はどこなんだ？頼む教えてくれ。」「多分……。」

医者は歩き出し窓の外を覗くと一樹を呼んだ。

「君ちよつと、三階のこの真下の部屋がそうだよ。」

一樹は下を見ると一階に別棟に繋がる渡り廊下があるのが見えた。

「真下か、わかりました行つてみます。」

一樹はバックを手に取ろうとして屈むと後頭部に何かが押し当たられた。

「動くな！」

それは警察官が一樹に銃口を突きつけていた。

「よおし両手を上げてゆつくりこっちに向け。」

一樹は言われるままに両手を上げゆつくりと後ろを向いた。すると警察官に顔面を殴りつけられ顔は横に向いたが何事もなく前を向き直した。

「話しさ聞かせてもらつたぞ、俺も一緒に連れて行け——ここのいつ奴等が入つてくるかと思うと安心してられないからな。」

警察官は顔色が悪く何か鬼気迫るものがあつたので一樹は逆らわないで従おうと決めた。

「わかつた、だけど避難場所がわかるかどうかは確かじやないんだ

ぜ。それでもいいのか？」

「それでも「」よりはマシだ！」

「「」の人達どうするんだ？お相撲さんは俺のせいで怪我させちまつたし女の子だつているんだぞ。」

「俺に指図するな！そんなの知るか！この状況でもお誰かの事なんて構つてられるか！どうにかしたいなら自分がどうにかしろ。」

一樹はこの状況をどうするかなんて思うより何か手がかりを見つけ隆にメールするとゆう考えに切り替わっていた。

自分に残された時間で精一杯出来るのはそれと、この人達を守るぐらいだと考えていた。正義心とかじゃなく自分がここにこなれば警察官もこうならなかつたかもしぬないし相撲取りも怪我をしなかつた。

「わかつたじやあ俺が行つて来るから待つてくれ。」

「ダメだ！俺も一緒に行くぞ！逃げられたらたまつたもんじゃないからな。」

一樹は窓に振り向こうとしたら警察官に抑止された。

「ちょっと待て持つてる拳銃をこっちに渡してもらおうか。」

警察官は右手で銃を一樹に突きつけ左手を前に出すと一樹はズボンとホルダーからコルト・ガバメントを出し渡した。

「これで良いか？良いならどうする？俺が先に行くか？」

「指図するな！どうやつて行くつもりなんだ！？考え方もあるのか！？」

一樹の頭部に銃を押し当てる怒鳴るとそれを避けるように後ろを振り向きカーテンに手をかけ下に力一杯引くとカーテンレールからフックが外れ手に取るともう一枚のカーテンも同じ事をし一枚を縛り合わせると窓と窓の間の冊子に縛ると外れないか何度も引っ張り確認した。

「どうする？あんたが先か？俺が先か？」

縛ったカーテンを警察官に向けて差し出して言つと銃口で窓の外を指され行けと指示された。

「無茶だ！彼は銃を持つていらないんだぞ、みすみす死に行くよつなもんだぞ！」

医者が警察官に近寄りながら言つと警察官が医者に振り返つた。

「動くなー。じゃあお前が変わりに行くか？」

「俺なら大丈夫だ。」

一樹は医者を見て小さく頷くとシーツを握り開いた窓から外に投げ出すとそのまま飛び降りた。

「何！？」

警察官は慌てて窓に駆け寄り下を見ると渡り廊下の上に何事もなかつたかのように立つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5972c/>

DEAD

2010年11月11日00時54分発行